
死街地忌憚

神坂 鬼一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死街地忌憚

【Nコード】

N3972A

【作者名】

神坂 鬼一

【あらすじ】

戦争が一つの核兵器で終わりを告げ、死街となった東京に生きる者達の物語。少女は銃を持ち少年はナイフを持ち死街の中心では、今日も銃弾の雨が降る。

一話（前書き）

この小説内では、少々残酷な描写が多々あります。
少しといえど、心構えだけ、お願い致します。

一話

第一部

あの日、東京は何十年か振りの戦火に包まれた。某三大国の戦火が関係のなかった日本を巻き込み、東京の夜間営業バーからアパート、旧国会議事堂に至るまで、すべてを焼き尽くした9ヶ月に渡る戦争は、大国の内の一つアメリカが日本を斬り捨て単独勝利と言う形で終わる。わが国の死者は推定5万人を超え、日本政府のアメリカへの降伏、及び東京以外の貿易都市、工業都市の明け渡し。この二つによって、日本の平和な時代は幕を下ろし、それと同時に東京の無秩序都市化が始まった。この戦争は後に第3次世界大戦、もしくは三国大戦、六ヶ国大戦と呼ばれるようになる。

私はあの日、友達と一緒に学校から帰る途中だった。いつもの用に女友達と喋りながら歩き、時々クラスメートの男子が寄ってきて話に混ざってきたり、サッカーボールを追いかけているが走り去っていったりと、相変わらず退屈で平和な日の終わりだったのだ。

だが、それが一瞬にして目の前から崩れていった。私が自動販売機でオレンジジュースを買おうと友達の列から離れた時、私の背中に熱いとも冷たいとも思えないような風が通り過ぎて、次いで地鳴りのような音が耳に響いた。

私は思わず目を閉じ、耳を手で覆い、膝を地面に落とす。ようやうく、地鳴りが鳴り終り、私が目をあける頃には、そこに地獄のような光景が広がっていた。私が立っていた店の向こう側が溶けた様に無くなっていて、その真ん中には綺麗に、右半分だけが溶けている男店主と、隣には死んでいるはずなのに何時間も煮込まれていたかのように、ドロドロに溶けて目だけが動いている人間だったモノが在った。

私は友達が歩いていった方向に首を向け、その光景を目に焼き付ける。死んでいないのに生きてもいない。目を動かせるが見えていない。人だったのに形が無い。そこに退屈な日常などありはしなかった。

ラジオをつけてみると、一応電波は通じているらしく、途切れ途切れの情報が耳に入ってきた。どうやら、戦争の巻き添えを食らったらしい。アメリカが他の国に力を見せ付ける為、兵器を日本に落としたのだろう。続いて、男の声が聞こえてくる。こちらは被害情報を伝えている。まるで他人事のような口ぶりで淡々と……。

そして、後にこんなふうな言葉が付け加えられていた。被害を受けた都市を隔離し、住人はそこから出ることを禁じ、中に入るための電車一本を残し全てを止める。

その時、初めて私たちが飼育箱の中に詰め込まれた、動物のような扱いになったことを知った。無論、アメリカからの謝罪など一切無く、一部の人間は気が狂ったかのように、残った家族を襲ったり、気が触れたようにケラケラと笑っていた。

例えるなら、それは生き地獄。人を例えるなら、それは飢えに飢えた獣。

後から調べてみた所、東京の真ん中を除いてドーナツ状に被害を受けていた事がわかった。勿論、周辺の県も被害は受けたようだが、こちらとは違い地震で倒壊したような状況だった為、完全復興は時間の問題であろう。だが、東京はまるで違っていた。焼け野原と言ってもなく、建物や人それから動物。まるでカレーの具材にでもなったかのように、ドロドロと流れ、あるものは不敗臭を発し、あるものは奇声を上げ、殺してくれと近くに居る者に懇願している。

精神が安定していた者も、それを見て発狂していった。

再びラジオから『生き残り、放射能を受けてしまったモノを駆除するため、殲滅部隊を派遣する。一人殺せば五万円、十人殺せば百万円』まるで狩りを楽しむ獵師の様に、アナウンサーは楽しそうに

言った。きっと、周りの人間は一人も聞こえていないだろう。

今、生きている事が出来ても、明日になったら殺される。それを知っているのは、私一人だけ。

それなのに、私は涙も出なかったし、気が狂うこともなかった。私の頭は理解していたのだろう。この日が来る事を確かに理解していた。そして私は銃を取り、狂った街中を住み慣れた街のコンクリの上を歩き始めた。ずっと、幼い頃から聞かされていた、あの唄に沿いながら。

私は頬に当る冷たい感覚で目を覚ました。

まったく、この街は何故こうも変わらずにいられるのだろう。普通、もっと落ち込んだりしても良いだろうに。よく、こんなつまらない日常を繰り返せるものだ。

全員そんな事を陰で言っているだろう。

そう愚痴を零しても、結局は皆『つまらない世界』に入り浸って生活している。何せ、未だに学校や図書館は通常通りに通わされているのだから、人間の無駄なほどに大きな生命力はゴキブリ並と言っても良いくらいだ。

こんな事を考えている私も、その世界の中の一人なのだから、まったく呆れてしまう。

ソレでも私はマシな方だろう。他人、友達、両親とさえ深く付き合う事は無かったのだから、誰かが死んでしまつて他の人と関係がギクシャクしたり、心が病んだりする事も無かった。そう考えれば、私は『面白い世界』に足を踏み入れている事になるだろう。とは言え私はコンクリートに寝転がり、街に残っている数少ないネオンに目を向ける。なんて、空っぽな空間だろうか。人も居なければ車も通らない、住んでいると言えばゴキブリと野生化したペットぐらいである。そんな所で住んでいる人間たちなんて、碌なものではない。「お、不良の逆引き籠もり少女は今日もゲーセンで寝泊りか？ そんな格好で寝てると悪い男に攫われちゃうぞ」

せつかく、闇に落ちていた意識が引き上げられ、私は声の主の方に向かって、出来るだけ不機嫌そうな顔で睨みつけながら、その顔を見ようと身体を起こす。と、同時に今まで地面に付いていた、ウザったいほどに伸びている私の赤い髪が顔に掛かった。赤と言っても染め損なった部分が所々にあるため、お世辞にも綺麗とは言われないだろう。

「なんだ、シロか。今日が家賃の支払日なんだ。今帰ったら、アンタの耳についてる穴より大きいのを付けられる。」

乱雑に切られ、ボサボサになった茶髪、両耳にピアス、そして何より夏だと言うのに暑苦しいほどに着込んだコート。それはまさしく、私の唯一といって良い『真つ当な知り合い』であり、私の天敵である、白羽キヨウ。それに間違いなかった。

だが、何故か向こうは嫌な顔をしながら、私の顔を睨んでいる。

「その名前は止めるって言わなかったかミケ？」

「じゃあ、貴方も名前前で呼ぶのを止めてくれない？ 随分前にも、

苗字で読んで欲しいって、言ったんだけど」

葉月己家、自他ともに認める引き籠もりで中学を2年で中退、引き籠もりのくせにアパートに帰らず、様々な事をしながら自給自足の生活を続けている不良少女。仲良くなかった母親と姉は戦争で死に、父親は東北の方へ行つたきり、家には帰ってこない。

コレが、戦争が終わってから私の足跡だ。随分変わっていると言われるが、目の前の茶髪男ほどではない。何せコイツは、女好きで酒類好きのくせに女性恐怖症で、酒に弱い。これだけ変な奴は他に見た事がない……と言っても、今はこいつしか真つ当な知り合いが居ないから、比べようが無いのだけれど。

ついでに言っておくと、コイツは高校に通っている。不良のような格好をしているが、テストの成績は毎回の様に10位以内をキープしている為、髪の色を元に戻しピアスさえ取れば、いい大学から推薦が来る。と言われているらしい。それでも本人にやる気が無いのつまり、宝の持ち腐れというやつだ。

「まだ、対人恐怖症は治ってねえのか？ 数少ない友達の一人なんだから、名前で呼ばせてくれよ」

そう言って、シロは悪戯っぽい笑みを浮かべたまま顔を近づけてきた。

「酒臭い」

その言葉と同時にシロの顔面に私の拳が入り、彼は仰け反るようにして道路側に倒れてしまった。そう言えば、こいつ喧嘩には滅法弱いと評判だった。この前は中学生の3人組に囲まれてオロオロしてたのを見た事がある。まあ、放って置いた私も私だけだ。

それにしても、此処で倒れているコイツをどうしようか。いや、考える間もなく結論は出ているのだけれど。

「放って置いても死なないかな。バカは風邪ひかないってね」

結局、そのあとホームレスの人やら野次馬が来て、シロを担いで何処かへ連れて行った。

今は、公務員である警察は全く動きもせず、女で遊び、拳句の果てには麻薬売買にも携わっていたりする。変わりに、ホームレスの人間や家と家族を無くした人達がボランティアのように集まり、無料で犯罪者を伸している。とは言え、被害者から礼金を貰い、その上で犯人から金品を剥ぐ事ができる。

ある意味、一番美味しい仕事と言っても過言では無い。ちなみに、私はホームレス達とは仲が良い。戦争後からの付き合いの者も居るし、クラスメートの子も混じっている。

そういえば、さっきから妙に視線を感じる。ああ、濡鼠みたいな格好だからか。いや、それにしても、これは見られすぎている気がする……な。

「っ……付けるの忘れてる」

この雨、早く止んでくれないかな。

さて、目も覚めてしまったコトだし、久々に放ったらかしにしている家へ帰るのも良いだろう。勿論、濡れた服の上から布を巻いて

おいた。

滞納している家賃は、まあ何とかなるだろう。

……ああ、そう言えば郵便受けもそのままだったんだな。今頃は新聞やハガキが溢れている事だろう。

歩く事、十分。コンクリで覆われた、いたって普通のアパートに辿り着いた。周りを囲んでいる庭と思しき箇所には、雑草が生い茂り、陽のあたらない場所には、キノコや苔も生えている。そんな風景を尻目に、私は非常階段を重い足取りで上っていく。

全く、私以外に住人なんていないのに、なんで最上階まで上らなければならぬのだろう。そう愚痴りながらも、私の部屋の前に辿り着いた。

案の定、郵便受けは新聞とハガキで溢れかえっていた。それに付け加え、固化化しかかっている牛乳、カビの生えたパンまでもが入っている。しまったな、これは想定外の範囲外だ。とりあえず、手で触れないものはゴム手袋をはめながら、ビニール袋に放り込んでいく。途中、私に宛てられた手紙が何枚も見つかったが、殆どが私を中傷するような手紙だった。

「三十六枚。よくこんなにも書いたものね」

結局、中傷の手紙は同じ住所のものが三十枚と別の手紙が六枚。あと、白紙のをあわせると四十八枚。しかも三十枚の手紙は、全て切手が張っていない。ホントにご苦労なことだ。マシな手紙は四通ほど。しかも、電気の供給取り止めを知らせるものだった。まったく、今日は嫌な事ばかりが続く。

そういえば、この郵便受けの収容量に際限は無いのか？ 前は五十枚くらい入ってたコトがあったぞ。

「ん、まだ一通余ってたか」

差出人不明、住所も無し、切手は貼られており、宛名だけは書かれている。そして裏には緑色のインクで、近くの公園の名前が書かれている。ああ、どうやらコレがトドメのようだ。

私には一応定職がある。筑三十年の五階建てアパートを事務所にしながら、まともでない仕事をしているのだが、最近では減法少なくなつた。

「此処のアパートを貰いたいのだが、幾ら程出せば宜しいかな」

声をしたほうを振り向くと、そこにはサラリーマン風の髪をきつちり整えた男が、スーツケースを持ったまま額の汗を拭きながらポツリと立っていた。見た目普通だが、明らかに持っている物が場違いすぎる。第一、此処の住人が建物を変える事などない。こいつは「私と同じ側」の人間だ。

ああ、見ない振りをしたかつただけけれど、どうやらダメらしい。仕方が無い、面倒臭いが仕事をしないと、こつちも生計が立たない。「生憎、お金は欲しいのだけど、住む所がなくなると困るの」

私は渋い顔をしながら無感情に、そう言い放つた。男の方から臭つてくる整髪料の独特の匂いが鼻につく。

「新参者なら覚えといたほうが良いわよ。ここじゃ、決まった人間と時間にしか銃口を向けてはいけないっていう規則があるの。わかつた？　こんな、ボロアパートよりダンボールの中で暮らした方が断然、金は儲かると思いますよ。なんなら、良いダンボール建築士でも紹介しましょうか」

向こうは最初から聞くつもりも無いのだろう。すでに懷から拳銃をちらつかせている。

正直、呆れた。脅している暇があれば、スーツ越しから撃ちこめば良いのに。そうすれば、素人なら簡単に仕留めれただろう。もし相手が玄人だとしても、充分な威嚇になった筈だ。

それでも、男は笑みを崩さずに此方へ一歩ずつ近づいてくる。

「大人の言う事を聞かないとダメですよ」

最後の方は聞き取れなかった。

私の体が後ろへと跳んだ瞬間、耳を覆いたくなるような轟音が人気の無いアパート街に響き渡る。

男が持っていたのはイタリア製のサブマシンガンSMG821…名前と格好だけは知っていたが、実物は見た事がない。随分前に生産が止まった筈だが、まだ在るとは思わなかった。

だが、撃ち込めば言いという物でもない。銃と言うのは当らなければ、子供達のエアガンの撃ち合いと何ら変わらないし、反動も大きい。

結果、私への被害はゼロだった。勿論、事前に反応しきれたと言う事もあるが、向こうの腕が悪かったのが大半の理由だろう。ただでさえ命中性の無い銃を撃つていると言うのに、完全に腕がブレていたし、撃ち終わった後も装填の仕方がまるで素人だった。

「おう、客人在るみたいだな。やんちゃ娘」

不意に後から声を掛けられる。良く見知った、いや覚えざるを得ない顔があった。

長く癖毛の多い髪を色付きの輪ゴムで括り、無精ひげを生やしている。どう見ても変質者染みた格好で、普通の子供なら見るだけで逃げ出しているだろう。

「うるさい。私は呼んでないし、コンティニュー無しのシューティングゲームなんてやりたくないわよ」

「ああ、ちなみに一発撃つたら三万円だからな」

「アンタ、それでも市民を守る警察官？」

「ホームレスだよ……お？」

会話は途切れ、男の手が握っているサブマシンガンが再び無数の鉛玉を吐き出す。

今回は流石に不意をつかれたが、肩と膝に一発ずつ掠っただけに終わった。とは言え、やはり痛いものは痛いし、生身なのだから血は出る。私は痛みに耐えながら、充分に立てになりそうな壁まで逃げ込み。体に巻いていたタオルで、二つの傷口を止血する。

「おい。なんで俺まで巻き添え喰らわにやいかんのだ？ 今はライターと御守りしかもってないんだが」

気だるそうな声が横から聞こえる。

「なら発砲許可をもらえませんか、保安官さん？」

すぐに身体を離して、代わりに後の部屋のドアに身体を預けた。

「だから、ホームレスだよ。んー二万円」

「分かった五千円ね」

「……おい」

私は、横から聞こえる憎らしい声を無視し、背中を預けていた部屋の扉を開けて、中に入った。生活観の無い、空っぽの箱のような部屋にドアの閉まる音だけが響き、窓から入って来る陽の光だけがぼんやりと顔に掛かる。窓のカーテンを閉め、光を完全に遮断し、少し乱れていた呼吸と衣服を整える。

ゆっくりと足音が近づき、そして止まる。

おそらく、ドア越しに撃つ事はしないだろう。向こうは真正面から撃ってくる事はあっても、逃げた獲物を追ってくる血気盛んなタイプじゃない。

そして、それが良い判断か悪い判断かと言えば、どちらでもない。

ドア越しに無闇やたらと銃弾を撃ち込むか？ そうすれば一発は私に当たるだろう。だが、ドアに設置型の爆弾が仕掛けられていれば、一発目で自分の上半身がはじけ飛ぶだろう

ドアを開けて手榴弾を投げってくるか？ それなら、安全に私を殺すことが出来るだろう。だが、空けた瞬間に銃口が向けられているかもしれない。

ドアの前で立ち止まって、出方を伺うか？ 窓から逃げられるだろう。

なら一番、良い方法は何か。

「……火薬臭いねえ」

「全く、こちらの経済状況を考えて欲しいわね。一部屋吹き飛ばされるだけで、何十万払わなきゃいけないのか。頭が痛くなるわ」

「はは。こっちは耳が痛いよ」

こちらの会話が、終わるか終わらないかという微妙な折に、目の

前を黒い板が通り過ぎ、続いて破裂音が聞こえた。

どうやら、さっきの板は吹き飛ばされたドアの一部らしい。部屋ごと飛ばされはしなかったものの、焦げ臭い臭いが部屋に充満している。

私の隣で突っ立っていた「自称ホームレス」が両手を挙げて呆然としていた。

部屋の片隅に無造作に置いてある棚の上から、おもちゃコーナーに置いてある様なモデルガンのひとつ手に取った。

「これから、うるさくなるわよ。その手、耳に当てときなさい」
別におもちゃで威嚇しようとは思わない。

私は、モデルガンの銃口を玄関の人影に向ける。

まだ撃ってこないのは、思ったよりも音が出てしまい、動揺しているのだろうか。いや、武器を持ち替えている。サブマシンガンより威力が高い重火器が、それとも拳銃か。

どちらにせよ、警戒するに越した事は無い。

「なあ、降参しようよ。ねえ？」

後から、また情け無い声が漏れる。

「今、どうやって逃げようか考えてるから、黙って」

向こうも、先ほどの一撃で手札が無くなったのか、そこから動く様子は無い。B級ドラマのように先に動いたほうが負け、なんてことは無い。

もし、こちらが握っている物がモデルガンだと分かれば、向こうは撃ってくるだろうし、分からなければ、銃を下ろしてくれるか……まあ、撃ってくるだろう。

そう考えると、向こうの方が何倍も動き易い。未だに撃ってこないのは後ろに居る、アイツのおかげである。

膠着した状態が二分程たった時、以外にも私の後で竦んでいた「自称ホームレス」の手から、丸い輪のような物が投げられ、地面で破裂した。俗に言う、ネズミ花火である。

茶地なものであったが、以外にも男は驚いた様子で、充分な隙が

で来た。

「ナイス。そちの引き出しから、何でも良いから銃とっ……て」

「逃げるぞ。昼間からドンパチなんて、やなこった」

「自称ホームレス」が私の片腕を引つ張り、窓へと走る。

「バカ。背向けてどうするの！」

叫んだと同時に、カーテンが開けられ再び眩しい光が部屋に差し込む。それを合図とばかりに、再び銃弾が飛び交う。とはいえ、こちらは一発も撃てずに逃げているのだから、一方的に打ち込まれていると言ったほうが良いだろう。

だが、奇跡的にも致命傷になるような場所に、弾が当らなかったのが不幸中の幸いだろう。ただ、肩と足のキズより十倍痛かったが。私は窓を開け放ち、枠に足をかけた。

「あ、れ？　ここ高くない？」

「当たり前でしょ。五階なんだから」

溜息も吐けぬまま、横で膝を震わせている荷物を手に取り、思ったより近く見える地面へと飛び降りる。顔にぶつかる風がやけに気持ちいい。

最初は抵抗していた荷物も、今では借りてきた猫のように大人しくなっている。

そう考えている間にも、私たちと地面との距離は縮んでいた。そろそろ、頃合だろうか。

私は身体を捻り、出来るだけ衝撃を和らげられるよう、仰向けの状態から直立の状態へ体勢を変える。途中、背の関節が軋んだが、気にしない。

程なくして、片足が地面に接し、大人二人分の体重と重力分の重さが足に加わる。

だが、痛みはまるで無い。

「葉月。塀から落っこちて、真つ二つに割れたのはなんだったけか？」

「卵でしょ」

「俺は長い間生きてきたが、五階から落ちて、割れなかった卵なんか見たことねえ」

「ゆで卵ならカラしか割れない」

なるほど。と言ったか、言わなかったは聞き取れなかったが、私は隣に置いてあったバイクにカギを差し込み、エンジンをかける。

この街で、無免許運転は日常茶飯事だし、免許センターなんてものは、あるはずも無い。

これも、自分がゴミ捨て場から拾ってきたものだから、どう使おうと自由だ。別にこれで逃げ切れるのだから、念には念を入れたい。私はモデルガンの銃口を部屋に向け、引き金を引いた。

出てきたのは、BB弾でも煙でもない。ただ無機質な力チツと言う音だけ。だが、それと同時に、今まで銃弾が飛び交った部屋が一瞬にして焼け飛んだ。ただ、それだけの事。

「どうせ、あそこは使う機会も無かったんだし、良いでしょ？」

「爆薬一箱につき、一万円」

さっきまで震えていたと言うのに、この立ち直りの速さは何だろう。

「助けてあげたんだから。千円で良いでしょ」

そう何度も金を払わなければいけないとなると、コッチの生活にも以上が出てくる。

生憎、缶詰数個で細々と食い繋いでいく生活なんて、考えただけでも嫌になる。

「こっちは、女房とガキが家でニコニコして待つてんだよ」

「遺影の中で？」

「おう。お供えものは、ステーキか刺身かホールケーキかなに言いたいと思う？」

先ほど、出せなかった分の溜息と混ぜて、深く息を吐き出す。

この男ならやりかねない。以前、コイツの身内が収まっている墓の前を通った時は、確か特上の寿司ネタが置かれていた気がする。しかも半分腐っていた。

多分、死人をここまで大事に扱うのは、コイツが死に際が迫っている爺さん位だろう。

「とりあえず、私はステーキなんて高級品は食べた事無いわ」

「はは。どうりで胸が無い筈だ」

私は急ブレーキを掛け、後に乗ってバカ笑いしている荷物を地面に捨てる。そして公園に向かい、傷だらけのバイクを走らせた。

一話（後書き）

ここまで読んでいただき、大変嬉しく思います。

如何だったでしょうか？ と言っても、まだ冒頭。

ここから、もっと広げていくので何卒、長い目で見ていただけると嬉しいです。

二話

第二部 灰色の雨

ずっと昔から聞いていた。とても綺麗な、あの音を。

一瞬しか聞こえない。ゆつたりとした、あの音を。

私はずっと聞いていた。生きているモノが止まる音を。それは、ちよつとした他人からの悪戯。それは、ちよつとした人間の贖罪の形。

私たちは混ざっていった。身体じゃない、すべてが混ざっていた。そして、私は選ばれる。小さな小さな人形の一部。そんな、雨上がりの日暮れ。

伽藍としている公園。数年前なら、幼児を背負った主婦や遊具で遊ぶ小学生の姿もあったのだろう。きっと、楽しい声が届いたり、口喧嘩をしたりして泣いている子供もいた筈である。

それは騒がしく、耳に痛かったかもしれない。時に殴ってやりたいたと、思う時もあったかもしれない。だが、今はそれが懐かしく思えてならない。

私は空想の世界から、現実へと意識を戻した。まるで、キノコが繁殖しているかのように横スレスレで建てられたダンボールハウス。所謂、ホームレスの寝床であるのだが、ホームレスと言っても、リストラされた人間や中年の男ばかりでは無い。むしろ、戦火により帰る家を無くした子供や、目の前で友達が溶けていくのを目の当た

りにし、塞ぎこんでしまった中高生も此処に居る。

だが、今は構っている暇は無い。随分と遅くなってしまったであろうが、余程大切な仕事なら一ヶ月くらいは、待ち惚けをしている奴もいるだろう。数日で帰って行く奴なら、そんなに急用でもないし、金も持っていない。

これで、生計を成り立てている私は随分いい加減だと思う。

「あ、姉ちゃん。こんなトコに来るなんて、珍しいね」

下の方から、声変わりのしていない、未成熟な声が聞こえた。私は半歩ほど下がり、じっと見つめてくる、その小さな双瞼から目を逸らす。

「倉谷さん、痣だらけで帰ってきたよ。あれ、お姉ちゃんの仕業っしょ？」

「まあ、ほんの小さな事故よ。ところで、この辺で外部の人間見なかった？ 福朗くん」

美袋 福朗。小学生の時に六ヶ国大戦の戦火に巻き込まれ、肉親を無くした上に実家が無くなってしまった為、ホームレスをしている。ただ、街の裏道や地下水道の構造などを把握している為、犯罪の取締りには一役買っている。

本人曰く「好奇心旺盛な悪戯っ子の特典」だそうだ。その福朗がある大きな木を指差した。

「さっきまで、あそこにスーツの男の人が立ってた。なんか、訳ありみたいだったけど、少し前に姉ちゃんのアパートの方向に歩いてったよ」

これは予想外だ。余程の急用がある、金の持つてる客かもしれない。面倒な仕事でない限り、引き受けるのが吉か。ああ、でも事務所まで探ったんなら、面倒臭いんだろう。

金か時間か。私の頭の中で天秤が不安定に傾いたりしている。

「ま、仕方ない。面倒臭いのが仕事、仕事……と」

私は再びボロバイクに跨りエンジンを掛ける。

「そうだ、姉ちゃん！ うちの隣の多恵さんたえが赤ちゃん産まれたか

ら、今度見に来てくれって言ってた！」

苦笑しながら、人差し指と親指で輪っかを作った。

そして再び、私は非常階段を重い足取りで上っていく。

全く。私は一応、標準体重より軽いと言うのに、なんで簡素なダイエットみたく、最上階まで上らなければならぬのだろう。そう愚痴りながら、私は先ほどまで鉛が飛び交っていた場所へと辿り着いた。

と、後から階段を上る足音が聞こえ、振り向く。さっきのサラリーマンを彷彿とさせるようなキツチリとしたスーツを着ていたが、頭がとても涼しそうだ。これ以上は敢えて考えるのは控えよう。

「もう諦めようと帰るところだったんですよ。いや、良かった」

そして、頭のスイッチを切り替える。

「すいません。こういう仕事の仕方なんで、私としても間に合ってた良かった」

あくまで無感情に、そして皮肉を籠めて口元を吊り上げる。

「死街地三丁目夜音アパート五階……葉月駆逐請負事務所へ、ようこそ」

この街で行われたのは、戦争と言う名目の実験だった。人の殺戮が目当てじゃない、ただの実験。生き残った私たちは、確かに実験に置いて特異な物となった。

例えば、私はネコのように身体が柔らかくなり、結構な高さから落ちても、体勢を立て直せるようになったし、今は夜目がきく。別段、不自由では無いのでいいのだが、もちろん成功例ばかりじゃない。失敗作も、少なからずいると言う事だ。

それは、犬と不完全にくっ付いてしまった異形な男だったり、理性を完全に失い、生きてる身内を襲って喰らう人間だったりする。つまり、害が在れば殺す。と、言うのが私の仕事なのだが。

たまに、外部から純粋な殺人を頼まれる事がある。そっちの方が、

収入多いから嬉しい。

部屋は半年近く放っておいたせいか、クモの巣やホコリで一杯だった。ついでにコーヒーを取ろうと冷蔵庫をのぞいたら、冷凍庫のアイスがドロドロに溶け、野菜室のキャベツには元気に動き回る青虫がいたが、とりあえず見なかった事にしよう。

クーラーもつかなければ、扇風機もつかない。おまけにソファーに座っている男はスーツ姿で汗まみれ。まったく、なんて暑苦しい空間だろう。

「とりあえず、この紙に貴方の名前と住所を書いて。くれぐれも偽装はしないように」

そう言つて、ホコリの被ったメモ用紙とインクが少量しか残っていないペンを渡すと、その中年の男は手馴れた様子で自分の名前と住所を書きながら、愛想笑いをした。

「いや、それにしてもビックリですよ。まさか女の子、しかもこんなに幼いとは」

「外見で全てを決めるのは、止めた方が良いでしょう。そんなに信用がないのなら、お金は後払いで結構。終ったら、そちらにお伺いします」

そう皮肉交じりの言葉を返し、私は書き終えているであろう紙を男の手から取り上げ、住所を確認してからゴミ箱へ放った。私は案外コントロールが良い。野球のボールを十回投げたら、六回は真ん中に当てる自信はある。まあ、今回は目標から外れて壁に当たったのだが、人間なのだから、こういう事も稀にある。

と、用も済んだ事だし、このオジサンには帰ってもらおうと思う。

「あ、あの。まだ、写真をお渡ししていないのですが」

……断じて忘れていたわけじゃない。帰り際に貰った方が効率的に良いじゃないか。

「机に置いて帰って。私が他人を嫌うって事は、噂で聞いてるでし

よ
」

少し声が上擦ったかもしれない。男は怪訝な顔をしながらも部屋の扉を開け、半身を外に出したままの状態で止まり、顔を私の方へと向け「くれぐれも、お気をつけて」等と言い捨てたまま、さつさと部屋を出て行った。ほら、やっぱり厄介な仕事じゃないか。明日、雨だったら止めておこう。勿論、雨雲が少ししかなくても、風が少し吹いていても。

結果、神様はなんと非情な事だろう。私がキリシタンなら、キリストの銅像をハンマーで粉々にして、尚且つ活火山の中に放り込んでいることだろう。

つまり、私の頭の上には雲ひとつ無い憎い位に済んだ青空と、微風すら吹いていない空間が広がっていたのだ。いや、もしかしたら、あと1時間ほどでスコールがあるかもしれない。

それまで待っているのも「今日は高気圧に覆われ全国的に快晴」ラジオから忌々しい声が流れてくる。ああ、これから面倒臭い一日が始まるというのだから、せめて朝の紅茶とシャワーくらいは済ませせて欲しい。

いや、前者はともかく、後者は無理があるかもしれない。昨日も風呂に入ろうとして、床に広がるカビの集団に顔をゆがめた記憶がある。仕事が終わったら、掃除と電気の代金は払っておこう。

……そうだ。電気が無ければ、風呂が沸かないじゃないか。私は鬱な状態のまま、半ズボンと実家からこっそり盗んできた父のＴシャツに着替え、歯磨きと洗顔を終えた。流石に洗面所は昨日のうちに洗っておいたから時間を掛けずに済んだのだが。私にとっては、その仕事だけで今日一日が潰れてしまえ、という気持ちなんだけれども。まあ、愚痴っけていても仕方ない、頭のスイッチを切り替えるでしょう。

家を出た私は汗と雨の臭いが染み付いた服を着て、公園に向かっ

ている。昨日渡された、クシャクシャのメモ用紙と写真を持ちながら。私は記憶力が破壊的に皆無である。

今までしてきたバイトの同僚の顔すら、辞めて1日で完全に忘れ去ってしまったのだ。つまり、昨日あの男に言った事は大嘘。住所も名前も最初の一文字すら覚えていないのである。

「格好つけたがり」前に一度、自分自身をそう評した事があるのだが、まったくもって大当たりだ。ちなみに昨日の男の名前は菊地洋介と言うらしい。群馬県に住んでおり、両親は他界していて妻とは3年前に離婚、原因は援助交際がバレて裁判沙汰になる。

結局、再婚した女性との間にも子供に恵まれず、今は別居状態にある……なんて平凡な男であろう。これほど、楽な人生は他に無い。世の中に流されたまま生きて、二回も結婚しながらも誰からも怨まれている訳だし、肩身の狭い思いをしている訳でもないのだろう。その上、今の奥さんと別居中なら、いくらでも大好きな浮気な出来るじゃないか。

まったく、これほど嬉しい状況は無い。と、男は思っただろうな。いや、私もそれには同意見ではあるけども、少なくとも羨ましいとは思わない。私は波乱万丈が好きで、尚且つ見物しながら紅茶とアップルパイを食べられれば、それで良い。

登場人物になるなんて、まっぴらゴメンだ。片足どころか指一本入れたくも無い。理由は「面倒臭いから」そうやって、私はバイトを一日単位で辞めているし、人の顔や名前だっけ覚える事をしない。だがシロは別格、アイツは覚えたくなくても、嫌でも覚えてしまうような格好をしている。会った当時も38度の炎天下の中、彼は平気な顔で黒いロングコートを着込んでいたのだから。そういえばアイツと会ったのは3年前……いや、やめておこう。面倒臭い、って事もあるけれど。

「ああ、とうとう着いてしまった」

あのダンボールハウスが立ち並ぶ公園とは違う、また一味違った

広場。折れ曲がった鉄製の遊具、焼け焦げた人工芝、そして極めつけは一切水の出ていない噴水。

それらは、ここが元公園である事を物語っていた。緑も青色も鮮やかな花の色も無い、あるのは無造作に切り取られた灰色と焦げ茶色だけで、まるで前世紀の「シロクロてれび」という物を彷彿とさせる。勿論、実物を見たことは無いんだけど。

まあ、そのシロクロ世界にも住んでいる奴等は居る。あの倉谷も、此処出身だ。

私はカビの生えたパンや、青虫のついたキャベツの入った袋を下に置き「おい。ドブネズミ共、エサを持ってきたぞ。ついでに、一仕事やつてもらうからな」と、その言葉と同時に草陰から何人かの男が、ボロボロの服ともいえない布を着て出てきて、袋の中を漁り始めた。

「すまんなあ。オレ達はアンタの手伝いくらいしか出来ないのに、飯まで与えてくれるなんて、ホントにすまん」

「バカを言わないで。仕事中に空腹で倒れられたら困る。だから与えてあげるだけ。感謝するなら、依頼主に感謝しなさい。そんなゴミみたいな飯なら、いくらでもどうぞ」

そうだ。私が他人に親切なんてするはずもないし、しようと思っただ事は今までに一度もない。確かに恩を売っておけば、何かが返って来るかもしれない。だが、返ってこなければ骨折り損である。人間は他人に頼らずに生きていけるのだから、出来る事は自分だけでやるべきなのだ。ちなみに今回、私は面倒臭いと言う理由でコイツ等に手伝ってもらう。面倒臭いって言うのは、私にとってこれ以上に無い理由なのだ。

「はは。それでも感謝はさせてもらうさ。俺らホームレスにとってカビパンもステーキも似たようなもんだ。育ち盛りの子供には少ないくらいだな」

「強請るんなら、骨と皮しか残ってない子供でも引っ張って来なさい。インスタントラーメンならくれてやるわ」

いや、冗談のつもりだったんだけど。まあ、今回の収入を300万と考えれば、手元に8割くらいは残るだろう。勿論、電気代と自分の食費を合わせての出費だから、8割残るのは確実だ。

「ほら。食事が終わったら、仕事開始。食べた分はしっかり働いてよ。それから経費削減の為、一人につき自動小銃一つずつ。弾は倉庫にあるから、十分の一までなら使つてよし。銃で身を守るにしろ、私を援護するにしろ、絶対にヘマはしないでよ。何しろ、私の武器は、六連発リボルバーとカギ束だけなんだから。それに、アンタ達が死んだら私に全責任が吹っかけられる」

そう言つて、私は公園の入り口に立てかけておいたバイクに跨つた。

ほら、神様つてのは随分と不平等だ。今頃になつて、槍の様な雨と木を根こそぎ持つていきそうな風が吹き荒れている。こうなつてはキリストの像を燃やすだけじゃ、飽き足らない。今は、近くにある教会や聖母子像をぶち壊したい気分だ。

と、キリスト教徒に言つたら、きっと私は袋叩きにされるだろうし、もしかしたら教典で頭を撫でられ、哀れんでくるかもしれないだろう。

だから、今は胸の中にそつと仕舞い込んでおこう。あとで、キリスト信者が居ない場所でこの怒りを思いつきり、ぶつければ良い。

話が逸れた。つまり、私は荒れ狂う雨と風の中で仕事をしようとしてゐる。こんなバカらしい話は無いが、もう此処まで来れば仕事をしなければいけないし、面倒臭いとか何とか言つてる暇も無い。あと一步を踏み出せば、東京の千代田区。一瞬にして永遠の戦場の中心となつた、いや今でも戦場であり、この世で一番と言つていいほど、不発弾と死体が埋まっている場所。

全ての街が溶けていったのに対し、こちらは崩れていったのだ。爆風と炎の中で何人の人間が苦しんだだろう。

ある意味、永遠の平穩を「負け取った」街では無いだろうか。

「いつ来ても静かな街だ。今度、インスタントラーメンとサブマシンガンを持って、ピクニックでもしにこようかな」

そんな事をやっては、政府軍から良い標的にされるだろうな。罪名は武器不法所持と無断外出罪ってトコだ。と言っても、今の時世は一般人でも自動小銃と手榴弾くらいは持つてる。流石の私でも戦場の真っ只中に丸腰で放り込まれたら、両手を挙げて下着姿になつても降伏して、必至に命乞いをする事だろう。

つまり今は、そういう時代なのだ。いつ、どこで、何をしているときに銃弾が飛んできて頬を掠めるかもしれないし、運が悪ければ頭を撃ち抜かれ、頭の中を地面にぶちまけたうえに清掃員に多大な迷惑を掛けることになる。

運が良くて、一丁でも銃を持っていれば撃たれる前に、コッチから撃てば痛い思いをする事もないし、清掃員に迷惑も掛けなくて済む。

なんで、戦争をしているのに律儀に憲法第9条とやらを守っているんだ？ 武器を持っていないければ死ぬって場所で、丸腰のまま平和を主張している社民党や、この戦争を支持したまま沈黙している自民党と民主党の頭の中はどうなってる。

「と、政治家の批評を戦場でする少女って、結構絵になるんじゃないかな？」

一人なのは分かっているけど、一人だから余計に独り言が言いたくなる。面倒臭い仕事の前は特に多くなるし、今回は格別だ。仕事の舞台が此処である事、それが既に面倒くさいってのを逸脱して、やりたくない。と言う感情を私に持たせている。

「ホントにココに逃げ込んでるの？ これ、どう見ても女の子だし」昨日貰った写真には、美少女と言って良いほどの容姿を持ちながらも、お嬢様という感じではなく、カメラに向かって花でも咲いたような笑顔を向けている。こんな笑みを向けられては、日本中の男共は2秒と経たずに卒倒してしまうだろう。ついでに茶色に染められた髪（もしかしたら地毛かもしれない）も私のように傷んでおら

ず、艶があり、肩口辺りで切り揃えられ纏めてある。

「ま、こんな所を歩き回るのは変人か異常者か。或いは、よつぱどの世間知らずか」

どっちにしろ、私の縄張りに無断で入り込んだのだから、腕の一本では済まさない。ああ、これ以上何もせずに棒立ちしていると、頭がおかしくなりそうだ。

「じゃ、援護は頼むわよ。ドブネズミさん達」

余程の事がない限り、援護は要らないけれど。私は、自分でも聞こえないような音量で呟き、一丁の銃とカギ束を持ち元ビル街の方へと走り出した。

雨が降っていた。

ああ、何故こういう時まで神は私を妨害してくるのだろうか。簡単な状況説明をすると、富士の樹海、もしくは磁石が大量にばら撒かれたサハラ砂漠の真ん中に、ポツンと立たされた状態。

つまり、単刀直入に言うところ……迷った。いや、間然にという訳ではなく、出口は分かっているし、私が立っている場所も完全に把握できている。それに、単に道に迷っている訳じゃなくて、脳内で迷っているのだ。

飛び交う銃弾の中へリボルバー……たしかS&Wと言ったか。これだけで、突っ込んで行くかどうか。常人なら飛び込まずに、動かずジッとしているか、逃げ出す。異常者なら喜んで突っ込んで行き、身体を穴だらけにされてカラスに食べられる事だろう。

生憎と私は前者であるし、この年で死のうとも思わない。まあ、標的の少女が追いかけて来ると言うなら、飛び込んでやらない事も無い。

いやホントに嫌な予想というのは良く当たるというものだ。もし過去に行けるのなら聖母マリアと一緒にキリストの頭に無反動砲を一発打ち込んでやる。

「こんなに仕事熱心な私に、幸運の女神が微笑まないのは何でかな」
愚痴っている暇も惜しい。このまま殺されれば、私が漁夫の利を得られるが、もし連れて行かれたら私が2年間で作り上げてきた信用が無くなってしまふ。それだけは困る、絶対に阻止しなければならぬ、お風呂と湯沸しポットの為に。」

「どこの軍だか知らないけど、私の電気代と食費は渡さない！」
その言葉は鳴り響いていた数多の銃声を切り裂き、それと同時に放たれた一つの銃弾は軍服を着て機関銃を構えていた兵士の頭に当たり、それだけだった。

そんなの初めからわかった事で、機関銃とリボルバーでは話にならないというのも百も承知である。今の状況を想定していなかった訳じゃないし、打開出来るとも思わない。

それでも、これは多過ぎでは無いだろうか？ たかが、少女一人に数十人の軍人を集めるのかアメリカ政府っていうのは。なにやら、英語で会話しているようだけど、私にはサッパリ分からない。自慢では無いけれど、私は英語と数学の成績は赤点しか取った事がない。こういう時はアレだ。

「ここは私の縄張りだ。五秒以内に武器を置いて、立ち去れ。もし、私の言葉が分からないのなら、大人しく制圧される」

もう、5秒もいらないだろう。あと、10人くらいなら、8人くらい殺してしまえば、直ぐ怖気つくだろう。そのあと、残っている奴等の間を抜けて路地裏へ逃げ込む。うん、我ながら完璧なプランだ。さつき殺した、地面に倒れている人間の抜け殻を足で転がす。

「これが一人目」

硝煙の残り香が漂う中、撃鉄が上げられる音と引き金を引く音が続けて耳に入る。そして、瓦礫に隠れていた男の胸に当り、その衝撃でアバラ骨が砕け、骨の破片と血と中身がアスファルトに流れた。
「はい、これ二人目ね」

次は路地裏の入り口で呆然としている二人のうち一人。別にどちらでも良かったのだが、私が撃ったのは左の男の首。突然撃たれて、

訳が分からなかったんだろうか、バカみたいな顔のまま、首から上だけが地面に転がった。

流石に、三人目の犠牲者が出ると固まったままだった男達が慌てて機関銃を構え直す。此処からは楽じゃないし、面白く無いだろう。きつと、肩とかも撃たれて血が出て痛いんだろうな。ああ、それでも私は笑っている。コレが楽しくなくても、面白くなくても、私は笑っている。それが当たり前なのだから。

「やっと起きたのか？　じゃあ、私は逃げるとしよう」

アメリカ力は、よく此処まで良い兵士をかき集めたものだ。私を囲んで、一斉に引き金を引いてくれるなんて、私は銃撃が始まる直前に、壊れたビルの壁に沿って上へ駆け上がった。悲鳴と大量の血が当りに飛び散る。

まだまだキリスト様も私を見捨てては居ないらしい。それでも、何人かの兵士は残るだろう。ビルの上とか、崩れ落ちた建物の中で待ち伏せしているのが居る筈だ。どうせ全員、民間兵だろうけれど、これだけじゃ足りない。

もっと欲しい、もっと必要だ。だって私は壊れなければ、壊されるしかない。だから「もっと血の匂いが欲しい」私がどうなるうと構いはしない。壊れるだけ壊れてしまえば、気が楽だ。何人、人を殺してもすぐに日常に戻るし、平静を装える。

もうすぐ血で溢れたコンクリートに足が付く、そうすれば上から斜めからか、銃弾が撃ちこまれるだろう。そうすれば、隠れている奴等の位置が完全に分かる。あと、少しで此処は血と雨の匂いで充満する。今はそれだけが楽しみでならない。

足が地面に付き、少し遅れてから何発の銃弾が降って来る。一発が頬を掠め、皮を破り血が流れる。それでも、関係ない。撃たれたのなら、撃ち返すし、撃ち殺されそうになったら撃ち殺す。そう、自分の中で割り切っている。

「今度は性能の悪いライフルじゃなくて、ビル一つ吹っ飛ばせるランチャーを持って来い」

再び壁伝いに上へと進む。今度は落ちずに上へ上へと。十メートルほど上った所で壁を蹴り、地上と水平になった身体のまま引き金を引く。ああ、青空だったら、どれだけ心地良かった事だろう。そして、また新しい血の匂いが漂い始める。あと一人撃っておきたいが、もう地面が近づいている。

身体を反転させる。ソレと同時に背骨が軋み、微痛が走るが体勢は崩さない。そして、膝をクッションにして崩れたアスファルトの上に着地する。あと五人残っている。

もう次で終わりにしよう。

「五人目」拳銃を右手から左手へ。

ビルの上で逃げようとしていた兵士の後頭部に穴が開いた。

「六人目」そして、また戻し。

その横で、男を制止しようとしていた兵士の側頭部に銃弾が当り、微かに頭蓋骨が砕ける音が聞こえた。

「七……」

撃鉄は下りた。下りたが、音だけが虚しく元ビル街に響き渡った。ああ、格好をつけすぎて弾切れのことをすっかり忘れてしまっていた。これでは格好の標的になってしまう上に、何かに八つ当りも出来ない。まさしく、四面楚歌の八方ふさがりといったところか。

幸いな事に、銃口を向けた男だけは腕を目の前にクロスさせ固まっている。うん、逃げるのが一番良い。そうだ、そうしよう。

「つて、逃げたら撃ってくるのは当たり前か。やっぱり、マシンガンかカラシニコフを　っ！」

動いた瞬間、問答無用で撃たれた。だが、足元に突き刺さっただけ幸運だと思おう。相手が洗練された兵士なら、威嚇ではなく、頭をぶち抜いていた。これに限っては神様、いやアメリカ様に感謝と言った所だろう。

「わかった、撃たないで欲しい。私は降参しよう」

私は両手を挙げ、弾切れの銃と力ギ束を下に捨てた。今の状況で、弾を籠め直そうとは思わない。銃弾が降って来る中で、ポケットの

中から弾を取り出すのは、よっぽどの死にたがり屋か或いは、とち狂った新米兵士くらいだ。

相手は私が思っていたよりも、すんなりと銃を引いてくれ、3人全員が私を囲うように出てきてくれた。

「ありがとう。日本話が分かる人たちで良かった。お礼ついでに言っておこう」

私は、死にたがり屋でも狂ってるわけでもない。ついでに、とんでもなく面倒臭がりやだ。だが、面倒な事に私は負けず嫌いでもある。

「生き残りたいのなら、援軍と言うものを覚えておけ」

銃声が四つ、うち三つは私の周りを囲んでいた三人の額や胸にあたり、新たな血の池を生み出す。そして最後の一発はというと、モノの見事に私の右頬を掠め地面に落ちた。

あと1センチずれていたら、私の口の入り口がもう一つ増えていたことだろう。もしそうなっていたら、一生外に出られなくなっていた。まあ、贅沢は言えないので何も言おうとは思わないけれど。

胸のうちだけで、私を撃った奴を銃殺しておこう。それにしても「少し遅くないか？ もう少し早かったら私は恥をかかずに済んだし、肌も傷つく事はなかったんだが。ねえ、倉谷さん」

ついでに、疲れることも無かったろうに。

「すまんね。黒いコートを着た酒臭い男に道を尋ねられてたんだ」

「……シロか。アイツはまた首を突っ込む気だな」

「撃ち殺した方が良かったか？」

「いや、良いから放っておけ。状況が悪くなることは無い」

私は欠伸が出そうなのを我慢しながら、裏路地に向かい歩き始める……何かおかしい。

今まで横たわっていたはずの死体が、異様なほどに減っている。それどころか、血の池も無くなって、変わりに黒いシミだけが残っていた。そこに何事も無かったかのように雨が落ちてくる。

どうやら、思ったより危ない状況のようだ。得体の知れない敵に、

素手で立ち向かおうとは思わない。空になったS & Wに、散弾銃の弾を籠めていく。

「裏路地。しか、ないよね」

「まあ、普通はそうなんじゃね？」

自称ホームレスの倉谷さんは、身長の八割程ある機関銃を片手で構えた。なんと言うか、いつ見ても無駄に力が強いと思う。

「銃刀法違反で逮捕されるぞ」

「見られてないから、ならないの」

「……おい」

私の恨めしそうな声が、聞こえているのか聞こえていないのか、倉谷は機関銃の安全装置を外した。今までも何回か、この機関銃は見ているが種類が全く分からない。

トンプソンでもなければ、H & Kでもない。どちらかと言うと、トンプソンに似ているだろうか。それにしても、異様にでかい。

「それ、目立つんじゃない。それに、狭いところじゃ使えない」

「はは、俺のハンプティ・ダンプティは特別製だな。百メートル離れても、ゴキブリ駆除が出来るんだ」

また、随分とナンセンスな名前だ。

「くれぐれも、ゴキブリと間違えて私を撃たないでくれよ」

雨が降っている。

路地裏に入り私たちの目に入った光景は、余りに凄惨で滑稽だった。こんな事、一体誰が予想できるだろう。私は目の前にいる標的の事も忘れ、目の前の光景に釘付けになっていた。その少女が、いやコレは少女と呼べるのだろうか。とにかく、その人間が人の死体を喰らっていた。傍らには、腕が一本もがれた死体が一つと、それも、微かな笑みを浮かべながら。

気付けば、私もつられて笑っていた。

「食事中ごめん。すこし、話をしない？」

普段なら、頭に打ちこんで終わらせてしまえばいいのだが、こい

つは別格だ。

「……そこ、危ないよ」

返ってきたのは、少女の声ではなく、未成熟な男子の声。それに驚く暇もなく、まして銃を構える暇もなく、「彼」の接近を許してしまった。

血を浴びて、ますます白さが際立った肌が私の目を覆い、そして抵抗するまでもなく、そのまま横倒しにされ、脇腹と鳩尾に殴られたような痛みが走る。

起き上がるうにも、少年の力は強く、腕を上げる事すら出来ない。私の前にいた倉谷も、呆然と後ろを見て突っ立っている。

そのバカに罵声を浴びせようとした直後、私の横を横断りの銃弾の雨が通り過ぎた。

「オジサンは別ルートで逃げて！ この子も後でちゃんと返すから」少年の声が引き金となり、三人と多数の命がけの鬼ごっこが始まった。

いや、性格には倉谷の方へ行ったのは数人で、あとは全部私たちの方に向かってきているのだが。

「おい、何で私がアンタの行動しなきゃいけないんだ？」

「あはは。ゴメン、今考えたら僕と一緒にいるほうが危なかったかも」

人懐っこそうな笑みを見せるが、初めて見たときの血塗れの印象が強すぎるうえに、顔に血が付いたまま笑われても、逆に恐い。

溜息を一つ。今度は、きつと訓練された奴が居るんだろうな。そう思うと、頭が痛くなりそうだ。やっぱり、金に釣られるのは良くない。今度からは、安い仕事を選ぶかな。

頬の横を一発の銃弾が掠める。

「えと。どうする？」

「とりあえず、逃げる。でもって、アンタ吊るす」

「いやいや、過ぎたことを引き摺るのは良くないって」

それもそうだ。よし、気が変わった。

「お前を縛って向こうに渡す」

「やだなあ。こういう時は、何て言うの？ 同じ穴のキツネ？」
それを言うならムジナだ。

言う前に、右斜め前の通りから五人。銃を構えて、飛び出してきた。

本当なら、もう終わっているはずなんだ。あの時、コイツの頭を撃ち抜いていれば、今頃は缶コーヒーでも買って、実に良い気分で家路につけたはずだろう。

「……私としては凄く嫌だし、不快でむかつくんだけど。とりあえず、妥協してあげる。途中までは、自分の足で進んでよ」

「え、あ。はい」

私は水溜りの手前、足に急ブレーキを掛け、その勢いで脇に立つ廃ビルの壁に足を掛ける。そして、辛うじてある様な溝に爪先を乗せ、上へと駆け上がる。途中にある窓枠の出っ張りや、水気を含んでいる歪な穴に足を預け、出来るだけ上へ上へ。

七階付近まで辿り着いた時、とうとう膝が限界に達し悲鳴をあげる。だが、まだ休ませはしない。まだだ……あと十歩いや六歩だけ「登らせて」欲しい。

そう言い聞かせ、登り続ける。三步、四歩、五歩……もう充分だろう。そして、私は目を白黒させている少年の身体を窓ガラス越しに、中へ放り込んだ。顔に雨が当る。

思えば彼も良くやったものだ。普通なら対応しきれない、この状況で私の命令を忠実に聞き、従ったのだから。うん、教育すれば良い使い捨ての助手にはなるかも知れない。

だが、そんなことを考える暇もないまま、足と言う支えの無くなった私の身体は自由落下を続け、逃げ場所から遠のいてしまう。上から、砕けたガラスの破片が降り注いでくる。しまった、開いてるはずが無かったな。

少し罪悪感を覚えながら、右手に持ち替えたS&Wの銃口を下向きに構える。そして、銃声が鳴り響き、壁に大きな溝が開いた。

左手でそこを掴み、ようやく落下運動を止める。

下の方から、小さくチェックメイトと言う声が聞こえた。ああ、確かにその通りだ。

「忘れてない？ 此処は私にとっては、庭と同じようなものだし、何より優秀で忠実なペットが居る。ま、せいぜい」

頑張りなよ。と、言う前に何発かの発砲音が聞こえ、あつという間に下にいた迷彩服の兵士共を肉塊へと変えていく。

それを一瞥し、私は左腕の力だけで彼を放り込んだ窓際まで跳躍した。

ガラスが散らばる部屋の中でぐったりと横たわる彼が居た。

「で、生きてる？」

「……辛うじて」

「なら、大丈夫ね。質問するから、短めに答えて」

彼は額から流れている血を拭い、コクリと頷いた。

「なんで、あんなのに追いかけられているの」

「いや、ね。僕って結構、女顔でしょ？ だから女装して、男の人を騙しながら金とか集めてただけだね。ちよつと相手を間違えちゃって、ね？」

ちよつと間違えて、アメリカ軍に喧嘩を売ってしまうとは、つくづく運の無い奴だ。

私なら、日本人のある程度、金を持っていそうな奴を騙して生計を立てるだろう。生憎、ハイリスク・ハイリターンは好きじゃないし、面倒事は嫌いだ。

適当な金を奪って、適当な飯量を摂取できれば満足なのである。

「ん、バカね。じゃあ、次にアンタが人の死体を喰っていた事について」

彼の方がびくりと震える。だが、すぐに愛想の良い笑みを取り戻した。

「大した事無いよ。ネコがネズミを食べるように、君達が牛や豚を

食べているように、僕はアレを食べてただけだ」

彼は平然と言い、綺麗に整った髪をクシャクシャと手で撫でる。言っている事が、まるで分らない。なんと言うのだろうか、人を目の前で殺されて「なんでもない」と言われているような……いや、なるほど私と同じ　　か。

私は両手を結び、鼻にそつと当てた。

「それから、君は勘違いしているようだけど。僕は、此処に昔から住んでる人間だし、君のような　　でもない。でも、君と違う訳じゃない」

「なら、アンタは実験の成功例と言う訳ね。それとも、私の標的とは違う、見当違いの人間という事？」

私と少年の話が、噛み合わさっていないのは分かる。だが、現に話しに支障が出ていない。呆れて溜息も出ないと言うより、感心して反論も出来ない。

ああ、コレが雰囲気飲まれると言う事か。と、私は自己完結し、ようやく溜め込んでいた息を吐き出した。外では、雨が屋根を打つ音が聞こえる。

「もういい。アンタと会話しても疲れるだけだ」

私は気だるそうに、力の入らなくなつた手をふらふらと振った。

左手に握っている力ギ束から一本、他とは別の感触の力ギを抜いた。

「あ、もう一つ君が勘違いしてる事。僕らを襲ってきたのは、軍人じゃないよ。うん、言うなら君と同じ　　」

それは明らかな矛盾。

彼が言い終わると同時に、部屋のドアが開き、間髪居れずに三度の銃撃が始まり、そして止んだ。いや、止んではいなかったものの、私たちには当らなかった。

ただの一発も、辺りで破損している壁の残骸でさえ、私たちの横を掠めず通り過ぎる。

その状況は把握できないものの、私は部屋の片隅にあるロッカーに向かい走る。絶対に銃弾を信じて、その結果として私は何発かの

銃弾を背中に浴びる事となった。

今まで、当らなかった事が不思議だった。背骨まで届いた弾は何発だろうか、全て貫通しただろうか、お腹から血が流れている。これは流石に、死んだだろうか。本気でキリスト殴りたい。バカみたいな感情だけが溢れてくる。それでも、私はロツカーの前まで辿り着き、左手の中指に掛けていた力ギを鍵穴に差し込んだ。

板の裏で、音がする。いつの間にか、私の方に銃弾が飛んでこなくなっていた。

代わりに、腰の辺りに柔らかい感触が。

「大丈夫？ ダメだよ。僕から離れちゃ」

そして、へにやりと平和呆けたような笑顔が、そこにあった。

「バカ！ 抱きつくな。これ以上、私に穴を空ける気か」

「大丈夫。君と僕には絶対に「当らない」し、君の傷も「ありえない」から」

彼の言葉は、当っていた。一発も銃弾を浴びなかったし、いつの間にか背中中の激痛も消えていた。だが、頬の掠り傷は治っていない。私は、動揺を無理矢理に押し込めて、窓を蹴破り下を見た。そして舌打ち、私はロツカーの中から、在るだけの銃器を取り出し、床に置いた。

「大丈夫。君は「死なない」よ」

そう言って、彼は私の手首を掴み、その腕の細さではありえない力で、私を巻き添えに窓から飛び降りる。

不思議と恐怖は感じなかった。迫りくる地面、押し掛かるような重力、それでも私は笑っている。確かに私は、その状況を楽しんでいた。

だが、それを邪魔するかのように、下では何人もの人間が銃を上に向けて、こちらを睨んでいる。それと同様に、ロツカーから抜き取った、旧式のサブマシンガンを下へ向ける。

「ありがとう。アンタに、感謝する。今日 は、とても、良い日、だ」

雨が顔に当る感覚でさえ、下へ落ちていく恐怖さえ放り捨て、私は全ての弾を人の絨毯の上に撃ち込んだ。雨と血の混ざった臭いが、こちらまで漂ってくる。

それすらも、心地良い。そして二つの身体は、肉のマットの上へ落ちた。

「改めて、よろしく。私は葉月己家^{はづき みけ}どう呼んでも構わない、けど」
私は手を掴んでいる彼の手を振り解き、睨んだ。

「私は、他の奴の臭いが付くのが嫌いなんだ」

だが、そう言ったのにも関わらず、空に投げ出された手は、再び私の手を掴んだ。

今度は、手首ではなく手の平を包むようにして。

「夜野^{よるや}住人^{すみと}」

彼はそう言っ、私の正面に立ち微笑んだ。そして、再び手が空に舞った。

「話したい。どこか安全な所に行こう、ヨル」

彼　ヨルが不思議そうな顔をしている。

「私、記憶力悪いから。それで良いでしょ」

横から、クスリと笑う声が聞こえる。そして、また手を握られた。
……不思議と嫌な気分は無かった。

まだ、灰色の雨は止まない。

二話（後書き）

読んでいただき、本当にありがとうございます。
まだ展開はしません。

次話からドンドン展開させていく予定です。

三話（前書き）

今回は、結構グロイ表現が多いので気をつけて下さい。

三話

最初に感じたのは圧迫感。二番目には喪失感。三番目は既視感。

……私は灰色の壁に囲まれていた。雨混じりの寒風が吹き抜け、人間の温もりさえも、まるで無い。痛く冷たいものが頬に当たるたびに、私は肩を振るわせた。

そして、目の前に背を向けて立っている少年……ヨル。私が殺すはずだった人間だったのだが、何故かこうして一緒に逃げる羽目になっている。私は片隅にあったゴミバケツの上に腰を据え、足を組んだ。

「さて、邪魔が入らなくなっただし、今度は最後まで聞かせてもらうわ」

そして銃口を向ける。だが、彼は動じることもなく、何処から取り出したのか、リンゴをひとつだけ、私に投げた。上半分が赤味掛かった、半熟で甘酸っぱそうなリンゴ。

「まだ、熟してはいないよ」

そう言つて、ヨルは笑った。私は、手に握っていたリンゴを一口齧り、そして聞いた。

ずっと後からの爆発音、それもかなり規模が大きい。倉谷ならやりかねないが、手榴弾や爆弾の類は疎かった筈である。そしてヨルは俯き、笑う。

「ほら、少しずつ赤く染まっていくよ」

「……話を、してくれるかしら」

そして、彼の短い話が始まった。

「僕は此处で生まれて、此处で育ったんだ」

良い、それは知っている。

「あんまり、友達が出来なくてね？ いつも、一人で遊んでいたんだ」

そんな事は、どうでも良い。私が聞きたいのは、もっと後の話だ。

「母さんや父さんも、僕の事を構う暇も無かったし、僕も求めようとしなかったよ。僕は必然の様に一人で居るようになった。そして一人で部屋に籠り始めてから、二カ月くらい経った頃にカーテンの向こう側が光ったんだ。そして、部屋ごと引っくり返され、僕はそこで記憶が無くなった」

……おかしい。アレの後は、原形を留めているものは残っていないかった筈だ。家も人もゴミでさえ。残っているのは、人だったかもしれないモノしか無かった。

もし、本当に被害に会ったのなら、こいつが生きているのは、間違っている。だが、目の前の彼は、それでも笑っていた。

「僕は、君とは違う生まれ方をしたんだ。君は成功作で、僕は失敗作だった」

「……言ってる事が、分からない」

「それで良いんだよ。僕もそうだったんだから、君もそれで良い」
私は呆然と空を見上げる。顔や睫毛に雫が当り、その雫が頬を伝った。

「君に会えて、良かったと思ってる。でも、僕は死にたくない」

ヨルはそう言って、コンクリの上にぺたりと座り込み、私と同じように空を仰いだ。

「死ぬのって、痛いからね。僕、殴られるのと人参だけは嫌いだ」

そう言い終えた後に唐突の銃声、そして十数人の兵士が通路に雪崩れ込み、一秒と立たない内に灰色の路地裏が、迷彩色で彩られた。それでも、まだヨルの顔は曇らない。

まったく、ご苦労なことだ。さっき撃ったので、予算が少しオーバーしたというのに、これで撃ちあいになったら、確実に赤字になる。それでも、生きるためには金を捨てる覚悟……か。ん、生きたいつてのには、同意できるかな。

「ヨル。貯金は幾ら？」

「一日一食なら、十年は暮らせるかもね」

「次からは、もう少し分かり易い答えを期待するわ」

二人共、空を見ての会話。そして、溜息が重なるようにして出た直後、横に向けられていた砂時計は、再び元の位置に戻された。

少し心許ないが、さっき持ち逃げしたデザートイーグルを構えるたかが九発の銃弾で、此処を斬り抜ける筈は無い。その上、反動も大きい。まあ、手に触れたのがコレだったのだから仕方ない。破壊力に問題は無いし、初めて扱う訳でもない。

大きく息を吐き、右手に持ったイーグルの銃口を下に向け、背中に背負っていたサックに左手を入れた。今度は、私たちの先手。サックの破裂と同時に、幾つかのピンク色の花卉が出来上がった。それを目の当たりにして、呆然としている男達にも一発ずつ。

一瞬にして、十人もの仏が出来上がった。だが、それに怯みもせず、私に銃口を向ける男達が数人居る。その他にも、ヨルに銃口を向ける男たちが三人……。

「で、壁の向こうで盗み聞きしているのは誰？」

そう言っ、背中を向けている壁を叩き、左手に持っているバントラインの引き金を引く。

「そろそろ出てこないよ、見せ場無いわよ」

私の左手の指が、バントラインのトリガーを引く。それと同時に、壁の後から無数の12ミリ弾が横薙りの雨の様に、壁の破片と共に兵士達に降り注いだ。

それは、完全な勝利宣言だった。それは完璧な殺戮だった。

壁にぽっかりと開いた穴から、頭をかきながら、倉谷が機関銃を片手に現れた。

「こりゃ、すまんね。逢引するもんだと思ってたんでな」

私は言い終わる前に、倉谷の足元に銃弾を一発撃ち込んだ。

「次は腹の中にリングを目一杯、詰め込んであげるわ」

「肝に銘じておく。と、それで嬢ちゃんはどうするんだ？ 捨てちまうか、殺しちゃおうか」

そう言っ、倉谷はヨルの顔を舐めるように見回した。

「あ。僕、男ですよ？ えーと、倉谷さん」

「……こりゃ、すまない。お前はシヨタ趣味だったか」

今度は、倉谷の口にイーグルの銃口を突っ込んだ。弾切れではあるが、喉に思い切り入れたら、かなり痛い思いができるだろう。

倉谷はフルフルと震え、冷汗を垂らしながら、両手を挙げた。

「で、逃げ道の確保くらいは出来るの？」

倉谷は両手を上げたまま、ペコペコと頭を上下した。

「あ、まだだよ」

ヨルが気の抜けた声を発し、指を向けた先には頭を飛ばされた一人の男が、何事も無かったかのように立ち上がっている姿。

まるで、B級クラスのゾンビ映画でも見ているようだ。私は向こうが、立ち止まっている間に、イーグルの予備のマガジンを取り出し、セツトした。

今まで、呆けつとしていたヨルも着ていたコートの裾から、ナイフを取り出す。

形状から見て、ロードウォーリアというやつだろうか。確か、随分前に輸入禁止になった珍しい代物である。何にせよ、武器だけでは強さは測れない。

イーグルで牽制しつつ、ヨルの出方を見守る。と、私の横では、倉谷が目の端に涙を浮かべながら固まっていた。そういえば、ホラーは嫌いだったっけ。

「さっきの威勢はどうしたの。ほら、よく見たら愛嬌あるわよ？」

そう言つて、四つ這いになっている、生きた死体を指すが、その時を待っていたかのように、首の赤い切り口が、ぐしゅりと言う音と共に盛り上がり、生々しい音を立てながら、拳程の肉塊が地面に落ち、痙攣していた。

もちろん、それを見た倉谷は仰向けに倒れてしまい、動かなくなる。まったく、頼りにならない男だ。

それとは逆に、ヨルは笑みを消し、ナイフを片手に死体が折り重なる所へと駆け、そのグロテスクな死体の胸へ得物を突き刺し、壁

に貼り付ける。

首の無い死体は、何処からともなく、金切り声を上げ暴れ、辺りに血を撒き散らし、動かなくなつた。ヨルの首に持つてこようとしていた両手が、だらりと垂れる。

全身に血を浴びたヨルは、無表情のままナイフに付いた血だけを振り払い、本来の死体の形へと戻った物に手を合わせてから、こちらへ寄つて来た。

「ん、とりあえずオツケー」

と、親指と人差し指で輪っかを作りながら笑っているが、顔に血が付いたままなので、笑っていても不気味なだけである。私はとりあえず、血を塗りつけたヨルの顔をタオルで拭き、元の白く綺麗な肌に戻した。

「服はクリーニングにでも、出しておけば良いでしょ」

「ん、どういたしまして……」

ヨルはタオルを受け取り、まだ血の残っている首元の部分を拭き始めようとした時、後ろの方から、体中の関節が軋む音と、卵を泡立てるような音が聞こえた。

そして、四肢の動かない身体を引き摺るような音……。それが、ゆっくりと近づいてくる。何かの間違いであつて欲しい、と思いつながらイーグルの撃鉄を引く。

喉の奥が乾き、口からは空笑いが零れる。

「やばいね。これ、普通の変異体じゃないよ」

そんな事は分かっている。

私は、震える手を押さえつけ、狙いの定まらなかった、イーグルの銃口を真後ろに向けた……。そこに居るモノに、昔の面影は無い。吹き飛んだ首はもちろんの事、捻れて元の大きさより小さくなつた腕や太腿。そして、銃弾で風通しが良くなつた胴体には、蓮の花の様に無数の穴が開き、その中で鉛が不規則に動いている。

胃の奥から、色々な物を吐き出してしまいそうな衝動を押さえつけながら、生まれて初めて見る生き物と対峙した。人を殺したこと

も、理性を失った動物も殺した事はある。

だが、住む場所が違う生き物と向き合った事は一度も無い。溢れてくる恐怖心を必死で押さえつけ、トリガーを引こうとして……「撃たないで」……ヨルの声が制止を命じた。

そして、次の指示が「逃げる」だった。一瞬、反応が遅れてしまった私の太腿に、銃弾で貫かれたような痛みが襲う。いや、それは確かに銃弾だった。

ただし、鉄の筒から排出される鉛ではなく、肉の塊から吐き出される凶器。傷口は金柑程の大きさに広がり、血が噴出している。おそらく立つ事は出来ても、歩く事は出来ない。

それでも、腕は動かせる。イーグルの銃口を化け物の胸に向ける。しかし、その体が破裂する事も、私の頭が胡桃のように碎ける事も無かった。

その代わりに、化け物の肩から突起した、平べったい鉄が突き出ている。向こう側に見えるのは、足元まである白い毛皮のコートに身を包んだ旧友の姿だった。

「シロ……いえ、クロの方かしら？」

「へえ。覚えてくれてたんだ、嬉しいよ」

私の後ろで、ヨルがナイフを構えようとするのを制止し、一步前に出る。それを見て、クロが言葉を紡ぎ始める。

「シロが首を突っ込みすぎてね。規約に反するけど、こちら側に出させてもらった。それはそうと、お礼くらいは言ってくれ」

「随分、楽に破れる規約ね。それから貴方に、御辞儀する気は無いわ」

そう言っ、クロを睨みつけ、なるべく距離をとる。それを見ているのか、いないのか、彼はあの気色悪い生き物に近づき、動かなくなった肉塊に手を突っ込んだ。

ぐしゅり、という音と共に蛾の幼虫のような物が傷口から幾つも溢れ出す。これを倉谷が見たら、どう思うだろうか。髪が白くなったり、また気絶するかもしれない。

クロは虫の行列の中から、一匹の幼虫を抜き取り、手の中に収めた。

「あの影響は、人間だけとは限らない。これは蓑虫だが、ここら辺には居ない筈だ。誰かが意図的に放したかしたんだろうな」

なるほど、本来の木や葉っぱの蓑を捨てて、人間の蓑か。こんなのを放した奴の気が知れない。余程、狂っているのか、それとも馬鹿なのか。

「……ああ、夜野くんも居たのか」

今までの感情の籠らない声から一転、底冷えのするような言葉が吐き出され、ヨルの体がびくりと震える。それを見て、クロの口元が吊り上り、そして元に戻った。

「忘れ草と迷い猫。二つが会う事は必然だったが、少し早すぎたな。まあ、支障が出ない程度に暴れてくれ。もう、用は済んだからな。主人格の方に身体を返す」

そう言って、まるで支えの無くなった、棒の様に地面に身体を投げ出した。

そして、また二人だけの静かな空間が出来上がる。雨は弱まり、灰色系統の色が混じり、綺麗なグラデーションを見せていた雲が、風に流され散っていく。

その切れ間から、薄く西日が差し込み、顔を照らす。今まで、命がけで戦っていた事がうそだったかのように、ゆったりとした時間。その時を裂いたのは、やはりヨルだった。

「何も聞かないの？」

そして、また沈黙。私は、雨の水分で重たくなった髪を振って、水気を飛ばした。

「……此処から、大通りに出てデパート後の方へ歩いて行けば、すぐ出口だから」

「この二人を担いで行くには遠いわ。そっちのコート男は、私持つてくから」

そう言って、私はシロを背中に担ぐ。小柄とは言え、やはり重く

路地裏を出るのが精一杯だろうか。その上、足に開いた穴から、まだ血が噴出して力が思うように入らない。

それを見て呆然としていたヨルも、洪々と倉谷の腕を肩に掛け、引き摺りながら歩き始めた。それを追う様に、私は歩く速度を速める。出口までの五分間、ヨルと私の間に会話が飛び交う事は無かった。

やはり、千代田区と新宿区の堺は全く違う。私は出口に着き、改めてそう思われた。

千代田区には壊れた丸内ビルや、半分溶けたマンション。果てには、お腹の一部が溶けているにも関わらず、街の中を徘徊する犬や猫。生き地獄と言った所だろうか。

対して、新宿区には最近になって建てられたビルや、小さいながらもファミレスやスーパーなども復興している。そして、溶けてしまった建物の残骸も無く、戦争が行われたという面影を残す場所といえば、公園と私の住んでいるアパートくらいだろう。

隣り合わせている地区である筈なのに、まるで違う在り様。天国と地獄とは、この事だろうか。どちらが、天国かは私には決められないが。

「それじゃ、僕は帰るね」

地面に倉谷を落とし、ヨルは再び「生き地獄」へと歩き出す。

「怪我してる女の子、放ってくつもり？」

私はヨルの肩を強引に引っ張り、止める。

「さっきまで、人を背負って歩いてたのに？」

「傷口が開いたのよ。もう、一人でも歩く気になんないわ」

そう言った直後、膝に力が入らなくなり、私の身体は情けなく地面に崩れた。

それを見たヨルは、溜息を吐き私の横に座り、口を開く。

「君は、見えてるんだろ」

ただ一言、彼は俯いたまま、そう言った。その言葉を聞いただけで、息が詰まりそうになる。なにが「見えてる」のか、私は薄々感

づいていた。

ずっと、疑問になっている事がある。私が見ている化け物は、人
気のある場所に現われない。何故だろうか。新宿の住人たちは、絶
対に外へ出ることは無い。

いや、外を忘れてしまったのでは無いだろうか。今まで、誰一人
として新宿以外の話をする人を見かけたことは無かった。耳にする
のは、戦争があつた後の苦勞話と身内話。

ずっと感じていた、疎外感。

「君には、見えているはずだよ」

ヨルは同じような言葉を繰り返す。

「僕達が此処に居る事で、他の人たちは存在を許されている。僕ら
以外の人間は、戦争の直後の記憶が消えていて、それでも他のモノ
と溶け合うことで、存在を維持している」

私は横目で、倒れている倉谷を見る。こいつは戦争直後の記憶が
あり、何種類かの動物の潜在記憶が溶けているらしい。逆に、シロ
は他人の意識が溶けていて、戦争直後の記憶は無い。そして、私は
猫の身体能力が移植されただけで、記憶の異常は無い。

目の前にいる、普通の少年と何が違うのか。存在の維持とは何か。
今まで、気にしていなかった事が、疑問と疑念の海となっていた。

「僕達は、選ばれた人間。なんて、格好良いものじゃない。敢えて
言うならつなぎの役割」

そう言つて、ヨルは一度話を切る。

「僕が分けてもらったものは、無差別で規則的な記憶干涉。接触し
た時に、都市間での記憶抹消が起こった。今までの記憶を消し、ミ
ツシングリンクを作り、そして書き換え。同時に僕の記憶は無くな
り、知識だけが残った」

「記憶から、知識への転換……ね」

どうも信じ難いけれど、納得せざるをえない。辻褄も合っている
し、嘘をついているとも思えない。私は溜息をつきながら、穴の空
いている太腿に手を当てる……おかしい。傷口が塞がっている。ア

レだけ、大きな傷口を塞ぐ事は最先端医療を使っても不可能だろう。だが、痛みはしっかりと残っており、確かに傷口があった事を示している。もし、これが彼の持っているモノなら、私とは全く別次元の力なのでは無いだろうか。

ヨルの顔を見る。やはり、無感情のまま千代田区の壊れたビルを見ている。

「もう怪我、治ったよね。それじゃ、僕は帰るよ」

「……帰る場所、あるの？」

ヨルは足を止め、私の方へ顔を向ける。私の問いに答えることなく、沈黙する。

無いのなら、好都合である。私は、ズボンのポケットに入れていたイーグルを取り出し、銃口をヨルの胸へと向け、自嘲の笑みを浮かべる。

何故、こんな事をしているのだろうか。自分にも分からないが、いつの間にか右手がグリップに触れていた。ただそれだけで、私は銃口を向けヨルを止めている。

その、銃を向けられている本人は、無感情のまま私を見ている。

「今から、あの気持ち悪い虫を放り込んだ奴に、一泡吹かせる。もし、同席したいなら、ついて来なさい。とても、面白い舞台が見れるわよ」

そう言つて、私は彼に手を差し伸べた。

「人間、生きて楽しめれば勝ちなのよ。死んじやったり、悩んでる奴は負け組。アンタも本気で笑つてみたら？ スカツとするわよ」

彼は、まだ迷っているようだったが、すつと手を出し、あどけない微笑みを浮かべる。

握手を終えると、私は痛みの残る足と、倒れてる二人を引き摺りながら、千代田区と新宿区の境界を跨いだ。ヨルは後を向かない、私は自然と笑みがこぼれた。と、下から聞きなれた声が聞こえた。
「随分、機嫌が宜しいようだな。お姫さん？」

倉谷はニタニタと笑いながら、立ち上がり後ろを向いた。そこに

は、前を向きながら付いて来るヨルの姿。

「当たり前でしょ。彼のこと、結構気に入っちゃってね」

「……そりゃ、随分と御執心だな。愛と殺意は紙一重って言うけどな」

倉谷の苦言さえも聞こえない。今、聞こえているのは、後で狂ったように小さく笑っている、ヨルの笑い声だけだ。私は、倉谷にシロの身体を渡し、数年前のジャズを口ずさみながら家路に着いた。いや、正確には別荘にしているファミレスへ向かっているのだが。今日から、退屈せずに済みそうだ。そして、まだ明るさの目立たない街灯まで歩く。夕暮れになり、見えにくくなった向こう岸まで。

三話（後書き）

毎度、お付き合い頂きありがとうございます。
次話から、どんどん展開を進める予定です。

四話（前書き）

今回もグロイよ！
以上！

四話

第四話 脱出。そして……

ゆったりと帰路に着くはずだった。

はずだったのに、私達はアスファルトを蹴りながら、全速力で前へと進んでいた。あの化け物も、米軍も撒いたと思っていたのだが、どうやら、どちらも執念深さだけは持っているらしく、ヘリの轟音と虫の這いずり回る音が、後ろの方から聞こえる。

おそらく、数分と持たずして追いつかれるだろう。ヨルは、速度を落とすことなく走っているが、人を一人背負った倉谷は、さすがに息が上がっている。

だが、私の予想が当たっていれば、この先に。

「路地裏へ続く道を探して！ ランドクルーザーを見つけたら、即報告。OK？」

シロが遊びに来る場合は、いつも路地裏の空き地に愛車を止める。今の時世に、ディーゼルのランドクルーザーを駆るのは彼くらいだ。どれだけ車が在っても、かなり目立つだろう。

「了解。で、見つけるのは良いが、免許持ってる奴、居るのか？」

先に返事したのは倉谷。それも、あまりに法務的な言葉も添えて。

だが、それを打ち消すように、ヨルの声が響く。

「あ、普通免許なら、持ってますよ。安全の方は……保証とかないですけど」

「むしろ、ワイルドな位が丁度良いわ」

そういつて、横の細道に入り、大きなゴミやからすの死体を蹴飛ばしながら、空き地へと走って行く、流石にヘリは追いかけて来ないが、代わりに虫が雪崩れ込む。

しかし、その半分以上は動物の死体や、仲間の身体を食らっていた。

随分と食欲旺盛なものだ。もし、この先に車が無ければ、私達も餌になり、あの気持ち悪い生き物の一部となるのか。

そんな死に方、絶対にゴメンだ。そんな思いが纏わり付きながら、空き地へと到着する。

空き地の中心には、黒光りしている厳ついボディ。間違いない、シロの愛車だ。

「倉谷！ シロのコートの右ポケット。カギを取り出して！」

「おーよく知ってんな。お前ら、なんか変な関係とかじゃないだろうな？」

倉谷からカギを受け取り、ドアを開ける。

「何言ってるの？ コイツ、結構金持ちだからね。車に結構、金品置いてあるのよ」

車上狙いか。と言う言葉が、聞こえたか聞こえないか、その代わりに頭上で明らかにヘリの羽音が聞こえ、此方に向けて黄色いライトが当てられる。

「ヨル！ さつさと、運転席に乗ってエンジンかけなさい！」

急な光に、目を覆っているヨルの襟首を掴み、運転席へと放り込む。

次いで、倉谷が後へ乗り込み、私が助手席へ。運転手の方は不安だが、他に人材が無い為、我慢するでしょう。ギアがニュートラルから、ローへと変わる。

忙しいエンジンの音と共に、ホコリやごみを巻き上げ、大きな車体が前進する。

そしてセカンド。右斜め前方にある、車幅ギリギリの壁との間に、全速力で突っ込み、それによりサイドミラーが吹き飛ぶ。その上、タイヤが入りきらずに片輪が宙を浮き、社内を傾けながら、タイヤが吸い付いている壁を擦り、悲鳴をあげての前進。普通の人間なら、失神している所だ。

それにしても、車の事を考えない、荒っぽい運転である。あとで、シロに請求されたらコイツに支払わせようか。などと考えている暇もなく、その狭い路地を脱出し、斜めになっていた車体が再び重力に従い、重い衝撃と共に水平に戻る。だが、ヘリはピツタリと喰らい付いており、離れてくれそうにも無い。

「撃ち落すか」

そう言つて倉谷が、窓越しに機関銃を構える。

だが、ヘリの胴体に銃口が向けられた直後、ハンドルを握っているヨルが、制止をかける。ギアはいつの間にかトップへと変わり、徐々にスピードが増している。

「言つとくけど、そんな重火器使われたら、バックファイヤで車吹き飛ぶよ」

後から舌打ちが聞こえ、銃口が降ろされた。

それと同時に、前方の交差点の両脇から、あの奇怪な虫が無数に飛び出す。

仕方ない。前方だけに気を向けよう。

「さて、じゃ。私は前方の障害物を蹴散らしますか」

手に、新しくマガジンを装填したイーグルを構え、窓ガラスを破る。

そして、群がる虫共に向かい発砲。アスファルトに穴が開き、虫の一部がそこに埋まる。

二度、三度目の発砲。余りの虫が、緑色の液体をぶちまけて、道路に散らばった。

排出された空薬莖が遅れて、地面に当り音を立てる。だが、それで終わったと思いきや、また虫の波が訪れる。今度は、さっきよりも多い。その上、後から赤外線レーザーが当たっていた。挟み撃ちだが、焦ってはいけない。双方を充分にひきつける。

そして、後からの銃撃が始まるうとした刹那。余っていた右手で、サイドブレーキを引いた。一瞬、車体の後が跳ね上がり、車内がカクテルシェイカーの様に揺れる。

後部座席の二人は、天井に頭をぶつけてしまったようだ。ヨルの方は　冷汗を垂らしながらも、しっかりとハンドルを握り、フロントガラスの向こうを睨んでいる。

そして、その向こうには、無数の穴と虫の死骸が散らばったアスファルトが、広がっていた。ヘリのライトが再び、こちらに向けられる。ヨルの視線を感じ、サイドブレーキを降ろした。そして、何を思ったか、バックギアに入れ、アクセルを踏み込んだ。

シートベルトをしていなかったのが災いして、頭がフロントガラスにぶつかり、脳に直接、痛みが走る。身体を起こし、ヨルに向かい、罵声を浴びせようとした直後。

目の前にあった建物が、爆風により消し飛んだ。その、爆風を起こした主であるうへりは上昇して、此方を確認しているようにも思える。少しでも前進していれば、木っ端微塵だったであろう。横目でヨルに感謝し、気付かれないよう、交差点を曲がる。

「あれだけ、壮大な鬼ごっこは初めてよ」

「そう何度も、経験できるような事じゃないからね……っ！」

そんな会話をする余裕が出来たのも束の間、今度は虫の襲撃。まず、一つの群れを車のタイヤで潰し、難を逃れる。

まったく、コイツ等は何匹居るのか見当もつかない。だが、徐々にではあるが、虫の数が減ってきているのは、確かである。あの街から遠ざかれば、虫の身体も小さくなり、群れや食欲、凶暴性までも減ってきている。

「さつさと、ファミレス行って、鍋焼きうどん食おう。向こうの世界じゃ、鍋もパフェも無さそうだからな」

倉谷が後部座席から、声を上げる。

「なかなか、素敵な提案だね。ミケちゃん！　案内のほう頼むよ」
「その名前は言わないで！　そのの、道路案内を左。それから真っ直ぐよ」

その声で目を覚ましたのか、眠っていたシロの声が後から響く。
「おい、此処は何処だ！　なんで、俺の車に乗ってんだよ。それよ

り、お前誰だ！ 早く俺を降ろせよ！ ドタバタ騒動なんぞ、御免だ」

「ごめん。もう巻き込まれてるから。」

心の中で謝り、ハンドルを握るヨルに指示を出す。

「あー。まあ、あれだろ。『旅は道連れ 世は情け』って奴だ」

「どっちかって言うത്『踏んだり蹴ったり』の方があってるんじゃない？」

「てめえら。ノンビリ話してねえで、早く車返せ、俺を降ろせ！」

その喧騒で、ハンドルが揺れ、同時に車体も揺れる。

私の横では、ヨルが小さく笑みを零している。

「あーあ。コレでゆつくり、タバコが飲める」

倉谷が胸ポケットから、青い弓のデザインが施された紙箱を取り出し、一本を口に咥え、安物のライターで火をつける。

また、随分と古いタバコを吸っているものだ。

それを見て、シロが窓ガラスを半分ほど開け、換気をする。

流石に前の席には、臭いは漂ってこないが、後ろの席には独特の匂いが籠っているのだろう。それを思い、シロに少しだけ同情し、中央車線が無くなったところで、再びヨルに指示を送る。今まで目立っていた街灯も、今では三十メートル間隔で置かれているだけ。

後では、倉谷がシロに何度もタバコを勧めている。そして遂に、此方にまで火の手が及んだ。

「そっちの小僧は、どうだ？ なに、慣れたら旨いぞ」

教育に悪いから、お願いだから、ヨルに薦めないでよ。

「はは。僕はLARK派ですから」

……吸ってるんだ。

座席に倒れこみ、溜め込んでいた安堵の息を吐き出し、窓の外を見る。

まあ。案外生きようと思えば、生き残れるものね。

そこには、平和なくらい穏やかな町並みが横たわっていた。そして前方には青い看板を下地にした赤い英文字。何回も行きなれた店だ

が、此処まで安心できたのは初めてだ。

「ほら。あの、青い看板の駐車場に入って」

もう夜も良い頃、客の車が何台か停まっていた。

「なんか、凄い繁盛してるね」

「そう？ いつもよりは、客が少ないくらいよ」

いつもなら、駐車場が溢れるくらいの車が押し寄せて、私のバイクでなければ入れない。

運が悪い日には、一時間待ちと言う事もあるような店だ。まあ、この地区では一軒しかないのだから、当然の事かもしれないが。ヨルがワゴン車のひとつ隣に車を停めた。

ドアを開けると、肉類の匂いが混じった冷たい風が漂ってくる。店の窓からは、楽しそうに雑談をする中年のカップルや、父子の小さな団欒が見える。どうやら、営業停止になっているというわけでは、無いらしい。私達は店の入り口の自動ドアを潜った。

「いらつしやい。ご注文は？」

すぐに、顔見知りの若い女店主が、笑顔で出迎える。

「鍋焼きうどん。それからパフェ」

倉谷が、真つ先に注文する。それにしても、うどんとパフェは食い合わせが悪そう。

「カレー。タマネギ抜きで」

それに続き、ヤケクソになったシロが吠える。無茶を言うな。少しは厨房に居るコックの事も考えてやりなさい。

ヨルは、まだメニューを見ながら考えているので、私が先に。

「かつお節定食ひとつ」

まあ、いつも頼んでいるものだし、許してくれるだろう。

それに続き、メニューを見終えたヨルが気まずそうに、注文をする。

「あ、調理しなくて良いんで、生肉ひとつ」

なんか、私たちの中で、コイツの注文が一番、厨房泣かせだと思ふのだが。

それにも関わらず、笑顔で対応してくれる女店主が、痛々しい。そう言えば、初めて来た私が、妙なものを注文した時も、こういう風に優しく、対応してくれた気がするのだが。この人の懐の大きさは、計り知れない。

そして、木の香りが漂う、畳のボックス席へと案内された。木製の壁には、何十年も前の絵画が飾られており、座る客を和ませている。店のセンスの良さがよく分かる。

それは、他の三人も一緒のようで、揃って感嘆の声を出している。それを裂くように、話題を畳み掛ける。

「さて、と。実を言うと、此処が取引の場所なのよね」

「待つて。それは聞いてないって、僕かなり危ないんじゃない？」

「大丈夫でしょ。一応、コレだけ人材が……って、待ちなさいシロ！」

話の途中で、逃げ出そうとしたシロの襟首を掴み、此方へ引き戻す。

「嫌だ！ もう面倒事は沢山だ。俺は関係ないだろうがよ！」

まあ、それもそうか。と、手を離して、窓を見た……どうも、そう言うわけには、行かないらしい。そこに立っていたのは、首から上に火傷を負い、セミオートライフルを握った男。今日、私のアパートの部屋を犠牲にしてまで葬った筈のサラリーマンだった。

そして、舌打ちをひとつ。目の前に居た、ヨルの頭を掴んで下へ叩き付ける。

その直後。窓ガラスが割れ、その破片が私たちの背中に降り注ぐ。店内の客から、悲鳴が響き、今日で最後となるであろう、銃撃戦が幕を開けた。

懐からイーグルを取り出し、銃口を上げる。が、銃口が完全に上がる前に、腕がダラリと垂れ下がり、肩口から出来た傷から、血が滴り落ちた。治ったとばかり、思っていたのに。再び、舌打ちをして、反対の手で銃を構える。安定はしていないが、大丈夫。

座ったままの状態で、片膝を立てて、その横に銃を添える。コレ

で、照準がブレる事も無いだろう。此方に目を剥く、男の顔に銃口を向け、一発。肉が裂ける様な音と共に、男は血を撒き散らしながら、仰向けに倒れた。コレで、ようやく終わり。

だが後から、聞きなれたハスキーな声が響いた。

「ミケ。貴方に、お客様よ」

そこには、後頭部に銃を押し付けられた女店主と、あの気の弱そうな、依頼主が立っていた。どうも、私達はドタバタ騒ぎに、縁があるらしい。

「私は、そいつを殺してくれと頼んだのだが？」

「アンタに提示された金額より、コイツの貯金の方が高かったからよ」

「では、私は倍の金額を出そう。もし、それでも不満なら、好きな数字を書きたまえ」

そう言つて、床に一枚の白紙の小切手が、投げ捨てられた。

う……これは、ちょっと良いかもしれない。

だが、ヨルの鋭い眼差しに気付き、首を横に振り、小切手を破る。ああ、なんて勿体無い。あれがあれば、ヨゴレ仕事や水商売のバイトなんてしなくても、一生楽して暮らせるというのに。その気持ちを銃に籠め、揺れ動く銃口を固定する。

だが、それを見るや、男が女主人に付けている、リボルバーの撃鉄を引いて威嚇する。

「ほら、どうしたね？ こうやってしまえば、貴様等は無力に」

言つ手前、顔面に裏拳が飛び、悲鳴を上げる暇もなく、仰向けに倒れる。

だが、地面に付く前に、額を蹴られ、強制的に跳ね上がる。そして、その薄い髪を掴まれ、そのまま床に叩きつけられると同時に、後頭部への踵落とし。

最後に、トドメとばかりに側頭部をゴルフボールの様に蹴られ、首が妙な音を立てた。

「あ……ぎ？」

あまりの衝撃で、発音も上手く出来ないらしい。

「貴方がこの街で銃を抜いた時点で、この死街の住人を全員、敵に回した事と同じです。分かりましたか？ 薄ハゲ野郎。分かったら、さつさと金出して、逃げて頂きませんか？」

よく見ると、中年のカップルも優しい顔付きの父親も、初々しい子供でさえ、銃を片手に男を狙っている。ああ、そう言えば、こんな街だっけな。

床で芋虫の様に、這いずっていた男から呻き声が発せられる。その目尻には、弾のような涙が薄らと浮かべられ、鼻水や涎を床に撒き散らしている。

まあ、銃をちらつかせて、歩く奴ほど臆病だと聞いた事はあるが。これじゃ、臆病って言うより、いじめられっ子だな。

これなら、私が一瞬で始末した方が、もう少しは面子が立ったであろうに。

自分が銃を向ける間も無く、周りから何発かの銃弾が飛び、男の身体に突き刺さる。

そして、情け無い悲鳴が響く。だが、急所には当たっていないらしく、男は死ぬことも出来ずに、のた打ち回っている。本当に哀れな男だ、と同情しながら、その様子を見守っていた。同情する、というよりも、他人事といったほうが良いかも知れない。

「早く、殺……て」

鳴咽が、店の中に響き渡る。倉谷とシロは、目を背けながら。

ヨルと私は、始めから無言で見学している。

「ええ。早く楽になりたいでしょうから、これを使ってくださいな」そう言っ、床に放られたのは、錆びたナイフ。

まあ、コレを振り回されても、私たちにはたいした損害は無いだろう。

案の定、彼は自分の首にナイフを付き立てるだけだった。そして、何度か目の悲鳴が、再び聞こえて、彼の身体が跳ね上がる。まだ、死ねていないようである。

彼がどれだけ悲鳴を上げようと、誰も引き金を引こうとはしない。ただ時々、茶を飲みながら、彼が息絶えるのを待っているだけだった。

だが、それは彼にとって、当然の結末。人を殺すのに、自分が殺される結末を予想していなかったのだから、こうなるとは結果として見えている。

そして、彼は床を涙や鼻水で、グチャグチャに汚して、息を引き取った。

それを見終わった客は、また各々の席へと戻る。

「あ、お待たせしましたあ。注文のモノでえす」

そう言つて、ウェイトレスが私たちのテーブルに、注文した物を置いていく。

どうやら、ガラスの方は別の店員が片付けているようだ。

私は、かつお節がたっぷり入った味噌汁を啜り、白いご飯に手を伸ばす。

ヨルも、生肉をナイフとフォークで行儀良く、切つて口に運んでいる。

「……お前ら。あれ見た後で、よく食えるよな？」

「何言つてるの。そんなこと言つたら、牛の解体なんて、目も当てられないわよ？」

あの、頭を打ち抜いて、皮剥いで、内臓から何まで全部掻き出して……。

あれは、人間が死んでいるのを見るより、悲痛なものである。

「あーさいですか。そうですか。もう、アンタ等を人間とは、見ねえ！」

「どうぞ。ご勝手にしてくださいな」

言つて、丸ごと炙られた、削られていない、かつお節の端を齧った。

あの何とも言えない、独特の風味が口に広がる。無駄な味付けも無く、無駄な加工もしない。これが、究極の料理と言うものだろう。

ヨルも、そう思っているはずだ。

倉谷の方は、もう立ち直ったらしく、うどんをズズリと嚙っている。

だが、シロの方はタマネギの入っていないカレーを、スプーンで突付くだけだった。

まあ、あの男が床に転がっているのだから、当たり前だろうが。

「すいません。店長さん。あれ、捨ててくれませんか？」

シロが、注文を取っていた女店主を呼び、普通のファミレスならまず在り得ないもの……男の死体を指差した。

その注文にも、動揺した様子を見せず、笑顔で対応する女店主。

「申し訳ございませんでした。今すぐ、清掃員に電話いたしますので」

「ああ、そうしてくれ頼む。ありがとう」

そう言って、店主が置くに行き電話を掛けた数分後に、駐車場に黒いワゴン車が停まった。今では、汚れ役を進んで請け負う、と有名だったが、本当に農務省の車である。

まあ、こんな場所で農薬撒く訳にも、野菜の種を蒔く訳にもいかないか。

そして、そのワゴンから降りてきた、一人のスキンヘッドの男が店の中へと入る。

「ほお、こりゃあ。また随分と……のた打ち回って、死んだんだろうな。ん、事故死」

そう言って、適当な判断をして、死体を引き摺り棺に入れる。

そして、水を含んだモップで血を拭い去り、作業を終えた。

「ああ、そう言や。夜野つてのを、知らねえか？」

収まりかけていた心臓の鼓動が、一気に跳ね上がる。

「アイツな。結構な金になんのよ？」

そう言って、ヨルの方を見て、ニヤリと笑う。

難去っても油断はするな。か？

額から出ている汗を拭わず、イーグルをテカリのある額へと向け

た。

四話（後書き）

なんか、ちゃんと話数を揃えていないですね。自分
分かってるなら直せよ、自分。
でも面倒臭いんだよ、自分。

まあ、あれですね。これからは、話数だけの表示にしと来ます。以上
追記。文字数が多いと、言われる事がありますが、作者が描写中毒
なので、こんなもんです。
ああ。でも、これで三万字に王手ですか。序盤だけでコレとは、気
が滅入りますね。

五話

男の乾燥した唇が、グニヤと曲がり、下卑た笑い声が店内を包む。目を細め、狙いの定まらぬ銃口と焦点を、必死で押さえつける。

「なに、そう恐い顔すんなって。忘れちまったんかい？ ほらオレだって、元防衛庁の」

そういえば、どこかで見た顔である。今まで余裕が無く、心音を押し留めるのが精一杯だったが、ようやく顔を見るだけの落ち着きを取り戻せた。

徐々に興奮していた脳も冷め、記憶の糸を辿っていく。

一年、二年、三年前。ようやく、それらしい面影を見つけたが、頭の方が違う気がする。

「へえ。アンタ髪剃ったの？ 確か、殺人犯に発砲して殺したんだっけ？ <元>長官殿」

普通、防衛庁がそこまでする事はないのだが、コイツにいたっては別である。拳銃は常時、腰に下げられ、目が合って逃げようものなら、対空ミサイルの如く追いかける。

警察より、たちが悪くて粘着質である。昔は良く<世話>になった覚えもある。

そろそろ、理性の方も回復してきているようである。

「なんだ、覚えてるじゃねえか。てめえの両手に縄括るまでは、引退するつもりは無かったんだぜ？」

それは、どうも。とは言わず、構えていた左手を下ろし、血の流れ出ている右肩を抑える。だが、一度出始めた血は止まることなく、脇水のように溢れ出ている

手の先から、冷たくなっていくのが分かる。さすがに布で巻くだけじゃ、今回は無理か。

しかし、その出血に伴い、逆に冷静な思考が一気に蘇る。そうやっていいる内にも、呼吸の回数が増え、何かが脳の中を蝕んでいる。

おそらく、発砲した軍人の一人が弾の先に、薄めたアコニチンを溶かして、固めたのだろう。だとすれば、肩の中にある限り、血が止まる事も無いだろうし、呼吸も戻らない。

喉の奥から、息を吐き出して、懷から取り出したりボルバーのシリンダーに、貫通弾を竈め、自分の右肩に押し当てる。あまり、こういう事はしない方なのだが。

もう、何度目かも数えていないが、また店内に銃の悲鳴が響き渡った。痛い。痛い。

鎖骨が砕けた音がした。痛い。床に二つ、銃弾が転がり落ちる。痛い、痛い！

悲鳴を押し殺し、挟まれた肩の部分に手を当てる。

「ちょ……大 丈夫？ 今、厨房で包帯と凍り貰って来るから、待ってて」

そう言つて、ヨルが速やかに正しい対処法を取っていく。

あとの二人は、展開の速さに付いて行けず、立ち竦んでいるだけ。やはり、コイツを持ち帰って正解だったと思う。

「ほう。アイツが新しい相棒か」

「別に、そんなんじゃないわ。ちよつとした、面白い拾い物よ」

厨房の方が、何やら賑やかになってきている。

もうちよつと、隠密行動が出来たら優秀なんだけど。まあ、そんな文句は言えない。

私は、血の流れが止まる感覚を感じながら、ゆつくりと瞼を降ろす。

だが、「あいつの事だな」と、いきなり、話を切り出され、覚醒せざるを得なくなる。

その低く、調律の合わない音楽を聞き取る為、耳を澄ます。

「米軍と防衛庁が組んで、追い掛け回してやがる。捕まえた者には、ン千万の大金が入るんだとか。どちらにせよ、オレには興味のねえ事だ。匿うなり何なり、しとけ」

手放す手もあるがな、と付け加え、その馬鹿でかい口にタバコを

啞えた。

「ついでに、それとは別件で。今回の虫騒動の事なんだがね」

「何か知っているの？」

つい、声が大きくなり、威圧しているかのように、瞳孔も自然と細くなる。

二年前に行つて、そのまま放置してはいたが、あそこは特Aランク危険指定地域と言う訳でもない。糞虫に規制された人間も、襲ってくる事は無いし、放射線も少ない。

だが、今日はまるで別物だった。特Aと肩を並べるほどの、危険地域かもしれない。

自然と出来る物では無いし、できるはずは無い 何故なら。

何故なら、彼らと私達はく共存>しているのだから。

「政府の裏からの情報だが、どうもチャイニーズの男が黒幕らしいだが、深入りはすんじゃねえぞ。やけに臭い情報が散乱してる野郎だからな」

一瞥して、包帯と氷嚢を取つて帰つて来たヨルを出迎える。

そして、氷嚢を受け取り、傷口に当てた。ヒヤリとした感触が皮膚を伝う。

今までと比べて、痛みは軽い。十数秒ほど当てたところで、片手で包帯を巻いていく。

「あ、僕がやるから。休んでて良いよ」

そう言つて、私が巻いている途中の包帯を横取り、慣れた手つきで、私の肩に包帯を巻いていく。

「とりあえず、近づかない方が身の為だな。と、言いたいんだがね。どうも、ここいら周辺を住処にしてるらしくてな。どうだね？ うちなら身の安全は保障できるぞ」

「断る」

即答。そして、向こうに反論の余地を与えぬように畳み掛ける。

「此処のスタイルが、身に染み付いちゃったのよ。銃の不携帯なんて勘弁」

向こうが、完全に口を閉ざした所で、ヨルの方も処置を終えた。随分と手際がいい。何度も自分で手当をしている私から見ても、無駄が無い。

やはり、この子を連れてきて良かったと思う。

「ああ、そうそう。あの街に行っただんなら、コレ飲んどけ。ちつとは、収まるだろうよ」

そう言っ、青と白い粉が入った、透明な袋が投げられる。鎮痛剤か？

いや、違う。どちらかと言うと、殺鼠薬のような臭いが袋越しに漂う。

これ、飲んでも大丈夫なんだろう。手にとって、鼻に近づける。……今度は塩素の臭い。これは、絶対に有害な薬だ。自分の脳が警鐘を鳴らしている。

とりあえず封を切り、粉を少し舐めてみる。

それと同時に、鼻へ刺激臭が届き、胃の中から、先ほど食べたモノが逆流しそうになる。

涙目になった両目で、渡してきた張本人を睨みつける。

「知らないのか？ あの虫、この街にも居るぞ。かなり衰退してるがな。そりゃ、殺虫薬だ。なに、人体には影響ない」

やっぱり、危険なものじゃないか。

言葉には出来ず、舌に乗った粉を唾で溶かして、胃に送り込む。

後味が最悪で、舌が麻痺しているようである。まだ、薬が残っているようで、氷水を受け取り、コップ一杯の水を全て、口を濯ぐ為に使い果たした。だが、いまだに変な味が残っている。いつそのこと、酒を煽ってしまえば収まるだろうか。

再び、思考が壊れ始めていく。

「此処に居る限りは、成長はしない。だが、特定の地域で成長し、宿主が気付かない間に、肉を食いながら蛹になる。遂には成虫になって、人格が別のものに移り変わる」

それは、良く知っている。だから、その起こっていないヨルが

珍しくて、接触した。

「ま、そんな事より、肩を治す方が先だ。良い医者を紹介しようか？」

確かに。右腕の感覚が全く無い上に、血が手の先へ集まり、爆発しそうだ。

本当に、気持ち悪い。毒は抜けたというのに、呼吸も戻らない。

ヨルが心配そうに、上から覗き込む。その頬を左手で撫で、微笑む。

そう言えば、今日は人に触りすぎたかな。左腕も下がり、小さな息が漏れる。

「お願い　するわ。でも、やぶ医者はお断り」

「居住区内のC区に、病院構えてるから行ってみる。やぶじゃねえから、安心しな」

そう言って、診察券を一枚手渡された。

せめて、送っていつてくれても、良いだろうに。私は重い瞼を閉じた。

途切れ途切れの意識の中、聞きなれない声が響く。

頭が重く感じ、喉の奥と舌の上が痺れている。ヨルと二人の気配は感じるが、瞼が上がらず、視界には入って来ない。よくシロが、車を貸したものだ。倉谷もいつもなら、帰ってしまうはずである。

まあ、あれだけ血を流したのだから、心配されるのは当たり前か。

ヨルも、よく付き合ってくれている。それにしても、身体が動かし難い。

「大丈夫？　止血はしたから、もう問題は無いわ。あと、右腕の神経を取り替えてるから、動かないでね」

やはり聞きなれない、だが良く聞くと、少し誰かの声に似ている気がする。

ああ、身体が動かないのは、麻酔を打っているからかな。それにしても、＜擬似神経＞を扱えるとは、対した人である。声

からして女性なのに。

ちなみに擬似神経と言うのは、タンパク質を糸状にした上に、脳の伝達を受け取れるよう、作り上げられたものである。教科書で見た事があるが、なんだか気味が悪かった。

まるで自分の身体から、心だけが引き抜かれた状態で、見えない手術が行われていく。

早く解放して欲しい気持ちと、早く直したいという気持ちが、五分五分。

「はい、終わり。代金は後払いでいいから」

早い。練達の医者でさえ、三時間は掛かる手術を十分も掛からずに終わらせてしまった。

腕利きの医者どころでは無い。全く、一体幾ら金を取られるのか、分かったもんじゃない。右腕を上によびあげてみると、しっかりと動き、違和感も無い。

目を開き、傷が開いていた部分を診る。しっかりと、人工皮膚が貼られ、元通りである。

何と言うことだろう。コレだけの手術が出来るなら、巨大な病院の一つでも持てそうだ。

「ミケ。あとで車の修理代を請求するからな。姉貴には礼言つとけよ?」

シロの声が耳へ届く。やはり、覚えていたのか。さて、どうしたものか。

ん……姉? コイツ、お姉さん居たんだ。

いや、そうじゃなくて、これだけ凄い腕を姉に持っているのに、なんで黙ってた?

顔を右に向けると、やはり心配そうに此方を見ているヨルの顔が映る。

その整った髪を、完全に治った右手でクシャクシャと撫でて、微笑んだ。

ヨルの方は、片目を瞑りながら攪ったそうにしている。

「私は大丈夫だから。さて、帰りましょうか」

ん。という短い返事と、小さな笑みで答える。

「あ、この講座の方に適当に、お金入れといってくれたら良いのです。お大事に」

やけにアバウトな振込み方法だ。

しかし、こっちの方が、逆に言えば振り込む人が、多いのかもしれない。

馬鹿でかい金を請求されるより、こんな風に請求すれば意外と得意様が増えそうである。

「ありがとう。また、怪我を負ったら、来させて貰うわ」

簡単に感謝して、ベッドから降りる。

立ち眩みも無く、気分も良い。どうやら、アレルギーの方も治ったようだ。

とはいえ、何時間ぶりに身体を起こしたのだから、脳の方まで覚醒していない。

自然と小さく欠伸が出て、霞んでいる目の端から、涙が零れる。

あの薬の苦味は、舌から消え去り、口の中がサッパリして、心地が良い。

カーテンの向こう側から、光が漏れている所を見ると、どうやら早朝のようだ。

いつも、夜に行動している私としては、今が眠くなる時なのに。

どうやら倉谷の方は、既に長椅子の上で眠ってしまったらしく、起きる気配が無い。

まあ、コイツなら居るだけでも、マシな方が。

そう思い苦笑しながら、再びヨルの方に視線を戻した。さっきは気付かなかったが、手には薬の袋。そう、あの時の凄く苦い薬が掴まれている。

「ヨル……それ」

「ん？ あのオジサンが、僕も飲んどけて。甘くて美味しかったよ」

私だけ、味覚がおかしかったのだろうか。

「あとね。中国マフィアと防衛庁と国会を敵に回すんなら、腕一本無くすくらいの勢いで居ろって、言ってたよ」

命一つの間違いだろ。さすがに三組織が一斉に、狙ってきたら一瞬で灰に成りそうだ。

とりあえず、喧嘩を売らない限りは、無効も動かないだろうし。

ふと、室内を見渡す。医療の本や、医者になるための参考書が、ずらりと並べられている。まだ、医者にはなって居ないのか。なんて勿体無い、仕事をしているのだろう。

中には、非売品の物も他の安物に混じって、陳列されている。華やかに飾られた部屋より、こういう雰囲気の方が私は好きだ。そうやって居る間にも、時間は過ぎていく。壁に掛かった時計は既に七時を示していた。少し、長居し過ぎたようである。私は、着せ変えてもらったらしい服の香りを確かめながら、机に置いてあった、自分の荷物を手にとり、ドアの前へと近づいた。

と、後から声が掛かる。

「女の子なんだから、身体は大事にしなきゃダメよ？」

なんとも、医者らしい台詞に苦笑する。

「はいはい」

軽く返事をして、ドアノブを回した。光が差込み、目に当る。

ん　これだから、朝は苦手だ。しかも、これから働かなければいけないというのに。

目の前に広がっていたのは、見た事もない風景。

とりあえず、周りの店の看板から見て、私が住んでいるアパートがある地区の、二つ隣くらいであろうか、歩いて帰るには、少し距離がある。バスは……三十分後。

仕方ない、それまで待ってしよう。

ベンチしかないバス停。人通りも無く、閑散としている。

こんな雰囲気も、好きではあるが、隣に居るヨルが気になって、

どうも落ち着かない。

こういう時は、十分が一時間にも思えてしまう　どうせなら寝てしまおうか。

道路の向こう側に、自販機が見え、自分の喉が鳴るのが分かった。そういえば、昨日の夜から飲み物を一適も、口にしていない。

「ヨル。何か飲みたいものある？」

「あ　ホットチョコ」

「胸焼けするから嫌。もう少し、飲みやすいやつを選んでよ」

ポケットの中には、硬貨が数枚しか入っておらず、ジュース一本が限界だろう。

横では、ヨルがムツとした顔で、此方を見ている。

「じゃあ、ミルクココアとか、お汁粉とかもダメ？」

「ダメ。熱くても良いから、味の薄いやつにして。舌が壊れちゃうし」

そう言うつと、ヨルは少し考えてから、紅茶と言う結論に達した。

紅茶なら、味付けの薄いものなら、普通に喉に通す事が出来るだろうし。

私はベンチから腰を上げ、自販機の方へ向かう。

それを見るや、今まで深く腰をおろして、周りを眺めていたヨルも、私に付いてくる。

周りから見たら、姉妹と思われるだろうか、それとも年の離れた友達か。

ヨルの方から、微かに甘い匂いが漂う。少し薄めたであろう、香水だろうか。

こういう、あまり男っぽくないのが、逆に可愛く感じるのかもしれない。

だが、大人になるまでには、ちゃんと男っぽくした方が良いとは思う。

そんな事を思って、歩いている内に、自販機へとぶつかる　が、しかし。

「紅茶……ないね」

しかも、殆どが売り切れて、残っているのは、ココアと汁粉……最悪だ。

「仕方ない、か。ココアで良いわね？ バス来るまでに、全部飲んでね」

そう言つて、ココアの缶の下にあるボタンを押す。ガタリと言う音を立て、下のボックスへと中身が入った缶が一つ、落下した。それを取り出し、ヨルへと渡す。

手の平に熱い感触が残り、横からはプルタブを開く音と、甘ったるい匂いが漂ってくる。

コレが苦手で溜まらないんだけど……今は我慢しよう。それにしても、よくあんな甘ったるい飲み物が、普通に飲めるものである。

「ん ミケちゃんも少し飲む？」

どうやら、その視線を逆に取ったのか、その白い両手で熱い缶を包み、私に差し出す。

「うっん。甘いのが苦手だから、ヨルが全部飲んでやって」

そう言つて、柔らかに拒絶する。

と、ようやく道の奥の方から、バスが来るのが確認出来た。

あと、五分もしないうちに、此方に来るだろう。私は、ココアを飲み終わったヨルの右手を掴み、急いで道の反対側へと渡る。

どんどん近づいてくるエンジン音。予定の時間より、少し早くらいだ。

「意外と早かったね。ミケちゃん」

「……ええ、そうね」

名前の呼び方は、もう気にしないことにした。

目の前でバスが止まり、空気音と共に自動ドアが開く。

行く方向を確認し、その階段を上る。運転手は無愛想で、挨拶はしない。

まあ、そう言うことは良くあるので、私は気にしないし、ヨルの

方もバスの方に興味がある様で、空いている後の席へと、真っ直ぐ早歩きで移動していた。

そういえば、ヨルの事をあまり聞いていない気がする。

一度聞いてみようか、そう思いながら、ヨルの座った席に腰を下ろした。

二度目の空気音。そして、車内が微かに揺れ、四つのタイヤが前へと転がる。

景色が徐々にではあるが、移り変わる。シロの実家が視界から消え、小さなコンビニが、続いて大きめのデパート。その間に、砂だけの空き地。とても暇な景色だった。

しかし、ヨルは楽しそうに外を見ながら、鼻歌でも歌いだしそうな雰囲気纏っている。

周りには、学校へ行く男子構成が数人と、スーツを来た撫で肩のサラリーマンだけ。

それらに乗せ、バスは真っ直ぐ進んで行く。真っ直ぐ、前へ……前へ？

前方に在ったのは曲がり角、だがバスはスピードを落とさず、尚速度を上げている。

コレはおかしい。急いで、運転席へと向かい、目を瞑った運転手の肩を揺さぶる。

だが、帽子が床に落ちただけで、起き様とはしない。いや、もう目覚めはしないだろう。

後頭部には穴が開き、例の虫が巢食っていた。まだ、成長しきつてはいない！ 私は装填しなおした、イーグルの銃口を運転手の側頭部に当て、引き金を引く。運転手の頭から、無数の虫が散らばって、床に緑色の絵の具のような液体を零していく。車内がどよめいた。

その騒ぎには耳を傾けず、運転手の足元を見る。アクセルに足を乗せたまま、膠着しており、退けるのは一苦労である。おそらく、私たちが乗るまでは、虫が操っていたのだろう。いや、その後に居

るチャイニーズが。と言うのが、正しいかもしれない。

とりあえず、サイドブレーキを引き、エンストさせ停めようとする。

しかし、サイドブレーキも上へと上がらず、また速度をグングン上げていく。

「貴方達、死にたくなかったら、早く窓から飛び降りて！ そうすれば、まだ生きてられる可能性が高いわ」

途端に、車内が慌しくなる。無理も無い、普通に出勤、登校していたのに、こんな妙な事件に巻き込まれたのだから。だが、今はそれすらも振り切ってしまったなければいけない。

生憎、私もこんな所で死のうとは思わない。精一杯の声を振り絞り、叫ぶ。

そして、横に居たヨルの手を引っ張り、横の窓ガラスを突き破って、道路へ身を投げる。

まったく、これで寿命が縮んだよ。勘弁してもらいたい。

五話（後書き）

仕事の間があったからね。遅くなっちゃったんです。本当です。

別にネタが出てこなかったって、訳じゃないよ。本当に。

もう会社なんてやめたい。

嘘です。ごめんなさい

六話（前書き）

この作品は（以下略

六話

6話 笑えない話

全身に痛みを感じながらも、何とか身を起こし、バスが突っ込んだ方を見る。

ガードレールを突き破り、前方に在ったコンクリート製のビルに突っ込み、原形を留めていなかった。咄嗟に、飛び降りる事が出来た客は半分ほど。あとは、おそらく大破したバスの中で、息を飲む暇も無く、或いは苦しみながら、死んでいったに違いない。

助かった客の中にも、知り合いが居ないのを見るや、泣き出したり、無表情のまま腰を抜かしている者が居た。横で棒立ちしているヨルは無感情な瞳で、瓦礫の山を見ている。

「ヨル？」

話し掛けるが、此方に向こうとしない

「そ　こに、居るんでしょ？　<出て来い>」

それは、まるで悪夢だった。瓦礫が膨れ上がり、肩や首をだらりと垂らしたままの運転手が、身体をくねらせながら、まるで芋虫の様に這い出してきたのである。

それでも、ヨルは動揺することなく、短い単語を発する。

「そこから動くな>」

言葉に貫かれたかのように、操り人形と化した運転手の身体がピョンと硬直した。

それを確認すると、ヨルは懷からナイフを取り出し、冷笑を浮かべながら近づいていく。

頬を伝っていた汗が止まり、氷のように詰めた空気、私の身体を包みこむ。

緊張の糸が張り巡らされ、周りの動物たちを絡め取っている。ヨ

ルの目は、寧猛な肉食動物のように、瞳孔が開き冷たい光を帯びている。だが、その奥には歓喜の色が。

そして。

運転手の首は、一瞬にして吹き飛んだ。ただ、ナイフを横に薙いだだけの動作。

間髪置かず、二回目の狂気が振り下ろされる。次は右の肩から、左の脇まで。まるで、魚を雑に捌く包丁の様に、人の身体が切り裂かれていく。だが、ナイフでは置くまで届かなかったらしく、挟まれたように肉が裂けただけである。血は枯渴したのか、流れない。たった二回。それだけで、人間だった者の身体が、完全に壊れてしまった。

とても 綺麗だ。

思わず、心の中で呟く。それは、この街に置いては普通の感情。いつ殺されても分らないのだから、その前に危険な物は、断つてしまわねばいけない。そう、目の前にいる少年の様に、無感情のまま、何も思わず命を摘んでしまった方が、気が楽なのだ。

ヨルのく調理も終わり、血すら付いていないナイフを持った手が、下に垂れる。

そんな光景に、周りの人間はただ呆然と立ち竦み、眺めているだけだった。

その横をすり抜け、私はヨルの元へと駆け寄り、その白い首に腕を巻きつける。

私以外の人間の臭いが、鼻を攪る。やはり、慣れない。

「ヨル。もう片付いたから、帰ろう」

その軽い身体が、ぐらりと傾き、此方に倒れる。

直後、ブレーキ音と共に、一台のワゴン車が瓦礫の横に付けられた。

開いた窓からは、特徴的なスキンヘッドが見える。そして、低い声が道に響く。

「運賃は後払いで良いぜ？ 二人で三千円ってとこだろっな」

「半額にしてもらえらなら、お願いするわ」

「世の中、そんなに甘かねえよ。まあ、二千五百円で勘弁しといてやる」

勿論、値切る余裕も無く、年にしても少し軽いくらいの、ヨルの身体を肩に担いで、後部座席に乗せる。まったく、一体どんな食事を摂ったら、こんなに体重が減るのか。

その、力無い頭を太腿に乗せる。

「ヘエ。随分、ラブラブじゃねえか。羨ましいねえ」

「バカ言わない　で。逃げてばっかで　正直疲れてるの」

起きたばかりで、体力が戻っていない為、息を荒げながら話をする。

窓からは、ゆったりと風が流れ込み、移動している事が分かる。ハンドルを持つている彼の唇が、ニイと厭らしく歪み、また低い声が車内に通る。いつ聞いても、不快になる。

勿論、助けてくれた事には、ありがたく感謝させてもらうが。

「ほら、な？　忠告したとおりになっちまった。マフィアってのは、手が早いぜ」

そう言いながら、軽快にハンドルを回し、車を操る。

「そういえば、アンタの予感はず　　から、悪いやつばかり当るわね」

「ハハ！　そりゃ良い。なんなら、てめえの死まで予言してやろうか？」

それだけは勘弁してもらいたい。

コイツが「槍が降る」と言ったら、槍が降りそうだし、「火事が起こる」といえば、火事が起こってしまうような、それだけ有能な予言者なのだから。

と、溜息を吐き、柔らかいシートの上に背中を寄せ、ヨルの横になつていた頭を、上に向ける。柔らかな寝息を立てながら、綺麗な寝顔を私の方に見せてくれた。

「寝ちまうのは良いんだが、行き先ぐらいは教えるよ？　さすがに

ストーカみたく、何もかも知ってるわけじゃ、無いんだからな」

「寝ないわよ。楽な体勢になりたかったし、ヨルも苦しそうだったもの」

そう言つて、汗で張り付いていた、ヨルの前髪を撫でて整える。

「ソイツ。あの薬飲んだのか？」

スキンヘッドの頭が、此方に向けられる。

どうでも良いから、前を見てくれ。危なっかしい。

「ええ。美味しいって、言つてたけど……変な薬じゃないでしょうね」

「……いや。普通の人間にや、ちいとも害なんてありはしねえよ」

普通の人間には、か。考えて、少し不安になる。

さっきの綺麗なくらい、鮮やかな殺し方も、普通の人間には出来ない。

目の前に在る、可愛らしい寝顔とは、全く別の人を人と思わない、殺し方。

銃で人を撃つのと、ナイフで人を切るのとは違う。後者の方が、慣れるまで時間が掛かるし、動脈を切った時の血の噴き出る生々しさや、温かさまで体験しなければならぬ。

そんな事を、こんな十代半ばの少年がしているのである。

それも、おそらく無意識の内に行っているんだろう。敵だと思つたモノは、全て殺さなければ、自分が殺されるんだ。と、まるで機械のように、刷り込まれたに違いない。

車の揺れが、少し収まった気がした。もしかして、気を使つてくれたのだろうか？

気のせいだろう。

「そこ、右に曲がつて。そのまま真っ直ぐ言つて、二つ並んでるビルがあると思うから、そこまで直進でお願い……あの薬、一体何？麻薬じゃないと思うけど」

「あいよ　あの薬は、動物の血と人間の血を混ぜて、固めたやつだ」

いつの間にか、その唇には火の付いたタバコが啜えられていた。
ヨルの頭を撫でる私の手が、急に強張る。

「普通の人間にや、キツ過ぎて味わえるもんじゃない」

ヨルと最初に出会ったシーンが蘇る。彼は人の肉を、美味しそうに喰らっていた。

窓から入る風により、車内に煙が充満する。だが、今はそれも気にならない。

「酔ったら言えよ。ちと、行き先を変更する」

そう言つて、私の返事も聞かず、大きな車体を慣れた手付きで、小さな脇道に潜り込ませた。アンタ、プロになったほうが金を取れるんじゃない？ いつもなら、簡単に出る憎まれ口も今は、喉に留まったまま、全く出ようとはしてくれなかった。

タイヤが水溜りの上を走り、泥水が窓の真ん中辺りまで跳ねる。

なるほど、確かにアスファルトで固めていない、オフロードと呼べる道だった。

「ラブホテルとかに連れてつたら、本気で殴るから」

「オレ年下は趣味じゃ、無いんだ。どうせなら、熟女くらいの方がいいな」

「ヨボヨボのお婆さんに、欲情でもしてれば」

ようやく、いつもの調子に戻せた。

しかし、むりやりに戻してしまったからか、どうも向こうには柳に風と言った感じだ。

ヨルの方は、相変わらず幸せそうな、寝顔を見せてくれている。

微かな寢息を立てたり、少し出ている喉仏を動かしたり、睫毛が揺れたり。

そんな姿を見ていて、飽きる事は無かった。外はいつのまにか、茶色い壁が続く、見たことの無い裏路地へと、映り変わっていた

こんな所が、あったんだ。

思わず、感嘆の溜息が漏れる。こういう所を把握している者など、殆どいない。

勿論、人の影など、何処にもなく、まるで絵画の中にでも、潜り込んでしまった様だ

「いい場所だろう？ …… お前の昔の相棒が、見つけやがったんだ」
治りかけていた、心臓の鼓動が再び激しく脈打つ。

「お前に教えたかったと、仕事中でも良く言っていた」
嗅ぎ慣れた、あのタバコの臭いが、今度はとても気持ち悪く感じる。

「寝てるソイツみたいな、能天気な顔してよ。嬉しそうに」

ゆつくりとブレーキが踏まれ、車体が微かに揺れながら止まる。
フロントガラスに見えるのは、綺麗な原形を留めている小さな教会。

そして、その周りで長閑に遊び回る子供達だった。その、子供達が遊ぶ姿を一人の肌が褐色を帯びている、若い女性。いや、大人になる一歩手前の少女が、石段に座りながら見守っている。今の殺し合いの世界には、場違いなほど和やかな場所である。

「あの女。お前の相棒に惚れてたそうだ」

ヨルの頭を膝から下ろし、シートの上へ寝かせる。

「それは、随分と苦労したでしょうね。あの朴念仁が相手じゃ」
言い合いながら、車のドアを開け、アスファルトの絨毯の上へ、足を下ろす。

少し、車の中で座っていた所為か、足が痺れそうになる。

互いに、ゆつたりとした歩調で、教会に向かい歩き始める。子供達も興味を持ったのか、此方を指差しながら、何か小声で言い合っている。その後方から、あの褐色の少女が立ち上がり、慌てた表情で此方に駆け寄ってきた。その黒曜石にも似た足は、素のままである。

そして、あまり耳にしない言語が耳を叩いた。

「キリカワ！ …… ？」

いや、最初の単語は、日本語。それも、横に居る男の昔使っていた姓だった。

「お。随分と、ボロボロになったもんだ」

確かに、素足のままで歩いている所為か、所々に肉刺^{まめ}が出来て、破れている。

服とスカートも随分と、使い回しているらしく、穴が開いている為、元は綺麗に整った顔やスタイルも魅力が半減し、同じ女としては少し、勿体無い気もする。

それに比べ、子供達の服は、古い事は古いが、しっかりと洗濯、刺繍が施されている。

「少し、教会を見させてもらうぜ？ イグレイシア オウケイ？」

それは、少し訛りの入ったスペイン語だった。仕事上、覚えなければいけない事もあったのだろう。途切れ途切れではあるが、しっかりと向こうに意思は伝わったようである。

少女は微笑んで、私達の手を引っ張り、教会へと向かう。

そう言えば、この少女はどちらかと言うと、日本人顔のような気がする。ハーフだろうか、それともクォーターか。どちらにせよ、日本人の血のほうが濃いと思う。

少女の歩幅は短く、私達の歩調に合わせてくれているようでも、あった。目線を上に向け、教会の外側を見る。綺麗な装飾の施された、いかにもキリスト教の信者らしい教会。

だが、特有の厭らしい感じはなく、ただ残って在るだけ、といった風の教会だった。

その教会の前に、辿り着いた途端に、少女の手の温もりが離れる。「どうだ。お前の大嫌いな、キリスト教会だ。銃弾の一つでも、ぶち当てとくか？」

そんな皮肉にも、全く耳を傾けられずに、その悠然と立つ教会に魅入られる。

「ま、とりあえず。中に入ってみようや」

そう言っ、太い腕が重い扉を押し開いた。

ステンドグラスの綺麗な色が、朝の日光を浴びて、床に降り注いでいる。

古くなり腐ってしまった、机や椅子。そんな中で、教会のシンボルでもある、マリア像と蠟燭の火。それから綺麗な彫刻画だけが、何も変わらずに存在している。

あの火の手を良く、掻い潜れたものである。いつもなら、殴り潰したくなるようなマリアの顔も、今では本当の聖母のような逞しさをもち、緑や赤の光を全身に纏っている。

ふわりとした外からの空気が、教会の中に潜り込み、大きな空洞の中で何回か、小さな鐘の音色が響き渡った。おそらく、改装した時に付け加えたのだらう。

大きくもなく、しっかりと主張している音色は、まるで香りのある風のようなだった。

これを作った人間は、随分とセンスの在る職人だったらう。

ふと、マリア像の後ろにある、一枚のステンドグラスに、弾痕があるのを発見した。

その視線に気付いたくキリカワ>が求めているのに、低い声を立てる。

「あれは、お前の相棒が撃ち抜いたんだよ。記念だそうだ」

「アイツらしいよ。と良いながら、箆った笑いを響かせる。」

「……どうだ？ ヨルって坊主を此処に置いて行く気はねえか」

その言葉に、心が揺れる。確かに、此処なら簡単には見つからないだろう。

それに、あの子が殺さなくて良くなるなら、それも良いかもしれない。

だが、ヨルが此処の子供達や、あの少女に溶け込めるのかが心配である。

「アイツ。此処に住んでたコトがあるから、大丈夫だよ」

まるで悟られているようで、気持ち悪かったが、それよりも、軽い衝撃が走った。

それなら、別に大丈夫かもしれない。肩の力を抜き、後を振り向く。

後では、何人かの子供が恥ずかしそうに、扉の後から覗いている。私の考えは、間違いでは無いと思う。色取り取りの光を背に受けて、教会の入り口へ歩き出す。情が移らないうちに、手放そうとは決めていたのだが、これで楽になれそうだ。

私は目を瞑りながら、小さく自嘲する。感傷に浸るなんて、自分らしくもない。

だが、外に出ようとしたとき、軽い衝撃が前から感じた。

「あ、ごめん。起きたら、全然知らない場所だったから、ビックリしちゃって」

先ほどの会話とは、正反対のヨルの反応。

だが、周りの大きな子供達は、ヨルの事を知っているらしく、服の裾を引っ張ったり、している。横で、そっぽを向いているキリカワを睨む。

「あの街の虫は記憶を食う。それ位は、知ってるだろう？」

知っている。しかし、それではヨルの居場所がないのも、同然では無いだろうか。

此処にいた頃とは、全く別の人格で、全く別の記憶を持っていると言うなら、あの孤独な街で生き抜いてきたヨルは、本当の意味での孤独なのである。周りの人間が、彼の事を知っていても、一旦リセットされたものは、完全に元に戻る事は決して無い。

彼は、とても人懐っこかった。それは、きつと寂しかったからだろう。

彼は、私の膝枕で気持ち良さそうに眠っていた。きつと今まで、眠れなかったのだろう。

そして今、彼は楽しそうに子供達と遊んでいる。まるで、見知っている者同士のように。

だが、それでも彼は一人のように思えた。まだ、血の臭いが微かに残っている。

それは私くらいにしか、分からない程の微かな臭いだったが、それだけで充分だった。

彼は此処で暮らす事は出来ない。と言う、自分勝手な結論が出来上がる。

それでも、彼の好きなようにさせてあげたかった。

「ねえヨル。此処に住んでみる気は無い？」

「え。僕は一応、君と一緒に居たいんだけど。それに、此処はちょっと平和すぎ」

まるで、戦いを好んでいるような、返答。

「もし、良かったら。君の右腕の役割でもしたいなーなんて」

そう言つて、周りに集まってくる子供達と戯れる。

それで……私の右腕として生きて、本当に良いのだろうか。

今のままを見れば、普通の子供と変わらない。いくら、昔とは違うとは言え、位置からはじめることだつて出来る筈だ。だから、私は住を抜く。彼が、私の右腕に相応しいのか。

それを調べる為に、銃口を静かに上げ、ヨルの横に居る子供を見据えた。

彼の名前を、聞こえないくらいの音量で呟く。

へ。と間の抜けた返事が聞こえた。それを無視し、撃鉄を引く。

そして、その銃口を自分の側頭部へと付け、引き金を引いた。

耳元でうるさい位、綺麗な鉄の鳴き声が聞こえる。胸に温かい物が、覆い被さつてきた。

鼓膜が痺れ、周りの音が一瞬、シャットアウトされる。

右腕は固く握られて、銃口は天井を向いている。そして、目の前には、息を荒げているヨルの顔が見えた。初めて見た、その慌てように思わず頬が緩む。天井のステンドグラスが銃弾により割れたのか、ぱらぱらと細かい破片が降り注ぐ。

「右腕としては失格だけど、左腕くらいにはなりそうね」

「っ　！　なにやってんのさ！」

その怒鳴り声が、再び鼓膜を揺さぶる。

「アンタ居なくなったら、私。今みたいにして死ぬから。右手の役割はちゃんとしてね」

「じゃあ、絶対居なくなつてやんない。絶対に死なせてあげないから」

なんだそれ。

クスリと笑うが、ヨルの方は真剣な表情で、まだ私の身体から、降りる様子は無い。

銃弾が掠めたヨルの頬から、血が薄らと滲み出る。何故だろう、凄く喉が渴いた。

理性が働かず、私のものとは違う、別の本能が脳の中を支配する。いつの間にか、両腕がヨルの首に巻きつき、垂れていた頭も何かを求めるように、浮き上がって、ヨルの顔へと近づいていく。そして。

教会に、水音が数回。

口の中に鉄の味が広がる。だが、いつもは不快な味も、今では清涼飲料水よりも美味しく感じ、自然と血を求めるために、熱を帯び始めた舌を這わす。

「……ミケちゃん？」

澄んだ声が近くで聞こえた。

再び理性が戻ってくる。口の中が、酷く気持ち悪く感じた。

「だいじょうぶ？ なにか飲み物、買ってこようか？」

ヨルが心配そうに、額を撫でて熱を測る。

そして、慌てた風に狭い通路に向かい、子供達を連れて去っていく。

キリカワの吸っている、タバコの火の音が耳に届く。

血が唾と混じり、不快な味が一層に増した気がして、手の甲で口を拭った。

昨日も、こんな事があった気がする。血を飲みたいとは思わなかったが、無性に喉が乾いて、今にも脳が焼き付きそうだった。もしかして、私もヨルみたいに人を殺したり、食べたいと思ってしまうのでは、無いだろうか。そんな考えを心の中で笑う。

私は人を殺しすぎていると、自分でも思っている。

それも、数え切れないくらいの人間を、大人や子供問わずに、タバコの灰が、教会の床に落ちる。

手の甲に付いた血が、外気に触れ乾き始める。

まるで信者の様に、マリア像の方へ顔を向け、複雑な感情をぶつける。

それでも、聖母は赤ん坊の方を見たまま、ただ微笑むだけ。

マリア像の後ろの、ステンドグラスに開いた弾痕だけが、私の顔を見つめていた。

六話（後書き）

徐々に文字数が減ってますよ。

って言われそう。でも、一日足らずで、更新できたのは嬉しい。

イラストを描かなかったのが、功を奏したのか、それとも俺が異常なのか。

いずれにせよ、明日から3日間は、更新できても、5千文字くらい。それにしても、序盤終わってないのに、5万文字って……（苦笑）

七話

第七話 白い部屋

目の前に、一つの波紋が広がる。

最初は小さく、少しずつ大きくなり、私の方へ近づいてくる。

よく見ると、目の前だけでなく、他方向にも同じような波紋が出来上がっている。

その中心に、手の平を寄せた。暖かくも冷たくもなく、形の無い空気。

存在しているとも、していないとも言えない、妙な感触。手を離すと、赤い糸が出来上がり、プツリと切れた。手の平が朱色に染まり、指先へ無色透明の液が伝っていく。

その液が滴り落ちた後、まるで肺を握り締められたかのように、呼吸が出来なくなる。

だが、苦しくは無い。他人の身体に起こっている事を、私が体験しているような感覚で、此方には一切の影響もない。そして、その感覚にも少しずつ、身体が馴染んでいく。

触るだけだった波紋を、次は自らの指で揺らしていく。

形が変わり、歪な花のような模様が、目の前に出来上がった。指は、やはり朱色に染まって、その先からは無色透明の液が一滴ずつ落ちる。息を一つ吐き、波紋に身を近づける。

それに合わせる様に、波紋は後へと下がった。

かと思うと、今度は不規則な動きをしながら、私の周りをふわふわと浮きながら、回っている。さながら、墓地を徘徊する火の玉。もしくは風に乗っている、小さな羽玉か。

そして、もう一度手を伸ばそうとした時、いきなり身体が自由が

効かなくなった。

頭の奥の方から、少し高めの優しい声が聞こえる。

「……ちゃん ミケちゃん。大丈夫？」

目の前に、綺麗な艶のある茶色の髪が見えた。

「ん……もう大丈夫だから、心配しなくて良いわ。ジュースありがとう」

そう言つて、ヨルが買つて来てくれたオレンジジュースを受け取る。

そのプルタブを開け、口に含んだ時、横から低い声が滑り込む。

「お前。あの街で怪我しただろう？ 力も使ったのか」

「ええ。まあ、毎度の事だから、慣れちゃったわ」

そう軽く受け答えするが、キリカワの額からは、玉のような汗が噴出していた。

まるで、聞いてはいけない事を聞いてしまったかのように、彼は啜っていたタバコの灰を落とし、口から白い副流煙と共に、深い大きな溜め息を吐き出し、手で目を覆う。

とても嫌な予感がした。彼の不吉な予言は、良く当ると言ったが、私のく悪い予感>は確実に当たる自信がある。彼の細く開かれた目が、その嫌な予感を後押ししていく。

「お前。血を見た時に、喉が渴いただろう？」

否定したくても出来ず、頭を縦に振る。

「虫が一段階成長して、味覚を蝕んだんだよ。今は、坊主の血を飲んだから、収まったがな。ただ、それは不規則で起きる上に、限られた者以外の血を含んだら」

そこまで言い、キリカワは一息つく。今更、死ぬとか死なないとかは、全く問題にはならない。今まで、銃弾の雨を掻い潜ってきたのだから、死ぬ覚悟くらいは出来ている。

だが、耳に飛び込んできたのは、あまり理解し難いものだった。

「……お前の人格が消滅する。とりあえず、ソイツから離れないほうがいい」

死ぬよりも、もっと想像のつかない事。肉体は正常に機能しているのに、意識だけが消滅するというのは、現実離れしている上に、どうもピンと来ない。まあ、当然だけれど。

脳死と同等という事では、ないのだろう。植物人間の症状とも違う。あれ等は、脳の機能が停止するものであり、自分自身の意識だけの消滅と言う事では無い。

絶望よりも、恐怖よりも、諦めきれぬ笑みだけが浮かぶ。

「その坊主は、ライカントロピー……狼疾ってやつか。理性で抑えてるみたいだが」

ライ……なんとかは知らないが、狼疾と言うのは、家に陳列してあった医学書に記されていたので知っている。自分を狼と思い込んで、人や生肉を食う症状。だった気がする。

だが、それならヨルの人格は、とつくの昔に壊れてしまっているはずだ。

「ご名答。ただ、体中に毛が生えたりとかはしないからね？」

ヨルは相変わらず、飄々とした態度で答えている。コレが年季と言うものだろう。

「僕の場合は虫と共存する為に、新鮮な肉を与えているだけだし。あの街から離れれば、そこまで強い食欲は沸かないし、十分に力も出せないよ」

虫と共存する為の食料。そんなのは、考えた事もない。

今まで、住処を共有しているだけだと思っていたのに、そこまで思考が行き通っていないかった。先ほどの、ヨルの血を舐めた時の事を思い出す。今飲んでいる、着色されたジュースより、数倍美味しいとも思える液体が喉を通った時、私の思考はそこに無かった。

あの赤い波紋に囲まれ、淡い高揚感を味わっていたのである。

「ミケちゃんの方も、今の所は収まってるでしょ？」

「ん　そうね」

考えながら、素っ気無く答える

確かに、さつきヨルに声を掛けられてからは、赤い波紋も目に付かない。

「でも、ホント不規則に波が来るから、気を付けてね。とりあえず、あの街から離れてれば、少量の血だけで事足りるみたいだし」

結局、原因はあの街……もう一度行ってみたほうが、良いかもしれない。

とりあえず、ヨルの血さえ飲んでいれば、大丈夫な訳だし。

だが、それに横槍を入れるかのように、電源を入れていたラジオから、男のアナウンサーの掠れた声が聞こえてくる。途切れ途切れで、全体は把握しきれないが、どうやらあの街は危険指定地域のAクラスに変更されたようである。疲れたような溜息が、私の喉奥から漏れた。仕方ない、チャイニーズを捕まえて話を聞いたほうが早い。

私はホコリだらけの床から立ち上がり、入り口へと向かう。

「お前の家まで乗せていくついでに、良い情報も格安で売ってやるが？」

「生憎と、良い知り合いが居るの。そこまで送って頂戴」

その知り合いの所へ行くのは、少し嫌なのだが、この際文句は行つてられない。

子供達と少女の見送りを受け、ワゴンの後部座席へと乗り込む。

それに続き、子供達と最後まで遊んでいたヨルも、私の横へ座る。ヨルの目は、遊び足りない子供の様に、残念そうに細められていた。

「居ても良いのよ」

面白くなって、少し揺さぶりを掛けてみる。

「それは、やだ。ミケちゃんと一緒にいた方が良い」

此処までストレートに言われると、少し気恥ずかしい。そう。と、一言返して窓の方を見た。あの古ぼけた教会が、私達が来た事など知らない。という風に、寡黙に建っている。

あいつも帰るときには、こんな風に見てたのか
昔の面影が頭に過ぎる。半開きの窓から風が通り、優しく頬を撫
でられた。

綺麗に水拭きされた木製のテーブルと、そのテーブルの上に崩れ
ている酒臭い男共。

床には、一晩で開けられたであろう、酒の瓶が無数に散らばって
いた。後から、キリカワとヨルも続いて店の中に入ってくるが、酒
の臭いに鼻が曲がってしまったようだ。

カウンターには、徹夜で男たちの相手をしたであろう、白髪の混
じった、少し痩せている中年の男のバーテンダーが一人。

そして一番、近い席に座り、バーテンダーを呼ぶ。

「バナナミルクを貰いましょうか？」

「酒を頼んでくれよ。酒を」

そう言いながらも、カウンターの奥へ行き、ラップされたコップ
を持ち出してきた。

作り置き……彼は客をバカにしているのだろうか。そう思いつつ、
溢れる一歩手前まで注がれた、コップの箸に口を付け、味の劣った
バナナミルクを飲みこんでいく。

途中、舌の真ん中あたりに固形物が滑ったが、あまり気にしない
でおこう。

「それにしても。まさか、同性が趣味だったとは。そりゃ、幾ら男
が口説いても」

「コレ。一応男だし、そう言う関係でもないから」

言い終える前に、隣に腰をおろしたヨルに指を差して、きっぱり
と言う。

「おー男か。そいつは、スマンかったな。なんか飲むかい？」
「どいつも、こいつも子供に薦めるな。」

「じゃあ、ドライ・ジンを一杯。チェイサーも付けてよね？」

「ヨル！ まだ未成年なんだから、お酒はダメ」

当たり前前の事を言った筈なのだが、何故かヨルとキリカワは、不思議そうに此方を見ている。そういえば、ヨルの年齢って聞いたこと無かった気がする。もしかして……私より上と言う事だろうか。まあ、生肉だけしか食べていないなら、ありえなくも無いけれど。

丁度、私がバナナミルクを飲み干した所で、ヨルの頼んだドライ・ジンが届いた。

ジン特有の、軽い香草の香りが鼻を攪り、それに続き酒の臭いが鼻をつく。

「ミケちゃん？ 一応、コレでも二十歳過ぎなんだけど……あれ？ もひとつ上だっけ」

ヨルは、外見に似合わぬ酒を煽りながら言った。外見と違い、意外と年は取ってるのか。

なるほど、私を「ちゃん付け」して呼ぶ筈である。

「ああ、でも基本的に永遠の十六歳で通る筈だから、そう呼んでもらっても」

酔ってるだろ。

なんか、純粹な子供と思っていたんだけど、案外黒かったりするんだろぅな。

「ちなみに、コイツは一夜で八人の女を鳴かした経歴があるぞ」

「ちよつと待ってよ！ 僕だって誘われて行ったまでだよ。据え膳食わぬはなんとやらって言うじゃん」

そもそも、その婦女様方はヨルを男だと思って、誘っていたんだろぅか？

もし違うとするなら、それはまた可哀想な一夜を過ごしたのかもしない。

あ そういえば。

「私、ヨルの血を舐めたんだよね……ニンシンしないかな」

「しないよ！ っていうか、行為に及んでもさせないよ！ 一夜限りの関係で、責任取れなんて言われたら、踏んだり蹴ったりにも程

があるよ」

声を上げて、酒の残っているグラスをテーブルに、大きな音を立てて置く。

なんか、ヨルの素の顔が見れた気がする。

と、言うか一夜限りの関係って、凄く曲がった性格をしている気がするんだけど。

ホントに避妊薬飲んどこうかな。

「あ。でも、今はミケちゃん一筋だから、気にしないで。ね？」

一転、創ってるのかと思うほど、爽やかな笑みと上目遣い。

いや、別に関係ないから。そんなに、覗き込まなくても良いから。私は聞こえない振りをしながら、バーテンダーに問い掛ける。

「で。新しい情報入ってない？ チャイニーズ系ので」

「十円コースと六万円コースがあるが？」

十円コースも聞いてみたい気もするが、そんな暇も無い。

「ちゃんとした情報をお願いするわ。飲み代も後払いでOK？」

そう言って、空になったコップとヨルの前にあった飲みかけの酒をカウンターの上に置く。

ヨルの口から、不満そうな声が漏れているが、無視しておこう。バーテンダーが二つのグラスを持って、また奥へと入っていき、三人だけが残される。

そういえば、倉谷って車とか持ってたような。

と、考えたのも一瞬。すぐに何冊かのファイルを小脇に抱えて戻ってくる。

最近来たのだばかり思っていたから、コレだけあるのは予想外だった。

まあ、人違いのものも混じっているだろうから、選別すれば十分の一くらいだろう。

それら全てがカウンターの上に置かれる。

「これだけじゃねえぞ。あと十冊はあるからな」

どうやら、骨が折れそうな作業になりそう。

私は、カウンターに置かれていくファイルを一つずつ、渡された紙袋に詰めていく。

「とりあえず、全部持って帰るから」

「なんなら、ファンシーな包み紙で包もうか？」

「ファンキーな包み紙が出てきそうだから止めとくわ」

最後のファイルを紙袋へ収めた所で、ヨルの腕を掴んで席を立つ。そして、入り口へと向かう。しかし、キリカワは席に腰を据えてしまった。

「オレは酒でも飲むさ。ここから近いんだろ？　じゃ、歩いてけ」
「はいはい。」と言いながら、ドアを開けようとした。だが、ドアのノブを握ろうとした手は空を切り、鈴の音が店内に響き、なにやら堅い板のような物に、頭をぶつけてしまった。

その衝撃で後へと倒れ、上の方から鋭い目で見下ろされる。

ひょろりと痩せ細った体、頬骨が目立った顔。口からはみ出た、爬虫類を思わせるような長い舌、服から漂う妙な薬品の臭い。生理的な嫌悪感が、内から込み上げてくる。

息は小刻みに震えて、時折壊れた笛のような音が喉から流れ出ている。

思わず、イーグルを取り出し構えてしまう。しかし、銃身が上がる前に脇腹へ衝撃が走り、肺の空気が一気に外へ掻き出される。そして、間髪入れずに今度は側頭部が揺れる。

あ。蹴られてるんだ。

分かったからと言って、避けれるものではない。男の腕が振り上げられ、下へ。

思わず、瞼を瞑る。だが、その手が私に触れる事は無かった。それに代わって、血の出ていない腕が私の身体の上に落ちる。見上げると、あの男の肘から下が無くなっていた。

「女の子のお腹は、蹴っちゃダメって言われなかったかな？」

ヨルの手には、あのナイフが握られている。

腕を落とされた男は、動揺する様子も怯える様子も無く、その場

に立ち、相変わらず舌のはみ出た口からは、涎が流れ出している。そして、今の状況がようやく把握できたのか、自分の腕の切り口を針の穴を見るかのように睨んでいる。切り口から遅れた様に、血が噴出して血の池を作っていく。前のような求血症状は無いが、嫌悪感は膨らむ。

そんな緊張が続く中、最初に動きを見せたのは痩せた男。ポケットからバタフライナイフを取り出し、ヨルに向かって我武者羅に黒光りするソレを振り回す。男に取っては、最高の攻撃だったのだろうが、ヨルは軽いかわして半歩ほど後へ下がり、低く唸る。

「フルオート」

身体が刻まれていく。千切り等と言う甘いものではなく、人の動きとは言えないような、人外の速さ。

だが、それでも男の方は苦しい表情も見せず、動かせる筈の無い腕でナイフを振り回している。

「サードバースト」

先程より早く飛ぶ銀光。たった一瞬で男の右頬は抉られ、腹に穴が開き、膝が吹き飛び、完全に身動きが取れなくなってしまった。床一面に白くて、ふわふわした物が飛び散る。

そして、最後とばかりに頭の頂から腰に向かって、ナイフを振り下ろす。

絶叫も立てぬまま、男の身体が崩れ落ち、耳の穴から太い糸が這い出てきた。

その動き回る白い糸をヨルは足で踏み潰し、男の死体を蹴り飛ばす。

「キリさん。この人の処理、お願いします。さあ、ミケちゃん行こっか？」

さっきの冷たい目は見当たらず、外観年齢相応の笑みを浮かべる。此方が本当の顔であって欲しい……と思う。

「だ、そうよ。後は頼むわキリカワ」

苦虫を噛んだ様な表情をしたキリカワには、申し訳ないとは思

つつ、男の死体の横をすり抜け、店の外へと出た。相変わらず、日は照っており、雨の振る気配は全く無い。

昨日の冷たい雨と変わり、むしろ日傘を持っても良いくらいの陽気である。

こういう日は、買い物に限るだろう。ヨルの生活用品も買い換えなくてはいけない。

ああ、でも確か預金が二万円しかなかった気がする。やっぱり、食べ物が先か。

そういえば、牛乳も無かったし、賞味期限切れてるのも多いし。とりあえず、最寄のスーパーに寄って行こうかな。

ちよっと、買い物付き合ってね。そう言っ、後を振り向いてヨルに重い紙袋を渡した。

そこは既に戦場と化していた。

最新型の戦車が、無反動砲が、ある所では核弾頭が飛び交っている。

ソレは<ある者>にとっての聖域とも呼ばれる空間。その名もタイムサービス。

私は身を屈ませながら、暴走した人の波を縫い、下の方でヨルと一緒に品定めをする。

「あ、これ随分と安くなったわね。牛乳と安い肉も買っ」と

「あのさあ。こういうのに使っちゃうのは、勿体無くないの？」

はいはい。食べれるだけにしておきます。

とりあえず、必要な物だけを籠に入れた後、レジへと向かう。

が、肝心なことを忘れていた。もう一度、戻しに行くとしても、かなり危険だ。

私の足なら、店員くらいは撒ける。なら、いつそのことヨルを残して……。

「……はい。五千円だけ貸してあげるから」

「ごめん。絶対に返すわ。貴方だけには、借りを作りたくないし」

苦言が後から飛んでくるが、それには耳を傾けず、レジに商品を置いて行く。

「全部で千五百二十円です。ありがとうございましたあ」

間の抜けた声が、制服を着た可愛い店員の口から奏でられる。そして、野暮ったるい会話も無く、そのまま袋とお金を受け取りスーパーを後にした。

日の光が反射して、私の目元を掠める。

そこには、ポツリと置かれた一体の大きなクマのぬいぐるみ。おそらく売れ残った商品。もしかしたら、私が子供の頃にあった物かもしれない。

この子は結局売れ残っちゃったんだ。結構、可愛い顔してるのに。

私は窓の方へ近づき、そのクマのぬいぐるみに顔を寄せる。

ガラスに自分の赤い髪が映り、小さい頃の面影が無くなっている事に、今更ながら気付いた。昔は黒くて短い髪を整える振りをしながら、このぬいぐるみを見に来たものである。

確か、そのたびに母に叱られて肩を落とすのが習慣になっていた。小さい頃の私を重ねながら、赤く長い髪を手櫛で整える。勿論、自分の髪を見るためではなく、売れ残った寂しいクマのぬいぐるみしか、視界には入ってきていないのだけだ。

ふと、後からヨルに声を掛けられる。

「もしかして、これ欲しいの？」

「っ　！　要るわけないでしょ。さ、早く家に帰りましょう」

そう言っつて、ヨルの背中を引っ張りながら道路を歩く。

朝にも関わらず、人通りは少ない上に車も見当たらない。そう言え、日曜日だっけか。

目の前に小さく私のアパートが見えた。少し足を速め、ヨルの手を引っ張る。

家が見えると、早く帰りたくなる人の気持ちがよく分かる。

それがヨルにも感じたのか、少しずつ互いの歩調が早くなって行くのが分かる。

その数分後には、二人共殆ど早歩きのような感じで、進んでいた。

歩き慣れた階段を一段ずつ上っていく。その後には、やはりヨルが付いて来ている。

「あ、ヨルの部屋は私の横だからね」

「え？一緒じゃないの？」

そんなことをしたら、私の貞操が危うくなる。とりあえず、向こうも冗談のようだったので、そのまま私の部屋の前まで歩いて行く。だが、そこには先客がいた。

客と言ってもビジネスではなく、むしろ逆の金を筆記取る客である。

「倉谷。なんで、此処に居るの」

「お、丁度良い。実はな、お前の部屋以外は貸出禁止にするからな」
「まって。本当に勘弁して欲しい。幾らなんでも、唐突じゃない。」

「誰が決めたのよ!」

「俺が決めたんだよ？ このアパートの大家は一応俺なんだよ?」

後で、ヨルが笑っているような気がした。絶対に嫌な予感がする、誰か助けて。

それでも、倉谷に逆らえる事は出来ない。何せ家賃の滞納は二年も溜まっているのだから、これで追い出されないほうが本当に不思議である。それでもコレと一緒に気が引ける。

倉谷はポンと肩を叩き、ヨルに親指を立てて、そそくさと去って行った。

……もしかして、騙されてる？

「じゃ、予定変更でミケちゃんの伴侶として、いそーろーさせて貰います」

そう言いながら、ヨルは固まっている私の横をすり抜け、部屋の

ドアを開けた。

部屋の中から、ヨルの叫び声が聞こえた。ああ、多分ダンスでも見たんだろうな。

あの中にも結構、物騒な物入れてたから 死んでないかな？

大丈夫だろうけど。

そんなことを思っていると、奥から転がるようにヨルが飛び出してきた。

肩で息をしながら、目尻には涙の粒を浮かべている。相当恐かったんだろう。

うん。これなら、変な事される心配もないかもしれない。

「ちよつと待つてよ！ なんで、風呂場空けた瞬間、死にかけなきゃいけないのさ！？」

あ そっちのだったか。それは、悪いことをしたわ。覗き対策だったんだけど。

「まあ、危ないところは説明してあげるから」

そう言つて、玄関で倒れているヨルの腕を引き上げ、部屋の奥へ引つ張つて行く。

途中、後から嗚咽が聞こえ始めていたが、気にせず前へ進んでいく。

勿論、畏の説明も一つずつしていく。子供のイタズラのような畏から、死に至るような獰猛な畏まで。もしかしたら、幾つか忘れている物もあるかもしれないが、良いだろう。

そして、二つあるうちの一つの寝室へとヨルを連れて入った。

少し絵が飾つてある、あまり生活観の無い部屋。確か二年前から放置したままである。

男でも抵抗の無いデザインの部屋だから、ヨルは此处で良いだろう。

クローゼットを開くと、大きめのワイシャツが顔を覗かせた。

「え！ そういうのOKって事？」

何か勘違いしているようなので、銃のグリップで後頭部を殴った。

「う　冗談のつもりだったのに」

そんな事、アンタの口から言ったものは、信用できないからに決まってるでしょ？

頭を少し膨らませたヨルをベッドに寝かせ、その部屋を後にする。そして、横にある私の部屋に身を潜らせる。

部屋の隅で体育座りをする。欠伸をして壁に身を預けた。天井に飾つてある照明を見上げ、その眩しさに目を瞑る。光が入らないように、カーテンを閉めた。

白い。目を瞑っていても分かる。だって、ここは私の部屋なのだから。

暗い。目を瞑っているからでは、無い。本当に此处は、恐いほどに暗い。

寂しい。私しか居ない空間。唯一、私が休む事が出来る、すべての物が省かれた世界。

もう一度目を開ける。そこに広がっていたのは、ただ白いだけの壁と、白いカーペットを敷いただけの床だった。他には何も無い…何も存在してはいなかった。

寂しい

七話（後書き）

久しぶりです。すみません
めちゃくちゃ、ネタが難産だった。

でも、コレでようやく序章終了。そこ、遅いとか言わないで！
あと、修正もおきます。

次の更新は……この週の内に（アバウト

八話

カーテン越しの淡い月の光が、瞼を通して映る。

今日は随分、長く寝ていた気がする。私は身を起こして、ドアの方へと足を向けた。

ふと、ドアの向こうに誰かの気配を感じて、身体に緊張の糸を張り巡らせ、警戒する。

まだ、気配は消えない。向こうに悟られないよう、ドアのノブをゆつくりと回す。

隙間が開き、吹き込む風が頬を撫でる。目の前には白い壁が……下か。

「ミケちゃんの……鬼、アクマ」

恨み言を唱えている重症を負ったヨルが居る……良く此処まで死なずに来たものだ。

「ごめんね。ストーカーや覗き対策に罨張ってるから」

「普通、そう言う人は中に入って来ないよお」

居るから、罨作っている訳なんだけど。まあ、最近では随分減っている。

それでも、ヨルは動く余力はありそうだし。少し増やしておくのも良いかな。

「いま、とんでもない事考えたでしょ」

もうちょつと、致命傷になる罨でも良いかもしれない。

と。不意にヨルの方から、花に似た仄かな甘い香りが届いた。昨日の鼻に優しくない香水とは違う。

この子なりの気遣いなのだろう。とは言え、それでも私以外の臭いがあると言うのは、面白くない。

そういえば、昨日からシャワーも浴びていない。水のほうは通っているだろうか。

「ヨル。お風呂入る？」

言つて振り向くと、ヨルの目は開かれ、嬉しそうに口元が緩められていた。

「言つとくけど、私は一緒に入らないからね」

途端、ヨルが落胆の表情を見せて肩を落とす。やっぱり、期待してたか。

むう。と頬を膨らませながら、険しい顔付きで此方を見つめる。

「そんな顔してもダメ。服は適当に物色して良いから」

結局、渋々といった感じでヨルは風呂場へと歩いていった。

水道は開放されたく、しばらくして風呂桶に勢いよく落ちる水音が届く。

私は、肩に落ちてくる赤い糸を後で括った。窓から差す、月の明かりが妙に暗く感じる。

月明かりの下、群れる人ごみの中、二つの影が並び伸びていた。それは、何の違和感も無いカップルだったろう。乱雑に切られた黒い髪と褐色の肌をした大柄な男と、その横に離れずに付いてくるセミロングの黒髪を携えた少女。周りのカップルと大差は無かった。

男が肩に担いでいる身の丈ほどの細い布袋も、少女の腰に携えた拳銃も、特に浮いている訳では無い。ただ異質な雰囲気だけは、隠し切れてはいなかった。まるで、草食獣の群れの中にいる肉食獣。無数に生えた苔の中にいる、曼珠沙華といったところであろうか。

鉄の擦れ合う音が辺りに響き、ピタリと二つの影が止まった。

「ちゃんと、言葉の方は覚えていらっしゃってますわね？」

鈴を転がしたような、高飛車な声が人波に広がる。

「もちろん大丈夫ヨ。昨日も『お伊セ参り』行ってきたヨ」

それを追う様に、訛りの入った日本語が低く地面を伝う。

声を聞いた少女の表情が渋り、暗闇に軽い溜息が吐き出される。「伊セ参りは、ニホンの心で聞いているヨ。コレではうちりやワ」

確かに、付け焼刃のような伊勢弁が混じって入るが、日本の心とは違うであろう。

少女の表情が一層に曇り、止めていた足の爪先で軽くアスファルトを叩いた。

「なんで標準語を習わないの？」

「これ一番合ってたんヨ。標準語とても難して、辛いヨ」

言いながら、彼は長袋を降ろして、道脇にある花壇の縁に腰を下ろした。

口には、へにやりと曲がった雑草の茎を咥えている。どうも、色々と曲解して覚えているらしく、服装もノースリーブの服の上に、小さめのジャンパーを羽織り、七分丈の綿パンツを履いている。少女のタンクトップと短く切られたジーパンも異質ではあるのだが。そう言う意味で、二人は多角方から冷たい視線を浴びせられていた。

この街で、夜間に薄着で歩き回る人間は、一人も居ないと言っても良い。

暑いと言いながらも、しっかりと手首足首まで隠し、人によっては色眼鏡をかけている者も居る。それが流行なのかといえば、そうではない。この街で肌を露出すると言う事は、死へと繋がるものであり、特殊な体質でなければ平気な顔で動き回れはしない。

一般に紫外線とも赤外線とも噂されているが、それも軽度な物で人間に害は無い。

それが分からない為、一部の住人から『虫』と呼ばれる。小さな子供達にも、そう言って厚着をするように促したり、昼間に外に出さぬようにしている。御伽噺のような物。

大人達は、そう考えているのだらう。自分達の身体に異変が起きていると分かっている者は、町の人口の半分にも満たない。下手をすれば、三分の一より少し上くらいだろうか。

艦の良い子供達なら、既に気付いているのである。自分達の内側には、存在してはいけない物が巣食っている。それは一章の親友で

あり、天敵であると勘付いているのだ。

だが、それでも昼間に外に出るものは少ない。習慣と言うのもあるが。

遊び相手が居ないというのが主な原因であろう。

「しっかし。昼間と違って、人の量が凄いいんやネ」

「まあ。それは、そうでしょうね。これが、この街のルールですから」

そう言つて、彼女は自販機に硬貨を入れ、ココアの下にあるボタンを押す。

「ちゃんと目的は覚えているかしら？ 貴方の出身がばれたら、袋叩きよ」

少女は取り出し口から缶を取り出し、プルタブを開ける。

その音は湯気と共に人ごみへと掻き消えた。

「記録ディスクの強奪ネ？ しっかと覚えてるヨ」

「そう。絶対に忘れないでくださいね」

缶の口に息を吹きかけながら、少女は呟く。

そして一口、口で転がすようにココアを含んだ。こくりという音を立て喉が動く

「いつ飲んでも、美味しいわね」

「オタイは甘い水より、普通の水が好きネ。喉、とても潤してくれるよ」

どうして。と、少女の唇が音を紡ぐ。

「アンタ。オタイに最初会った時、一杯の水くれたヨ。あれ、とても美味しかたヨ」

その微かな音に、男も反応し応える。

「ホントにそれだけで、私に付いてきてくれてるのなら、感謝しなければいけませんね」

「嘘ちがう。とても嬉しかタ。だから、一緒に居るヨ」

無表情のまま、言葉を響かせる少女の音を男は無垢な笑みで受け止める。

月の下で、聞こえることのない小さな鉄の音が響きあつた。

水音が消え、忙しい足音と共にドアが開かれる。

およそ五分。あまりに速すぎでは無いだろうか、と。私は額に人差し指を置いた。

「カラスの行水……それより早くない？」

「んー。ちゃんと洗ったんだけどね」

そう言つてヨルは頭に乘せているバスタオルで、髪の毛の水分を取っていく。

途中、あの香水の臭いが鼻の前を通り過ぎる。やはり洗いきれない。私は溜息混じりにヨルの腕を握り、部屋の入り口へと連れに行く。キヨトンとした顔が髪の間から覗けた。

「駄目よ。洗い直しするから、こつち」

言つた途端、ヨルの顔色が変わる。駄々をこねる子供……ではなく、喜びの表情。大体考えている事は分かる。その目は潤むでもなく、輝きを帯びていて、まるで獲物を見つけたネコの様である。

それを見ないようにながら、ドアを開け廊下へ出る。今まで意識もしなかったが、香水のキツイ匂いではなく、檜の香りが漂っていた。ああ、そう言えば木造の廊下だったんだ。

鼻歌でも歌いそうな、ヨルの横顔を横目で見ながら、廊下の突き当りを右に曲がり、現われたドアを開け放ち、先ほどまで湯が流れていた部屋へと足を踏み入れる。好い加減に湿り気があり、それに重なり冷め始めた湯の温かみが顔を包み込む。全く、本当に身体を洗ったのだろうか。

私は引き出しからタオルを取り出し、何度か折って細長く帯状にした。

そして、有頂天となっているヨルの目元にそれを押し当てる。微かな悲鳴が上がるが気にしない。

その帯の両端を後で結び、完了。

「みーちゃん。ひどーい。僕が君の裸を見れるのを期待してるとでも思ってるのっ！」

「はいはい。さっさと、服脱ぎなさい」

「胸が小さいからって、気にする事はないよ！ 昔の人は言っていたよ。胸は一人で育つもんじゃない。二人で育てるものだ、とね！」

手で掴んでいた桶をヨルの顔面に投げつけると、その声は静まった…… やつと沈んだか。

さっさと湯船に湯を張り、上着を脱ぐ。布が擦れる音が、自分の耳に届いた。ヨルはまだ再起不能らしく、横で白い目隠しをしたまま横たわっている。まあ、その内起きるとは思っけれど。

それを後に、身に付けている物を全て脱ぎ、大きめのタオルで体全体を覆った。その直後、倒れていたヨルがふらりと立ち上がったかと思うと、突然その口から嗚咽を漏らし始めた。

「うう。僕は基本的に攻めなのに。生殺しは無いんじゃない」

最後まで聞かず、今度はその頭に新品のシャンプーを投げつけた。うん、コントロール良好。

結局、そのやり取りは数回行われ、数十分の末、ようやくヨルの衣服も剥ぎ取る事に成功した。

少し温くなってしまった湯船にヨルを浸し、シャワーの温度を調整する。

使い過ぎてしまうかもしれないが、この際仕方ない。

「ヨル。洗うから出てきて」

「目隠ししていると、転んじやいそうだから、外して欲しいな」

言い終わる前に腕を引っ張り、湯船から引きずり出す。

うーと呻く声と共に水音が聞こえ、小柄な身体が外へと這い出てくる。茶色の髪を通過し、日焼けのしていない、白い肩を伝い数滴の水が滴り落ちる。細身の身体だから、女だと偽ってもバレる事はないのだろう。さすがに胸は平らである為、そこを見られれば、男である事が分かってしまうが。

それにしても、日本人としては肌が白い。もしかしたら、クォーターなのかもしれない。

そんなことを思いながら、彼の柔肌をボディークリームを含ませたスポンジで洗い流していく。

前の方は自分で洗ってもらう事にして、香水の匂いがついている髪は手を抜いてはダメだ。

愛用している無香料のシャンプーを手の平に乗せ、水分を含んでいる髪に擦りつけ、泡立てる。

しつこく残る香水の香りは、どれだけ泡を絡ませても取れそうに無いが、あと何度か洗えさえすれば、少しでも落とせるかもしれない。と、溜めておいた桶の湯をヨルの真上から被せる。

小さな悲鳴と抗議の聲があがるが、それを無視して二回目のシャンプー。最初よりは匂いが薄まっているが、まだ不快な匂いを帯びている髪を少し乱暴に擦り合わせ、匂いを消していく。

使っていた香水は大した事が無かったらしく、それだけで完全に匂いは無くなってしまった。

そして、泡立った髪に向け、シャワーを浴びせていく。始めこそ抵抗していたヨルも今は気持ち良さそうに、間延びした声を上げながら、熱い湯を全身に浴びていた。

全て洗い終わり、シャワールームから脱衣室へと足を戻す。

「あれ。ミケちゃんは体洗わないんだ？」

「そんなに毎日洗うのも、水道代が勿体無いから」

ふーん。と言う納得したような短い声が聞こえた。

バスタオルで肌の水気を取り、ついで髪を適当に乾かしていく。

横では、目隠しをしたままのヨルが遣り辛そうにバスタオルで右腕の水滴を拭っている。早めに服を着てやるのかな。

下着に足を通し、笑いを堪えながら、大きめのワイシャツを着てジーンズを履いた。

そして、ヨルの視界を塞いでいる白い布を剥ぎ取ったのだが、その目に映っていたのは困惑。

「あれ？ 髪の色、黒になってる」

その事か。普通に染めているだけだから、水で流してしまうと簡単に色が落ちてしまう。

本職の人に染めてもらってもよいのだが、そうすると金が嵩張ってしまい大変だ。

籠から、黒いジャージの上下と男物の下着を取り出して、ヨルに手渡すと無言でそれを身に付けていくが、ジャージに頭を通した所で、はたと動きを止めて、此方をまじまじと見始める。

「なんで、男物の下着があるの？」

ヨルから、少し睨むような視線が向けられる。

「随分前に住んでたからね。お節介男が」

記憶の端から、ある一人の男の顔が掘り出される。目の前に居る、少年のような顔付きで、いつも笑っている印象しか思い浮かばない。もちろん、締まった表情もするのだろうが、私の記憶には笑っている顔しか掘り起こされないのである。まるで、私の記憶では無いかのような錯覚さえ覚える。

と、そう言う風に思っているヨルには伝わらない。

彼は拗ねたように、目を空ろにしながらブツブツと何かを呟いていた。

「ま。過去の事だから、私もそう言う感情は無かったみたいだしね」
そう言った瞬間、ヨルの顔から怪訝な表情は吹き飛び、いつもの少年のような無邪気な笑みが現れる。納得してもらえて、本当に良かった。これから、ずっと睨まれるのはゴメンである。

ヨルが全てを着終わったところで、脱衣室の入り口の戸を開ける。温度が高いためか、そこまで寒さは感じない。欠伸をして、棚の上に置いていたイーグルを手取る。仕事には必需品、と。

ヨルが私に続き、風呂場から出たところで綺麗な音色の鈴が鳴り響く。誰か、来たのだろうか。

数秒も経たない内にドアを叩く音が。さすがに前のように火器を持ったサラリーマンが立っていると言う事は……あるかもしれない。

念のためイーグルの残弾数を数えて、撃鉄を上げておく。

「おい。居ねえのか？ バーカあーほ」

聞き慣れた声が、微かに耳に届いた。居ないと確信したらしく、好き勝手なことを喚き散らしている。どうやら、イーグルの出番が予想以上に早くなったようである。早足で玄関へと向かう。

そんなことも知らない、ドアの向こうの主は未だに罵詈雑言を浴びせている。後ろでは、ヨルが苦笑を漏らしながら様子を伺っている。何度か目か分からないが、またドアが叩かれた。

それを引き金に、私はノブを回してドアを蹴り開ける。妙な悲鳴と共に、目の前にいつもの様に無精髭を生やして、長い髪を後ろで括っている倉谷の姿が現れた。その顔には驚愕の表情が。

だが、それよりも倉谷の後ろ。背後ではなく、もっとずっと後の方……見られてる。

「おー初夜でやるとは思わなかった。さすがさすが」

「倉谷、どけ」

「恥ずかしがらなくても良いさ。なに、一人前の女になったってだけだ……ろ？」

倉谷の肩を掴み、横へ突き飛ばすと同時に無音の衝撃が足元に突き刺さる。

どうやら、先手は向こうが取ったようである。イーグルを構える前に、二撃目が頬を掠めて壁へと突き刺さる。舌打ちをし、弾が飛んできた方向にイーグルの銃口を向ける。勿論、相手の補足など出ていない。だが、向こうが見えているなら、もしかしたら警戒して撃つのを止めるかもしれない。

だが、その賭けは三撃目により、無意味なものとなった。今の状況で分かる事は、向こうが此方の状況を把握できていないか。もしくは、此方から狙撃は出来ないと分かっている。と、言う事だけ。後者なら、最悪な状況である。それだけは、どうしても止めて欲しい。

しかし、その微かな希望ですら完全に掻き消える。四撃目は今ま

でより正確に、私の顔を狙ってきた。前方から来る気配を感じて、咄嗟に横に逃げた為、頬を掠めただけで済んだのだが、次は確実に狙ってくるだろう。私が避けられない角度から、避けられないほどの不正確さと速さで。

そうなる前に。

私はグリップを握り締め、軸足だけに力を籠めて引き金を引いた。普通なら、成人の男でも気を抜けば、膝から崩れそうになる衝撃である。当然、小柄の私の体は衝撃に耐え切れず、軸足を残して反転する。それでも、身体は崩さない。イーグルを握っている右手の甲で、ドアの端を叩いた。

カチリとスイッチが入り、ドアフレームの上から備え付けていた小さな拳銃が落下し、それを左手で受け取る。そして、相手に背を向けたところで、左手の銃の引き金を引いた。銃声が響き渡る。

結果として、その銃弾は当たる事は無かった。当然と言えば、当然である。長距離ライフルで狙い撃ちされ、その距離を拳銃で辿る等と言つのは無茶でしか在り得ない。だが、狙撃はそれで終わった。肩の荷が下りて、ようやく喉の奥から溜め息が吐き出される。

「おーすげ。『ツインバイト』なんて数年ぶりに見たぜ」

「何それ？ アンタ達が勝手に付けただけでしょ」

そう言つて、一つ弾が減ってしまった拳銃をヨルに投げ渡す。

「早く支度して、行くわよ」

まだ、終わつてはいない。今は動いてこないが、息を潜めている。籠城戦はこちらが不利だ。

そう思い、ヨルの手を引っ張り、その場から走り去る。

階段を数段飛ばしで駆け下り、月に見下ろされながら、人の波を掻き分ける。

此処では、まだ見つけられる心配がある。何とかして、大通りまで出なければいけない。

心臓の鼓動が早まり、小刻みに吐き出される息のペースも短くなる。大通りに出ようとした直後、背後から再びあの視線を感じた。

どうやら、此処らが戦場になりそうである。あんまり、被害を出したくは無かったのだけれど。今更、言っても仕方ない。私は再びイーグルの撃鉄を上げた。

彼は一息吐き、ライフルの撃鉄を上げた。手馴れてはいないようで、少し銃口が下がっている。

狙っているのは、一つのビル。まさか、テロでもしようというのだろうか。

しかし、その割には連れが少女一人しか居らず。どうも、不自然なのである。

そして、遂に彼の指が思い引き金を引いた。だが、銃声やガラスの割れる音も響いては来ない。

街もいたって平穏で、タクシーの運転手が無銭乗車した女客に文句を良い、乱暴を働く風景が見受けられる。そう、彼が引き金を引いたところで、何も変わりはいなかったのである。

それでも、彼の指はライフルから離れていなかった。それどころか、再び引き金を引く。

また、無音の発砲。勿論、何の変化も無く、彼の表情も変わらない。

そして、先程と全く同じ感覚で三発目。何も起こらない事が分かると、意外と楽しい。

日常で銃を見る事は良くあるが、大体は撃ち終わると悲鳴や血が飛び交うのである。

だが、彼の『シャドウハンティング』は誰も殺してもいないし、血も出ない。そんなことを考えている間に、四発目の銃弾が解き放たれた。銃口はブレず一方向だけを狙い、表情を変えない彼の雰囲気は見ているだけでも酔ってしまいそうである。しかしながら、四発目は平穏に終わらなかった。

何も無い場所から、一発の銃弾が音を立てずに彼が立っている屋

上の柵の下に突き刺さる。

思わず、細かい悲鳴を上げてしまった。見つかってしまったのだろうか？ いや大丈夫。

自分に言い聞かせ、うつ伏せになりながら、その場から立ち去ろうとした。

「日本のネズミ。とても賢い聞いた。でも、オタイより馬鹿ネ」

振り向く事すら出来ずに、皮が内臓が骨が全て破れていく音が聞こえた。

背中から、胸を大きな板で貫かれたような感覚。喉奥から、鉄の味をした液体が込み上げて来るのが分かった。息が出来なくなり、息を吐こうとすると赤い泡が口の下から零れでる。

胸から突き出ているのは、鉄を平たくして大刀の様にした凶器だった。その刃先を伝うようにして、真紅の綺麗な液体がコンクリートに染みていくのが目に映る。舌が痺れてきた。

「殺したのでは無いでしょうね？」

「そんな事しないヨ。デモ……このままにしておくの、良くないネ」
その会話を最後に、私の意識は完全に切れてしまった。

八話（後書き）

随分遅くなってしまいました、八話更新。
待ってた方。本当に有難うございます。

ゴールデンウィークには9連休が頂ける予定なので、その時に挽回
していききたいと思います。

どうも、今回も最後まで読んで下さいまして、有難うございます

九話（前書き）

毎度お待たせ致しました。

ようやく九話更新でございます。

楽しみにしていた方も、そうでない方も死街地忌憚の世界をご堪能下さいませ。

九話

瞬間、二つの銃口が向かい合った。まだ、向こうからの『開戦の合図』は無い。距離も遠く、此方からでも視界に捉えることは出来ない。ただ、人に紛れて漂ってくる硝煙の臭いが位置と距離を知らせてくれる。先ほどの狙撃者か、それとも別の飢えたカラスか。

相手は一向に撃つてこようとはしない。きつと、今から頭の中では、秒単位が時間単位に変わるだろう。これが三分も続けば、流石に精神的に参ってしまうかもしれない。

それでも銃口は下ろさない……下ろせない。今まで感じてきた中では、最高の恐怖感だ。この銃口の先に並ぶ目は、一体どんな狂気を混じえていることやら。

とは言え、此処で立ち止まっても何も始まりはしない。肩を揺らしながら、その方向へと足を進める。呼吸を浅くしながら、足音は立てずに。人と人の間を縫いながら、猫の様に身体を踊らせる。後から付いて来るヨルも、私の真似をしながら追いかけてくる。

向こうから動く気配はなく、ただ奥の闇に紛れながら立ち竦んでいるだけのようだ。

気味が悪い。

銃口を再び前へと向ける。

銃口の先に、獣のような金色の瞳が光る。身を返しながら、距離を置いて容姿を眺めた。月を背にして、私の顔を睨みつける目が細められ、口元が緩められる。背格好からして、私より少し年下の少女であろうか。その行動一つ一つが艶やかで、妖しげである。

手には、彼女の身体に見合わない、地に付く程のライフル。

そんな彼女に見惚れている間に、その銃口が前を向き、地鳴りのような咆哮が商店街に轟く。耳の横を吐き出された鉄の塊が横切り、頬に抉ったような跡を残して、背後の壁に喰らい付き、弾けた。その顔に艶やかな笑み等、一切無くなっている。

その代わりに、蛇のような雰囲気を纏いながら、追撃の準備を流れるように進める。

耳の奥を撃ちつける物を抑え付けて、私は頬を伝い、流れてくる血を舐め取り、撃鉄の上がつたイーグルの銃口を目の前にいるケモノに向けた。狙いは良好、外れはしない。

気に食わない。肌を傷つけた事より、壁を壊した事より、そんな事よりも。

「私は起きた後の目覚ましと、胸のある女は嫌いな」

二つの咆哮が交合わさり、先程まで静寂のに飾られていた夜の街をカーニバル会場へと変貌させる。一方的な砲撃は普通、二発同時の発砲音は死合いの合図。

金の両眼が揺れ、硝煙と共に身体を柔らかに使い、忍び寄る。そして、一瞬と経たぬ内に喉元に銃口を押し付けられた。無駄な動きなど一切無く、精錬されている事が一目でわかる。

「随分な口を叩いた割には、銃の腕前は人並み以下ですわね？」

皮肉の様に、冷やかに言い放たれた言葉。それも、彼女の表情には似つかわしくない、柔らかな口調で顔を見上げる。反射的に身体を離そうとするが、それに合わせ向こうも離される事を良しとしない。舌打ちをし、後に構えていた左足を振り上げ、銃身を踏んだ。それを足場に、上へと跳躍し逃げる。ついでに、右足で頬に『置き土産』を添えて。

空中で反転した後、四肢を地面につけるようにして着地。上体を戻し、口許を緩める。

しかし、彼女は動揺した様子も無く、無表情のまま後に反らしていた上体を起こし、ライフルを両手で構え直した。それは傍目から見れば、綺麗な物だったろう。まるで、人間離れた身のこなしだったのだから、魅入られるのも不思議では無い。

だが、それも第三者から見ればの話だ。私にとって、彼女は化け物としか見えない。

間を取ったのは、失敗かもしれない。ライフルの一撃を受けるの

は流石に辛い。

イーグルを構え、いつの間にか荒くなっていた呼吸を整える。

「あら？ 貴方こそ、銃の腕と違って運動能力は皆無のようで？」

皮肉をこめて、言葉使いを真似て挑発するが、向こうは耳栓でもしているかのように動じない。いや、実際に銃声に耐える為に精巧な耳栓を装着しているのだろうか。

せめて、感情を露わにしてくれば、少しは有利に事を進められたろうに。

「人形さん、は。オモチャ箱で寝てる！」

三度目の咆哮と共に、イーグルが跳ね上がり、その反動が肩へ伝わる。

これで残数は六発。かなり不味い状況であるのは、確かだ。やはり、奇襲に備えてマガジンを余分に用意しておくべきだったかもしれない。と、後悔しても虚しいだけだ。

命中した事を願って、着弾したであろう人影を見据える。しかしながら、その願いも無意味だったようで、月光を纏った影がゆらりと揺れて無事を知らせた。長期戦に持ちれ込みたくは無いし、かと言って一発で倒れるとは到底思えない。と、なれば残る選択肢は。

「ヨル！ 撤退するから、早く下がって」

叫び、ヨルの腕を掴んでヨルの路地を駆ける。

いつの間にか、集まってきたギャラリーが煽り文句を飛ばしている。中には顔見知りの住人達も居る様だが、私を助けるつもりは特に無いらしい。まあ、期待なんてしないけど。

もう一段階スピードを上げると、背後から、ヨルの間抜けな悲鳴が上がった。

「後から、撃つてく……死ぬ！ 死ぬから」

分かってるから、そんなに暴れないで。

流石に私も、完全無欠の機械少女と真正面から張り合う義理などない。

いや、それよりも腑に落ちない事が数点ある。本当に小さな物だが、凄く奥の方で引つ掛かっている。

あの時の狙撃は例えるなら、鷹の様な銃撃だった。殺気を晒すことなく、引き寄せられるように、私たちを縫うようにして銃弾が撃ち下ろされた。しかし、彼女の放つ銃弾は飢えた猛獣の様に、嫌と言うほどしつこく追いかけて食らいついてくる。質が全く違う。

今も向こうは走り回り、追い詰めるように私の後ろを付いて来ている。

もう一人いる。一対一の銃撃戦じゃない。第三者か、それか女の仲間だろう。

どちらにしろ、不利な事には変わらない。できるだけ二人から離れたいが、長距離ではライフルで狙われて側頭部を打ち抜かれるのがオチ。出来るだけ高速で移動できるもの……は。

「ヨル。前方にある青いセダンに乗り込むから、あなたは運転をお願い」

「またカーチェイス？ 逃げ回るのは好きじゃないんだけどね」

「そう。それじゃ」

プラスチック製の窓を叩き割り、そのまま中の助手席にいる男の横頭に捻じ込むようにして、銃口を押さえつける。

「ここから、攻めに転じるとしましょうか」

男の両手が上がリ、苦笑いと共に自動小銃が数滴の血と共にシートの上に落ちた。

そして、そのままの状態の手早くシートの間隙から後部席へ移るその隙を見計らって、ヨルが運転席へと乗り込み、差し込んでいたキーを回す。

「ああ、いけないヨ」

唸るようなエンジン音が耳に届き、そして。

そして、予告も無く身体が後ろへと倒され、後頭部に柔らかな衝撃が響いた。シートがクッションになったのだろう。脳震盪にはならなかったものの、頭に思い何かが乗ってるような感覚が湧き上が

る。ヨルの方も突然の発進によって、小さな悲鳴のような声を上げていた。

ただ、前に座っている男は能天気な表情のまま、嘲笑うような笑みを浮かべている。

「それ、オートだからネ。オタイも止め方わからんヨ？」

崩れていた身体を叩き起こし、声がした方を睨みつける。そして、ヨルの肩越しに見える速度メーターを横目で捕らえ、確認する。針は上まで振れ上がっていた。外を見ると、トラックが揺れることなく横を並走している。数秒で此処まで加速できたら大した物だ。それどころか、障害物や一般市民も巧みにかわしながら、ヨルの街を無灯火で疾走している。

数十年前に作られていれば、ノーベル賞ものだっただろう等と思わず感心してしまう。

「この車。何処にいくの？ あいにく、ヘル・オア・ヘブンなんてギャグは好きじゃないわ」

男は無言のまま、前方の看板を指差し妖しく笑む。

そこには、大きく『この先、千代田区』と書かれていた。

ああ、またあそこへ赴けと言うのか。内心、溜息と安堵が口から零れた。

運転席に座っていたヨルも気が抜けた様子で、シートに背を預ける。

「それは良かった。そろそろ、還りたかった所なんだ」

まるで、ふたつの声が重なった様に車内を震わせていた。

きっと私は狂っていたのだろう。あんな場所は二度と御免だと思いながらも、片隅ではもう一度だけあの場所へ帰りたいかった。もしかすると、逆なのかもしれない。それはいつからだったろうか、ヨルと出会ったときだっただろうか、ヨルの血を舐めた時だっただろうか、それとも頭が壊れてしまったのだろうか。ああ　狂っているだけなら。

狂っているだけなら、ただ求めるだけで良かったのだ……在り得

もしない居場所を？

ヨルの横顔が視界に写る。その顔は、とても綺麗で嬉しそうで寂しそうだつた。

今から鏡を覗けば、そんな表情が目の前に写るのだろう。

「よーそんな顔が出来るもんやネ。見知らぬ場所へ連れてかれるかも知らんのに」

「知らない場所じゃないもの」

間抜けな声が男の口から落ちて、音を立てる。

何処からか、ネコの鳴き声が聞こえた。

「だって、私にとってあの場所は」

ああ、やっぱり私は狂っている。

ひやりとした空気が頬を撫でる。数日前に来たばかりなのに、なぜか懐かしさを感じる。

コレが既視感というやつだろうか。なににせよ車から降りた瞬間、とても安心感を覚える事が出来た。まるで、ここが生まれ故郷であるかのような錯覚さえも覚える。

もしかしたら、案外そうなのかもしれない。

小刻みの足音が聞こえ、そちらを振り返った。あのライフルを背負った獣の目をした女。

その桃色の唇から、綺麗な音色が奏でられることはあるのだろうか。

「ありがとうございます、リンシャオ。不躰な招待で申し訳ありませんわ」

いや、全くだ。だが怒る気にもなれず、運転席で寝息を立てていたヨルを引き摺りだした。まあ、いきなり夜型に転換しろと言っても無理な話だろう。眠そうな目を擦りながら、車から這うようにして、小さい唸り声と共に地面へと降りてきた。

そして、ようやく立ち上がる、と共に私の肩へと倒れるようにして凭れ掛かる。

その様子を見て、女の方が口を開き……閉じる。その動作を数回した後、隣から褐色の男が　リンシャオというようである　が、フォローするように話し始めた。

「ドーモ。オタイ、リンシャオ言います。この方は寧。ふかさわ深澤　寧ねいで
す」

「ん……そう言うことです。以後、お見知りおきを」

咳払いをして、女　ネイ　は頬を赤く染めながら、頷いた。
さっきまで暴れていた様子など、内に隠れてしまったかのように
穏やかである。

例えるならウサギ、小鹿、まあ人畜無害な小動物っぽい印象である。少し堅い言葉づかいではあるが、家柄の都合というやつなのだろう。むしろ微笑ましいくらいだ。

「さて。じゃ、詳しく聞かせてもらえないかしら？　それとも」

刹那、轟音を立て五台近くのトラックやワゴン車が対地ミサイルの如く突っ込んできた。

「この人たちに、教えてもらえるのかしら？」

土煙の止まぬ中、全ての車のドアが開け放たれ、黒いサングラスとスールを纏った男たちが降りて来た。全員の手にも重火器や象を一撃で撃ち殺せるような、大口径のライフルを携えている。まあ、随分とベタな演出をしてくれたものだ。

服装からしてアメリカ……いや、ドイツ軍か。最近は無粋な異国者が増えて困る。

その集団の中から、頭が剥げている髭面の中年オヤジが姿を現す。体に緑色の軍服を身に纏い、舞台にでも上がるかのような、悠然とした態度でこちらに歩み寄る。

まるで、それは　『彼』が蘇ったかのような　そんな雰囲気。
こちら側の誰かが彼の名前を呟く。

それは何重にも重なって……だが乱れることなく、その場に留まった。

「新聞記者連れてこようか？　タイトルは一世紀の時を越え、ヒト

ラー復活？」

ヨルが冷汗を流しながら、しかし表情は変えず呟いた。

その声を見計らったかのように、ネイが車に顔を向け淡々とした表情で。

「記者？　なら居ますよ。その車のトランクで、血を流しながら眠ってますが」

何となく見当がついた。車の後ろへ回り込み、トランクを開ける。ホコリっぽい臭いと共に、中からロープで巻かれ、口に猿轡を噛まされた上に腹の真ん中を貫かれている、金髪の見知った顔が現れる。その情け無い姿に、思わず溜息が漏れた。

その目は見開かれ、懇願するような目で此方を見ている。

「用意周到ね。ま、仕方ないか」

その猿轡を外し、ワイシャツの胸倉を掴んで立たせる。

「良かったじゃない。今からスクープ映像が観れるわよ。私のストーカーやって初めての儲けじゃないかしら？」

彼の頭を軍服の男の方へと向け、目を開かせる。生理的な痛みか、それとも恐怖か、彼の目尻から大粒の雫が溢れ、頬を伝い、コンクリートの上に染みを作った。

彼の身体は震え、だが目を逸らす事も出来ずに、ただ男の方を茫然と見ている。

いや、それだけの感情でもないのだろう。彼は確かに見惚れていた。この街の情景と彼の放っている異彩の雰囲気。それらに彼は確かに見惚れていた。

ヒトラー“モドキ”の口が歪み、ドイツ語であろう言葉が降ろされた、その直後。

周りから破裂音が聞こえ、私達が立っている周りの地面が捲れ上がった。

掴んでいた手の先から、小さな振動が聞こえる。おそらく彼は失神でもしたのだろう。

だが、片方の“義眼”は気を失っていないらしく、あたりを見渡

すように動きまわっている。なら、と彼の身体を起こし、車のボンネットにその背中を預け、目を開かせ固定する。

「よく見ておきなさいな。これからの『狂劇』を」

言い終える前に、ヨルが私の横を抜け、二人の軍人の間に割り込み、そして銀色のナイフを振るった。

狂ったような叫び声が響き、地面に長さの違う、二つの腕が音を立てて落ちる。

そして、身体を揺らして、また次へ移動する。だが、その侵攻は赤い液体によって止められた。それは血とは明らかに違い、透明度が限りなく水に近い。例えるなら色水だろうか。

その色水は地面に溜まったただけだった。しかし、動き始めたヨルの横で、何かが産み落とされ、地面を這いずり回っている。虫……あの時の虫とは違い、丸々と太って今にも破裂しそうである。と、思った瞬間、そのうちの一匹の頭が奇妙な音と共に潰れ、あの赤い水が溢れ出してきた。その水は腐臭を運び、時折意思を持っているかのように揺れる。

それを何事も無かったかのように、ヨルは虫を踏み潰して、肩を垂らした。

そして、その淡い色を下唇から、いつもと違う低い音が発せられる。

「まだ、こんな事してたんだ？」

それは、彼らの横暴を咎めるような音楽を奏するように。そして沈黙。

「もう何年ぶりだっけ？　すごい偶然だね。また会えるなんて」

広場には、ヨルの低い声だけが響き渡る。

「貴方には感謝してるよ。この虫はとても良い」

そう言っただけヨルは横首から、太い管状の幼虫を引き摺りだした。細かくは観察できないけど、口の部分には無数の針が奥の方まで続いている。嫌悪感が背筋を襲った。

喉の奥から、何かが混ざり合っている液体が逆流してくる。

最初は、ただの撃ち合いだけで、最後には周りにピンク色の内臓を掻き出された死体だけが残されて終了。そんな、簡単な風に考えていた。だが、今の状況はどうだろうか。

ヨルを除いた三人が、蛇の女神に睨まれた様な、束縛された空間に閉じ込められていた。瞬きする事さえ出来ず、視界すら固定され、喉を動かすことも出来ず、呼吸すら支配される。それでも汗が流れる事は無く、苦しさを感じる事も一切無い。不思議なものだ。

不意に肩に重力が掛かり、がくりと膝が折れる。先程の感覚は完全に無くなっていった。

横には、ネイが三匹分の虫をつまんで立っていた。

「まったく。手癖の悪い人たちですわね。いつの間に“こんな”を付けたのですか？ 女性の肌を輕輕しく触るのは非常に不躰な事だと、習いませんでしたか？」

そう言つて、三匹の虫を握りつぶす。また赤い水がコンクリートを濡らす。

ネイの目が閉じられ、そして開かれる。あの獣の目が顔を覗かせた。

しかし例の中年男は、その様子に動じることなく、私が良く耳に入る言語で彼女に伝える。

「私達の祖の教えは、異国の女共は子を産む道具ですらないと言う教えなので、申し訳ない」

謝る様子も微塵も無く、そう卑下た応えを言い放った。カチリと横で撃鉄の上がる音がする。いや、私の手元の代物も、いつの間にか用意は万全だった。そして、二人分の溜息。

私は戦いが好きでは無い、怪我をするのは嫌いだから。私は殺し合いも好きじゃない、自分も死ぬリスクを負ってしまうから。だから、私は 気に食わない奴等への、一方的な殺戮は大好きだ。口許が緩むのがわかる。指が引き金に掛かったのが分かった。

さて、あと数分で此処に立っている事が出来るのは、何人だろうか。

「その黒ずんだ内臓を脇腹から引き摺りだして、このウィンチエスタで汚い尻を順番に犯して差し上げましょう。泣き喚こうとも叫ぶうとも、この檻からは出られませんわ」

「右に同じ。まあ、私は初心だからご期待に添えるかどうかは分からないけど」

二つの動作が重なり、そして弾けた。透明な赤いシャワーが降り注ぐ。

これは、コレ等は人間では無い。思う存分壊し続けろ、と私の中の何かが告げる。

その提案に思わず、私は笑みを浮かべてしまった。そうだ、あれは人間じゃない。

殺さなければ。壊さなければ。一つ残らず、消してしまわなければ。

何かの声が聞こえる。いや、あれはラジカセから聞こえてくるBGMだ。肉が避ける音が聞こえる。ちがう、あれは人形の布を切り裂いた音。何も気にすることは無い。

ほら、二つビー玉が地面に零れた。ほら、ピンク色の粘土が地面に落ちた。それに混じって黄色い綿が零れ落ちる。何も考える必要は無い。人形を壊せ、壊せ、壊せ。

いつもの様に躊躇無く、引き金を引けば良い。弾が無くなれば、爪で切り裂け。

どうやって？

昔はいつもやっていた。当たり前のように爪を立てて牙を剥き、獲物を食っていたじゃないか。だから、心配要らない。私は知っている。人間より高く跳べる方法を、早く走れる方法も、感情を押し殺して獲物を追い、息を止める方法も。だから、心配なんて要らない。横でネイがライフルを振るいながら、軍服を赤へと染めていく。

さあ、次で最後。しかし、叫びにも似た声が広場に轟いた。

「ストープ！ 待て、お前等。平和的な対話をしよう。いや、マジで。双方とも銃を収めてくれ、出来れば沸騰しすぎてる血の方も

収めてもらいたい」

声をした方にあるのは、毎週のように顔を合わせている無精髭を生やした親父顔だった。

倉谷？

自分の手を見てみた。ねっとりとした感触が腕を伝い、感慨も無く地面へと落ちる。

私は何をやっていた？ この愛銃で、この手で。

横目で地面を見る。上半身が欠けた人間と、そこから溢れ出るピンク色の臓器や、クリーム色をした脂肪の欠片が転がっていた。私は人形を壊してただけなのに。

私は何をやっている？

ヨルは淡い光が漏れている月を背に、呆然と立ち竦んでいた。だが、その顔には微かに笑みが浮かんでいる。彼は 誰だ？ 私が見知っている、無邪気な少年とは掛け離れている。一体、此処は何処なのだろう。私を知っている街なのか、それとも異国の町なのか。いつの間にか、私の頬は緩み、ヨルの笑みに応える様にして、私も笑みを浮かべていた。

悩む必要も無い。私は、私なのだから。私はやりたいようにしただけなのだから。

昔、倉谷に言われた言葉が少しずつ、霞んでいく。ああ、なんて言われたんだっけ？

確か、とても大切な言葉だった気がする。思い出したいのに、思い出したくない。

でも今は必要無い。だって、私はもう

なのだから。

九話（後書き）

それでは、予告しておきましよう十話は4月29日に更新します。
問答無用で。

それを含め9日連続で更新予定でございます。
勿論、容量は同じです。ご期待くださいませ

十話（前書き）

遅くなって申し訳ない。

期待してくれた方々、何度謝っても足りないくらいです。

十話

いつの間にか、周りの冷たい喧騒は鎮まっていた。

私は霞んでいる目で間に立つ倉谷を見る。

「よし、それで良い。ここは俺が預かるう。あーストップオーケ？」
横に目を向ければ、相変わらず髭面の親父が卑下た笑みを浮かべ、
血の海に立っている。

手の向こうに、愛用している銀光を帯びた銃が見えた。もう、持
つ気力は残っていない。

と、いうより。もう、撃つ気になんて、なれない。

がちやりと、鎖の落ちる音がした。違う、あれは撃鉄を引く音。
遠くから聞こえる。

木のテーブルが軋む。違う、あれは引き金を引く音……逃げる？
どうして。

このまま、堕ちてしまえばいい。もう銃が持てないのなら、もう
人が殺せないなら、私がこの地を踏んでいる事は、まるで無意味な
のだから。だから、私の居場所は要らない。

これで良かった。多分、きっと。こぼりと言う音と共に、血が顔
に張り付いた。

いつも感じている、生温かく心地良い液体。それが目の前で横に
滑った。

あまりに呆気なく、その色は地面に落ち花を残す。乾いた笑い声
が自身から漏れ、生温かい空気に白を作った。目の中が焼けたよう
に熱くなる 開いてはいけない。

何かが、膝の上に落ちてきた 見ては、いけない。

「殺さないって、言ったからね」

頬の上で糸状の動く物が暴れている。冷たく、針金のような物が
這っている。

「だって君は。僕と同じ」

『夜の住人』

思考が赤い海に沈んでいく。指を動かす、赤が濁る。目を開く、赤が濃くなる。

浮上は出来ない、沈むだけ……いつの間にか、何かに手を当てていた。そつと撫でてみると、それは温かな熱を帯びて、私の手を触った。もう一度触ろうとすると、それは後へ逃げる。追う様にして、私は前へ進む。泳いでもいない、歩いてもない。しかし、進む。

そして、私はその肩に手を伸ばした。弾くようにして、向こうが振り向く。

黒い、黒曜石の色をした絹糸が私の睫毛を掠める。キンモクセイの香りが鼻を攪り、氷を打ったような綺麗な音色が耳に届く。そして、無邪気に笑う少女の笑顔が眼に写った。

それは見慣れている顔。また乾いた笑い声が零れる。きっと、私は壊れている。

首に腕を回し、抱きしめようとした瞬間。彼女は崩れるように消えていった。

その残滓は赤に流されて、散っていく。その様子を私は無言で見守った。

黒い点が視界を遮る。染みのように汚れた黒が大きく、小さくなりながら上下する。

邪魔だ。

手を伸ばし、親指を架空の撃鉄に掛け、人差し指を曲げる。ガチリと鉄が噛み合い、手の平から熱が遠ざかる。手首を固定し、息を止め黒い点を睨み付けた。

聞き慣れた、心地良い破裂音は身体に染み渡り、赤い海から引き揚げる。

「ああ、やっと」

やっと此処に、この場所に。

「帰ってこれた」

向こうで黒い人影が、赤い液を散らし地面へ花弁を落とす。

手には持ち慣れた冷たい感触。目の前には、腕が爆ぜた部分を虫で修復しているヨルの姿が写る。ああ、なんて懐かしい。手を伸ばそうとするが、足が動かずに彼の背中に抱き付くような風に倒れこんでしまう。温かい感触が身体に走り、腕を首に回す。

「まだ、使い方が良く判らない」

整った顔から、クスリと小さな笑みが零れ、手首を包まれる。

不意に何か布のような、水のようなもので目を覆われる。あの、赤い空間が広がった。

また、幾つかの黒い染みが揺れている。それを獲物を狙うネコのような目で追いかけ、そちらの方へ手を誘導される。そして、重なった手に圧迫感を感じ、指を引く。破裂音がした後、黒い染みは潰れて赤を濁していく。そして、何も無かったように溶けていった。さ、もう一回。その後から言われ、私の身体は彼から外される。

手が離され、視界が元に戻る。擦り抜けていった温もりを愛しく思う暇もなく、私は再び目を閉じ赤い海に身を沈める。黒い染みの幾つかが、八方に揺れた。それに焦点を合わせ、弓の弦を引くように赤い線を伸ばす。早まっていた呼吸を整え、トリガーを引く。

黒い染みがブレて、逃げるように大きく横に揺れる。外した。

「追わなくてもいい。目じゃなくて、空気だけで捕らえられるから」
今度は目を閉じ、頬を撫でている絹の先を狙う。

また、手の甲に柔らかな感触が広がった。水が弾ける音と一緒に、赤が濃くなる。

「記録ディスク、消失してもたヨ。運悪かったと思うしかないネ」

遠くから、聞きなれない声が響く。

「それは、仕方ありませんわね。別に良いでしょう、それでも十分の一は入ってきます」

ああ、そう言えば変な二人組に絡まれていた気がする。少しずつ頭の中がクリアになっていき、今の状況をようやく把握した。懐かしいような、ずっと見てきたような微笑が横目に写っている。目があつた瞬間、布のような白い手で髪を撫でられ、瞼が落ちた。

すると、彼はクスリと笑い、手に髪を一房掴んで口付ける。まるで、昔読んでいた絵本の王子様のようで、あまりに似合っていたから、思わず笑いが込み上げてしまう。

それを察したのか、彼は拗ねたような表情で私を正面から見据えている。私は彼の真似をするように、その茶色く跳ねた毛を手で梳いた……さつきから周りの視線が強くなっている気がする。

「……仲が良いとは思っていたが、うーん。恋すると性格まで変わるか。父さん悲しいぞ」

「誰が父親？」

掠っただけか。少し、腕が下がったかな。

「ん。さて、と。放つたらかしにして御免なさいね。ヒゲの人」

「素晴らしい。すばらしい、すばらしい！ いや、まったくだ」

振り向いた先には、その丸まったヒゲを揺らしながら馬鹿笑いをする、あの男。緩んでいた手から、銃身が抜けるようにして地面へ落ち音を立てた。握力、弱くなってる？

どうやら、日本語は通じるようだが、どうにも普通の話し合いは出来そうも無い。まあ、いきなり頭を貫くまでも無さそうだし、後で縛って尋問なり拷問なりで口を割らせるかな。

その意を察しているのか、ヨルが横で苦笑いをしながら、私が落とした銃を差し出してくる。ご丁寧に撃鉄まで上げてくれている上に、新しく弾も装填してくれているようだ。さつき持ったときより、少し重たく感じる。その銃身を上へと掲げ、指を引いた。

あの狂信者に聞こえるように、その腐って虫の巢食った脳髓に響き渡るように、地面を打ちつけるような轟音が響く。火薬を目一杯使った弾薬なのだから、コレが聞こえない奴は耳が無い奴か、幻聴の酷い奴くらいだろう。目の前の男は、後者だったようだ。

ひたすら、見えない何かを褒め称えるように、賞賛の言葉を繰り返し、口の端から泡が出て拭おうとせず、ただひたすら飛び跳ねながら踊り狂っている。まるでナチス時代にヒトラーの後を追っていた兵士たちのようだ。といっても、誰も文句を言わないだろう。

段々、向こうも息苦しくなってきたのか、笑い声も途切れ途切れに鳴っているが、何故か空気を求めようともしない。車のボンネットの上で見物していたネイが大きく息を吐く。

まあ、こうなったら、聞き出せそうにも無い。撃ち殺してしまっても良いだろう。

舌を垂らしながら、だらしく笑っている男の頭に標準を移す。が、それをヨルの手に遮られ、文句を言おうとした瞬間、横を擦り抜けて男の前まで駆け寄って。

「ねえ。ちよつと話あるんだけど。聞いてよ」
はみ出ている舌にナイフを当てていた。

「この虫、此处に落としたのってアンタなの？」

舌から赤が混じった涎が垂れ、それでも男は笑っている。

「ミケちゃんに植え付けたのもアンタ？」

当てていたナイフに、ぬめりとした舌が這う。その隙間から笑い声が漏れて、消えた。

「じゃ、良いよ。こっちに聞くから」

笑い声が漏れていた口の中に、ナイフと拳がズブリと沈み込み、地飛沫と共に引き抜かれる。白い虫が数匹ほど零れ落ちて、その衝撃で水を吐き出しながら弾け飛んだ。

肉は普通の人間の半分に減り、骨は溶けたかのようにスカスカになっている。血はまるで、人の血では無いような薄い桃色に変色していた。その水溜りに、死ななかった虫たちが群がり、皿に注がれた血を見せられた吸血鬼のように、必死に争い齧っている。

ヨルは、その中の太って丸くなった虫を手此方に戻ってきた。そして、車のライトに背を乗せていた例のストーカーの元へと歩み寄り、その首筋に虫を乗せると川を食い破り、中へと潜っていく。勿論、その様子を間近で見た倉谷は昏倒寸前だ。まあ、気絶しなかなただけ良い。

「これは、どうなるのですか？」

「この虫は、記憶を腹に溜めてる虫だから。人に移れば記憶も移る

んだよ」

「脳を操作するカマキリの寄生虫みたいなもんやネ？」

そんなものなんだろうか……まあ、それが一番近いんだろうけども。

びくり、と虫を入れられた男の頭が跳ね上がった。多分、脳髄を食っている最中なのだろう。首筋のあたりが盛り上がって、傷口から白い液が漏れて背中伝いに筋を作っていた。

「っていうか、ミケちゃんの知り合いなんだっけ。今更だけど、良いの？」

「べつに。しつこい追っかけが居なくなって嬉しい限りよ」

それに、コイツに対する記憶が記録になってしまっている。いつ、そうなったのかは分かっているけど、何故そうなっているのかは判らない。とにかく、私は彼が弄られている事に何の感慨も浮かばないのだから、それはそれで良いのかもしれない。きっと、私の記憶は白紙に戻されたのだと思う。でも何故か、倉谷の事は辛うじて、頭の片隅に残っていた。色濃い記憶は留まる、と言う事でもないのだろう。

それなら、ストーカーの事も覚えていておかしくは無い。私の記憶が本当に虫に食われたのなら、今の私は誰の記憶を使っているのだろう。見たことの無い少女か、野菜を打っているオジサンか、それとも動物か……ネコ。暗い路地裏から、ネコの鳴き声が聞こえた。そちらへ、駆け寄り両角を見るように目を泳がせる。いた、灰色のネコ。首輪、してる。

抱きかかえようとすると、爪を立てられ唸られた。そして、地面に下りると元いた場所で蹲る……頭の後ろが弾けた三毛猫を、大事に抱えながら 目を閉じた。

もう一度、触ってみる。今度は威嚇される事無く、首に手を回すことが出来た。その場から、少し動かして三毛猫の身体を見ている。まだ、胸の部分は微かに熱を帯びており、先程まで生きていた事が分かった……この仔、なのだろうか。だとしたら、悪いことをして

しまった。ふと、目を開けた灰色のネコと目が合う。その目は黒く透き通っており、微かながら懐かしさを覚えた。

このままにして置いてあげようか。そう思って踵を返したのだが、灰色のネコはいつの間にか私の足元に擦り寄ってきた。ネコは気まぐれと言うが、あの三毛が可哀想だろ。

そんな事を言っても、ネコに分かる訳が無い。まるで、あの三毛猫と知っているかのように、彼は私の足に尻尾を巻きつけながら付き纏っていた。思わず、溜息が出てしまう。

仕方ない、別にあのマンションに制限も無い訳だし、飼ってみるのも良いかな。

ヨルも流石にネコには嫉妬し無いだろうし。

「ミケちゃん。こっちは準備オーケーです」

「っていつても、言葉が判らないのでは意味が無いでしょうに」

ヨルの間抜けな呼び声を追うように、ネイの上品な突っ込みが入る。

まあ、元がドイツ人だしね。分からなくて、当然だと思う。

横に人形のように転がった頭の口からは、ドイツ語らしき発音が延々と流れている。その横には首の無い、だがコードのように伸びたタンパク質の糸で、首と繋がっている胴体が足を伸ばした状態のまま放置されている。もし、このままの状態で意識を取り戻したら、その前に信号伝達が出来てないから、痛覚も感じないのだろうけど。

紙一重、藁一本で繋がっている胴体に、倉谷が手を乗せた。

「シロの姉さんに聞いたら、分かるんじゃないの？ 医学習ってるんだろ？」

確かに、あの部屋には医学の本が何冊かあったけれど。あんな人が、ドイツ語読めるのか少し心配なただけだ。

「あら。貴方達はシロさんをご存知なのでしょうか？」

なんか、あんまり驚けないのはシロ関連だからって思いたい。

あいつが、総理大臣と知り合いだと言われても信じれるくらいだ。

何せ、裏で色んな事してるって噂が何処からとも無く囁かれてるし、数年前は数億くらいの金を騙し取って、その会社を買収したと……ちなみに、この時は私も横で見ていたので正確な情報だ。

それもノートパソコンと携帯電話と公衆電話だけを使い、手の上で躍らせていたのだから、かなり巧妙な手口だったんだろう。機械音痴な私には何をやっているかは、分からなかったけれど、すごい事を行っている事は充分に分かったし、彼が裏に通じていると言う事は私が保証できる。あいつも、大人しかったらコート以外は普通の男なんだろうけども。

ま、話も進めなきゃいけないし。

「取り敢えずは知り合いよ。それで、アンタ達は？」

「雇われたのですよ。貴方の記録ディスクを持ち帰るように、と」

記録ディスク……何それ？ まあ、よく判らないのは昔からだし、別に良いけど。

私は頭を手に取り、倉谷に投げ渡す。白い糸はゴム状に伸びて、切れる事はなかった。

「それじゃ、行きましようか。リンが運転　で良いわね？」

立ったまま気絶している倉谷を除き、ほぼ全員が頷いた。

やっぱり、肝を鍛えてやったほうが良いかもしれない。私は助手席のドアを開け、シートへと腰を降ろす。その後を追うようにして、灰色のネコが私の膝に座った。

このネコの名前も、そのうち考えないといけないかな。

横では、ヨルが犬の様に唸りながら、私の膝を睨んでいた。

「うー僕が座りたかったのに」

子供みたいな事を言わないの……やっぱり、ネコでも拗ねるか。

私は息を吐いて、目を閉じた。やはり、赤い世界は見えなかったが、変わりに小さな光がぼつぼつと見える。瞼越しから見る街の光は、いつ見ても綺麗だ。ぼやけていて、形が無くて色も判別できないけれど、その不完全さが私は好き。だから、いつも車の助手席に座る時は、目を閉じて耳を遠ざけて無音の世界で縋るように、光を

見ていた。

そして、いつも横には 誰だっただろうか。とても、大切な人だったのに。

涙が零れ、頬を伝う。ああ、やっぱり私は何かを失ったのだ。とても、大切な場所を。

いつの間にか瞼は落ちて、意識が底へと沈んでいった。

きっと目が覚めた時、私は私ではなくなっている。そんな確信を抱いて。

私はその日、私を亡くした。そして、再び私を手にも容れた。

違う身体を貰った訳じゃない。違う記憶を手に入れた訳じゃない。

それでも、私は別の記憶を糧に此処に立っている。だから、きっと私は影の部分に立っているのだろう。真っ暗な木陰の下、一人でその時を待っているだけの私だ。

だから手を伸ばしても、手を伸ばしたくても、私には掴まる物など、何も無い。

助ける事も無く、助けられる事もなく、ただ私は怨むように鉄の銃弾を撃ち続けよう。

そして、もし許されるならば、この汚れを纏った身体を無くしてほしい。

そして出来るならば、再び彼と一緒に過ごせる事を夢に見たい。

だから、もし私に少しでも手を差し伸べてくれるならば、この身体のまま眠らせて欲しい。

路地裏の三毛猫の目が再び、安らかに閉じられた。

十話（後書き）

前書きでも書いたように、本当にすいません。

言い訳になってしまいましたが、田植えの4日連続で完全に朽ちてました。

容量も少ないです。でも最期のラストスパートとして、今日を含め3日間だけ連続更新したいと思います。

それから、毎回立ち寄ってくれている方。本当にいつもありがとうございます！とても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3972a/>

死街地忌憚

2010年10月28日04時13分発行